

# 史跡鰐淵寺境内発掘調査報告書 1

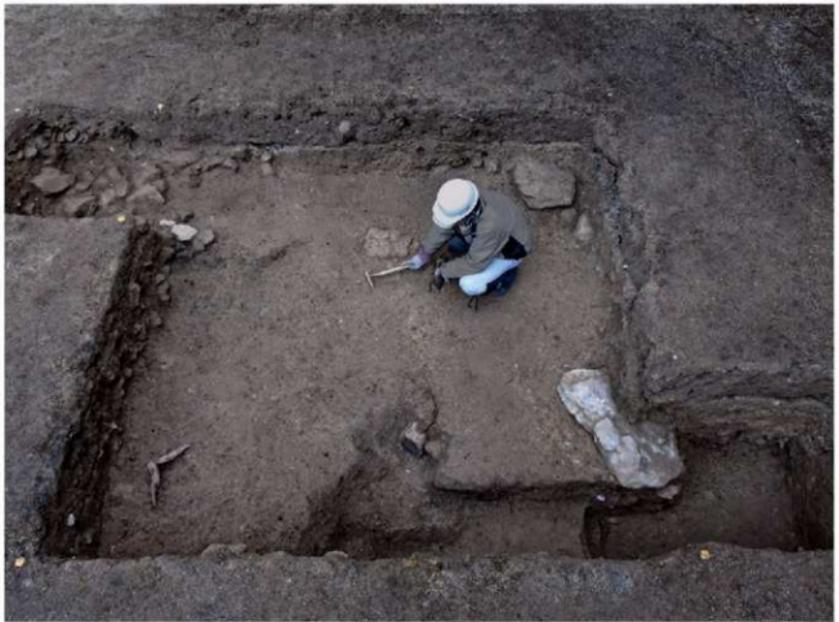
2022年

出雲市教育委員会





1 根本堂西側の護摩堂跡・護摩堂前調査状況（南東から）



2 護摩堂跡 4 トレンチ第 2 遺構面確認状況（北から）



3 积迦堂（A-3 平坦面）基壇調査状況（北東から）



4 本覺坊跡（A-27 平坦面）調査状況（東から）

# 序

秋、いろはもみじで有名な浮浪山鰐淵寺は悠久の歴史をもつ天台宗の古刹です。

平成 21 年（2009）から開始された総合調査により鰐淵寺の歴史的価値の高さが再認識され、平成 28 年（2016）3 月 1 日の官報告示により「鰐淵寺境内」として国史跡に指定されました。

国史跡指定後も課題として残された境内各所の発掘調査を実施しました。調査では鰐淵寺の古代から近世に至るさまざまな知見を得ることができました。その調査成果をまとめたのが本書です。

本書が地域の歴史ひいては日本における山寺の歴史解明に寄与するものとなることを願います。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただきました鰐淵寺調査指導委員会の皆様、関係者の皆様、ことに鰐淵寺住職佐藤泰雄様に厚くお礼申し上げます。

令和 4 年（2022）3 月

出雲市教育委員会  
教育長 杉谷 学



## 例　言

1. 本書は、平成 29 年度（2017）から令和 2 年度（2021）まで 4 幹年にわたり出雲市教育委員会を調査主体として実施した島根県出雲市別所町に所在する史跡鰐淵寺境内の発掘調査報告書である。

2. 調査は、下記の体制で実施した。

出雲市市民文化部 次長兼文化財課 課長	木村 亨（平成 30～令和元）
同	片寄友子（令和 2～3）
同文化財課 課長	佐藤隆夫（平成 29）
主査	大槻智徳（平成 29～令和 3）
同文化財課 課長補佐	景山真二（平成 29～令和 2）
同 課長補佐	原 俊二（平成 30～令和 3、調査員）
同文化財課 主任	石原 聰（平成 29・令和 3、調査員）
同文化財課 副主任	景山このみ（令和 2・3、調査員）
同 副主任	黒田祐介（令和 2・3、調査員）
同 調査補助員	永見 翼（平成 29～令和元）
同 調査補助員	長岡伸幸（令和 2・3）
同 調査補助員	和田守祥吾（令和 3）

3. 史跡鰐淵寺境内調査指導委員会（敬称略・令和 3 年度の所属）

平成 30 年（2018）4 月 1 日から令和 4 年（2022）3 月 31 日で下記の方々に委嘱した。

委員長	上原眞人	京都大学名誉教授
副委員長	井上寛司	島根大学名誉教授
委員	荒木 隆	鰐淵自治協会会长
委員	佐藤泰雄	鰐淵寺住職
委員	田中哲雄	日本城郭研究センター名誉館長
委員	松本岩雄	元島根県文化財課長
委員	和田嘉宥	米子工業高等専門学校名誉教授
委員	花谷 浩	前出雲市市民文化部学芸調整官

4. 報告書作成にあたって、下記の方から玉稿を賜った（敬称略）。

渡邊正巳・奥中亮太（文化財調査コンサルタント株式会社）

5. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々にご指導、ご協力いただいた（敬称略）。

島根県教育庁文化財課、（株）内藤組、飯塚建築、出雲市立平田図書館、勝部智明・仁木聰・稲田陽介（以上島根県文化財課）、西尾克己（松江市史編纂委員会松江城部会長）、榎原博英（浜田市教育委員会）、伊藤創（前江津市教育委員会）、岡崎雄二郎（前松江市教育委員会）、乗岡実（前岡山市教育委員会）

委員会), 烏谷芳雄(元島根県立古代出雲歴史博物館), 高橋誠二(雲南省教育委員会)

6. 作業について、下記の方々にご協力いただいた(敬称略)。

#### 発掘調査

荒木陽、荒木嘉生、安食浩好、大輝正人、岡田光司、奥田利晃、清水巖、星野篤史、持田直人

#### 整理作業

荒木恵理子、妹尾順子、中島和恵、前島浩子、吹野初子

7. 本書の執筆者については、文末に記す。編集は、原・石原が行った。  
8. 本書に掲載した写真は、調査員が撮影した。  
9. 本書に掲載した遺物の実測図は、調査員と調査補助員が作成した。  
10. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。  
11. 発掘調査の記録は、遺構の平面図作成や遺物の取上げ等には、株式会社 CUBIC の遺構調査システム「遺構くん」を用いた。  
12. 本文中に略記号を使用している。下記のとおり。

#### 遺構略記号

SB : 建物, SD : 溝, SK : 土坑, SP : 柱穴・ピット, SS : 磐石, SW : 石垣, SX : その他

- 遺構番号は、遺構略記号+平坦面番号+遺構番号の組み合せで表す。たとえば、護摩堂跡の場合では、平坦面番号(A-5)なので、土坑SK501となる。遺構番号も、平坦面ごとに振り直す。
13. 出土遺物は鰐淵寺の所蔵であるが、現在、出雲市文化財課(出雲弥生の森博物館)で保管している。調査で作成した測量図をはじめとする図面類、写真資料は、出雲市文化財課で保管している。
14. IV・Vページの絵図Aは、江戸後期(18世紀後半~19世紀初めころと推定)の木版絵図、VI・VIIページの絵図Bは、明治(1902)発行の『出雲鰐淵絵図』である。
15. 井上寛司編『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究―日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために―』2009(平成21)年度~2011(平成23)年度 科学研究費補助金 基礎研究B(課題番号21320123)研究成果報告書については、本文中で『科研報告書』と省略して引用する。
16. 石原聰・宍道年弘・野坂俊之・三原一将編 2015『出雲鰐淵寺埋蔵文化財調査報告書』(出雲市の文化財報告書28)については、文中で『前報告書』と省略して引用する。
17. 宗教法人鰐淵寺2021『国史鰐淵寺境内建造物(釈迦堂・開山堂)保存修理工事報告書』については、本文中で『修理報告書』として引用する。
18. 本文中で用いる鰐淵寺文書の文書番号は、下記の図書による。

鰐淵寺文書研究会 2015『出雲鰐淵寺文書』法藏館

井上寛司 2018『出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書』法藏館

19. 各遺物の編年については、下記の報告書・資料集を参考にした。

#### 貿易陶磁器

九州歴史資料館普及会 1978『九州歴史資料館研究論集』4

日本貿易陶磁研究会 1998『貿易陶磁研究』第1号~第5号(合本)復刻版

藤原久良採集陶磁資料調査研究会 2010「島根・富田川河床遺跡の研究－藤原久良氏採集資料(Ⅲ)

『古代文化研究』No.18 島根県古代文化センター

#### 国産陶磁器

木村孝一郎 2011「越前焼の編年研究と生産地の動向」『第10回山陰中世土器検討会資料集』

山陰中世土器検討会

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

乗岡 実 2008「備前焼の編年について」『第7回山陰中世土器検討会』山陰中世土器検討会

乗岡 実 2013「中世備前焼の水屋甕」『山陰中世土器研究I－西尾克己さん還暦記念論集－』

山陰中世土器検討会

八峰 興 2013「山陰地域から出土した中世後期の「威信財」について－瓦質土器を中心に－」

『山陰中世土器研究I－西尾克己さん還暦記念論集－』山陰中世土器検討会

吉田 寛 2003「中世大友府内町跡出土の产地不明焼締陶器について」『貿易陶磁研究』23

日本貿易陶磁研究会

#### 土器

足立克己 1999『姬原西遺跡』島根県教育委員会

宍道年弘 2015「第7章総括 第3節鰐淵寺の陶磁器・土師器」『前報告書』

高橋 周 2014「中世出雲西部における底部ケズリ土師器と京都系土師器皿」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第4集 出雲弥生の森博物館

平石 充・三代貴史 1999『古志本郷遺跡I』島根県教育委員会

廣江耕史 1992「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 松江考古学談話会

廣江耕史 2006「山陰における中世前期の諸様相」『第5回山陰中世土器検討会』山陰中世土器

検討会

宮澤明久他 2007「余小路遺跡・小畠遺跡」島根県教育委員会

#### 錢貨

永井久美男 1996『日本出土錢總覽』1996年版 兵庫埋藏錢調査会

#### 瓦

花谷 浩 2015「第4章分布調査 第4節発掘調査の採取遺物・2瓦(2)出土瓦の概要④丸瓦」

『前報告書』

花谷 浩 2015「第7章総括 第5節山陰の中近世瓦からみた鰐淵寺」『前報告書』



絵図A (江戸後期の絵図) (1)



絵図A（江戸後期の絵図）（2）



絵図B（明治期の絵図）（1）



絵図B (明治期の絵図) (2)



鯉淵寺の位置 (1 : 80,000)



鯉淵寺の位置 (1 : 50,000)

## 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過.....	2
第2章 鰐淵寺の位置と環境.....	5
第1節 鰐淵寺の位置.....	5
第2節 歴史的環境.....	6
第3章 境内の過去の調査.....	11
第1節 国指定前の分布調査・発掘調査・石造物調査.....	11
第2節 A-62 平坦面の調査.....	23
第4章 発掘調査.....	27
第1節 調査の目的と方法.....	27
第2節 釈迦堂（A-3 平坦面）.....	31
第3節 護摩堂跡（A-5 平坦面）・護摩堂前（A-9 平坦面）.....	37
第4節 開山堂（A-28 平坦面）.....	61
第5節 本覚坊跡（A-27 平坦面）.....	75
第6節 恵門院跡・覺城院跡（A-32 平坦面）.....	91
第7節 防災施設整備事業に伴う発掘調査.....	99
附編 鰐淵寺境内図面.....	103
第5章 総括.....	107
第1節 根本堂平坦面の調査成果からみた境内僧坊の様相について .....	107
第2節 恵門院跡・覺城院跡の造成方法について .....	109
第3節 開山堂周辺の古代遺構や三重塔について .....	110
第4節 新たに出土した軒平瓦2種について .....	112
第5節まとめ .....	115

図 版

報告書抄録

## 挿図目次

第 1 図 調査指導委員会の様子	2	第 31 図 出土遺物 (5)	49
第 2 図 A 地区平坦面番号配置図 (1 : 2,000)	3	第 32 図 出土遺物 (6)	50
第 3 図 島根半島 (1:400,000)	5	第 33 図 護摩堂前 SD901 平面図・断面図	53
第 4 図 鰐淵寺の位置と周辺の遺跡 (1) (1 : 100,000)	8	第 34 図 遺構の配置	55
第 5 図 鰐淵寺の位置と周辺の遺跡 (2) (1 : 100,000)	9	第 35 図 トレンチ平面図 (試料採取地点)	55
第 6 図 和多坊跡平面図 (1 : 400)	17	第 36 図 護摩堂跡 1 トレンチ断面図	56
第 7 図 等湖院南区平面図 (1 : 400)	18	第 37 図 護摩堂跡 4 トレンチ礎石下断面図	56
第 8 図 鰐淵寺川南区平面図 (1 : 600)	20	第 38 図 護摩堂前 5 トレンチ断面図	56
第 9 図 A-62 平坦面 平面図	23	第 39 図 历年較正結果 (No. 1 ~ 8)	57
第 10 図 A-62 平坦面 断面図	24	第 40 図 历年較正結果の分布	58
第 11 図 トレンチ土層断面図	24	第 41 図 開山堂位置図	61
第 12 図 A-62 平坦面遠景 (鰐淵寺川対岸・南から)	25	第 42 図 開山堂平面図	62
第 13 図 A-62 平坦面遠景 (東から)	25	第 43 図 出土遺物 (1)	63
第 14 図 A-62 平坦面近景 (完堀状況)	25	第 44 図 トレンチ 土層断面図・石垣立面図 (1)	64
第 15 図 A-62 平坦面調査風景	25	第 45 図 トレンチ 土層断面図・石垣立面図 (2)	65
第 16 図 地区割図 (1 : 6,000)	28	第 46 図 1 トレンチ ピット平面図・断面図	66
第 17 図 地区割図 (1 : 2,000)	29	第 47 図 2 トレンチ ピット平面図・断面図	67
第 18 図 釈迦堂位置図	31	第 48 図 出土遺物 (2)	68
第 19 図 釈迦堂平面図・土層断面図	33	第 49 図 出土遺物 (3)	69
第 20 図 明治期の絵図 (釈迦堂)	34	第 50 図 出土遺物 (4)	70
第 21 図 出土遺物	35	第 51 図 遺構の配置	72
第 22 図 護摩堂跡・護摩堂前位置図	37	第 52 図 トレンチ平面図 (試料採取地点)	72
第 23 図 護摩堂跡・護摩堂前平面図 (1)	40	第 53 図 開山堂 4 トレンチ断面図 (試料 No. 1 採取位置)	73
第 24 図 護摩堂跡・護摩堂前平面図 (2)	41	第 54 図 历年較正結果	73
第 25 図 土層断面図	42	第 55 図 本覚坊跡位置図	75
第 26 図 4 トレンチ 第 2 造構面 平面図・土層断面図	43	第 56 図 トレンチ土層断面図 (1)	76
第 27 図 出土遺物 (1)	45	第 57 図 トレンチ土層断面図 (2)	77
第 28 図 出土遺物 (2)	46	第 58 図 第 1 遺構面	80
第 29 図 出土遺物 (3)	47	第 59 図 第 2 遺構面	80
第 30 図 出土遺物 (4)	48	第 60 図 第 3 遺構面	81
		第 61 図 第 4 遺構面	81
		第 62 図 磚石 平面図・断面図	82

第63図 出土遺物（1）	85
第64図 出土遺物（2）	86
第65図 出土遺物（3）	87
第66図 出土遺物（4）	88
第67図 恵門院跡・覺城院跡位置図・石垣立面図	91
第68図 断面図	92
第69図 レンチ配置図	93
第70図 1レンチ土層断面図	95
第71図 出土遺物	96
第72図 レンチ調査位置図	99
第73図 根本堂 レンチ平面図・北壁断面図	100
第74図 開山堂 レンチ平面図・北壁断面図	101
第75図 根本堂調査地	102
第76図 開山堂調査地	102
第77図 鶴淵寺境内平面図（1）	104
第78図 鶴淵寺境内平面図（2）	105
第79図 鶴淵寺山内略図	106
第80図 本覺坊跡 平面図（現成院合城圖）	111
第81図 三回転唐草紋軒平瓦	113
第82図 四回転唐草紋軒平瓦	114

## 挿表目次

第1表 調査の経過	4
第2表 試料一覧表（年代測定結果）	56
第3表 年代測定試料一覧（測定結果）	73

## 図版目次

卷頭図版 1 1 根本堂西側の護摩堂跡・護摩堂前調査状況（南東から）	
2 護摩堂跡 4 レンチ第2造構面確認状況（北から）	
卷頭図版 2 3 興迦堂（A-3平坦面）基壇調査状況（北東から）	
4 本覺坊跡（A-27平坦面）調査状況（東から）	

図版 1 興迦堂 1	図版 14 開山堂 1
図版 2 興迦堂 2	図版 15 開山堂 2
図版 3 興迦堂 3	図版 16 開山堂 3
図版 4 興迦堂 4	図版 17 本覺坊跡 1
図版 5 護摩堂跡 1	図版 18 本覺坊跡 2
図版 6 護摩堂跡 2	図版 19 本覺坊跡 3
図版 7 護摩堂跡 3	図版 20 本覺坊跡 4
図版 8 護摩堂跡 4	図版 21 本覺坊跡 5
図版 9 護摩堂跡 5	図版 22 本覺坊跡 6
図版 10 護摩堂跡 6	図版 23 恵門院跡・覺城院跡 1
図版 11 護摩堂前 1	図版 24 恵門院跡・覺城院跡 2
図版 12 護摩堂前 2	図版 25 恵門院跡・覺城院跡 3
図版 13 護摩堂前 3	図版 26 興迦堂 出土遺物 1・護摩堂跡 出土遺物 1

- 図版 27 護摩堂跡 出土遺物 2  
図版 28 護摩堂跡 出土遺物 3  
図版 29 護摩堂跡 出土遺物 4  
図版 30 護摩堂跡 出土遺物 5・護摩堂前 出土遺物 1  
図版 31 開山堂 出土 遺物 1  
図版 32 開山堂 出土遺物 2・本覺坊跡 出土遺物 1  
図版 33 本覺坊跡 出土遺物 2  
図版 34 本覺坊跡 出土遺物 3  
図版 35 忠門院跡・対城院跡 出土遺物 1

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

浮浪山鰐淵寺は、多くの貴重な文化財が残る山陰地方随一の古刹であり、中世のおもかげを残す境内には、秋の紅葉の時期を中心に多くの参拝者が訪れる。

平成9年（1997）に開創1400年を記念して刊行された『出雲國浮浪山鰐淵寺』（編集委員長 井上寛司 大阪工業大学教授：当時）では、鰐淵寺の歴史過程全体の総括、寺宝類の網羅的な調査、彫刻・絵画・工芸や地形・地質・動植物についても調査が行われ、鰐淵寺の概要が明らかにされた。

平成21年度（2009）から23年度（2011）にかけて実施された『出雲国鰐淵寺の歴史的・総合的研究－日本宗教の歴史的・構造的特質の解明のために－』（科学研究費補助金 研究代表者 井上寛司 島根大学名誉教授）では、『出雲國浮浪山鰐淵寺』の成果の上に立ってその総括と点検を行う一方、これまで未解決となっている諸課題を含め、それら全体の問題解決を図ることを目標とした研究が進められた。

科研調査の中で、出雲市は考古分野を担当し、かつての建物跡や僧坊跡の調査・確認を行った。その目的は、鰐淵寺の実相に迫るためにあり、考古学的な手法を用いて分布調査、発掘調査を行い遺物や遺構から往時の鰐淵寺の様相を復元することを目的としたものである。

また、平成22年度から26年度まで国庫補助を得て境内各地の分布調査、発掘調査、石造物調査を実施し、その成果をまとめた報告書を平成27年（2015）3月に刊行した（『前報告書』）。

こうした鰐淵寺の調査・研究の蓄積などを踏まえ、平成27年7月、出雲市が文化庁へ国史跡指定の意見具申を行い、同年11月、国の文化審議会での答申を経て、翌平成28年（2016）3月1日、官報告示により正式に「鰐淵寺境内」として史跡指定となった。

さらに史跡鰐淵寺境内を将来にわたって確実に保存し、有効かつ適切に活用していくことを目的として平成28・29年度2箇年で『史跡鰐淵寺境内保存活用計画書』をまとめた。この中では、当該史跡の望ましい将来像（大綱）を描き出す必要があることから、その実現に向けた保存と管理、活用、整備及び運営・体制等の基本方針が明記された。当該方針の中では、史跡を構成する要素である建造物について、老朽化ややき損状況を踏まえ、緊急度・優先度の高い施策として、短期的に保存修理等を実施することとされた。これに従い、保存活用計画策定と並行し、史跡内に現存する釈迦堂及び開山堂を中心、平成28年度から建造物保存修理事業に着手した。また、平成17年に重要文化財、県指定文化財が盗難にあい、現在も発見されていない状況を踏まえ、令和2年度においては、防災施設整備事業にも取り組み、防犯カメラ及び自動火災報知機の設置を実施し、防犯及び防火の両面から、文化財の保護及び安心安全な史跡の維持管理ための対策を講じることとなった。

保存活用計画の中では、令和2年度までの5箇年を第一期事業期間と位置づけ、優先順位を設定して計画的に史跡の整備を進め、併せて歴史環境総合調査事業として発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査の経過

平成29年度（2017）からの発掘調査で調査対象としたのは、根本堂に隣接するA-5平坦面（護摩堂跡）である。調査は、平成29年（2011）5月から翌年3月にかけて発掘調査を実施した。また、糸迦堂についても並行して調査を行った。公開については、発掘調査の進捗に合わせ、平成29年11月25日にもみじ祭りの際に、護摩堂跡発掘調査現地説明会を行い、120名の見学者があった。

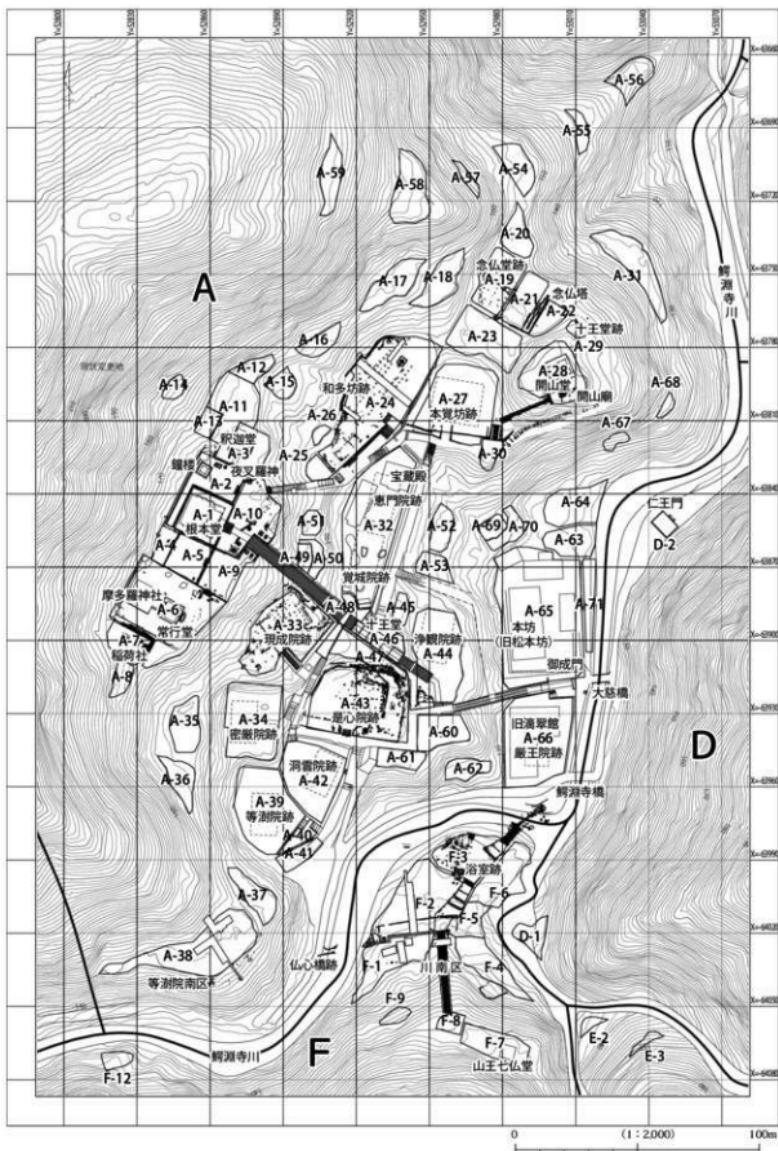
平成30年度（2018）には、史跡鰐淵寺境内保存活用計画策定委員会に代わり、新たに史跡鰐淵寺境内調査指導委員会を立ち上げ、指導・助言をいただきながら、開山堂平坦面及び建造物修理用足場で前年度に調査ができなかった糸迦堂周辺の発掘調査を実施した。

令和元年度（2019）～令和2年度（2020）は、恵門院跡・覺城院跡（A-32平坦面）、護摩堂前（A-9平坦面）、護摩堂跡（A-5平坦面）追加調査、本覺坊跡（A-27平坦面）の発掘調査を実施した。本覺坊跡については、速報展「1/80の調査—史跡鰐淵寺境内の調査から—」と題し、令和2（2020）年2月5日～令和2（2020）年7月20日まで出雲弥生の森博物館において、調査成果を中心に速報展示した。

令和2年9月5日には、出雲弥生の森博物館職員リレー講座で発掘調査の成果について「ここまでわかった鰐淵寺」と題して講演を行った。  
（石原聰）



第1図 調査指導委員会の様子



第2図 A地区平坦面番号配置図 (1 : 2,000)

第1表 調査の経過

H21～27年度（国指定前）

	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
鷲源寺行事						ご開帳 (3/20～22)	
科研総合調査			→				
調査委員会				→	(4/28～28)	(12/26)	(8/2/3)
免掘調査			→				
	和多坊跡	等謝院南地区	鷲源寺川南地区				
分布調査	鷲源寺周辺	鷲源寺周辺	鷲源寺境内	鷲源寺境内	鷲源寺 境内・周辺詳細		
石造物調査		松露谷	松露谷	松露谷補足 川面園	各墓地群補足調査、 写真撮影	松露谷 温泉神 伊勢谷神	
文化財報告書			科研総合調査 刊行			埋蔵文化財報告書 作成・刊行	
測量図作成 縮尺 ① 1 = 1000 ② 1 = 200 ③ 1 = 100	境内全域① 和多坊跡② 等謝院跡② 淨觀院跡② 等謝院南②	星院跡③ 等謝院跡③ 淨觀院跡③ 松露谷墓地Ⅱ群②	鷲源寺川南②	松露谷墓地Ⅰ群②	根本堂周辺② 開山堂周辺② 川南奥石造物群② 惠門院・寛城院石組③	松露谷墓地②	
指定							意見提出 国指定

H28～R3年度（国指定後）

	H28	H29	H30	R1	R2	R3
調査委員会			→	(11/1 3/13)	(7/23 1/22)	(8/18)
免掘調査				星院跡 開山堂 新造堂	惠門院・寛城院跡 本寛坊跡 護摩堂前	護摩堂跡 本寛坊跡
文化財報告書					建造物保存修理 報告書 刊行	免掘調査 報告書 作成・刊行
保存活用計画	策定	策定	→			
建造物保存修理	新造堂	新造堂	新造堂	開山堂	開山堂	→

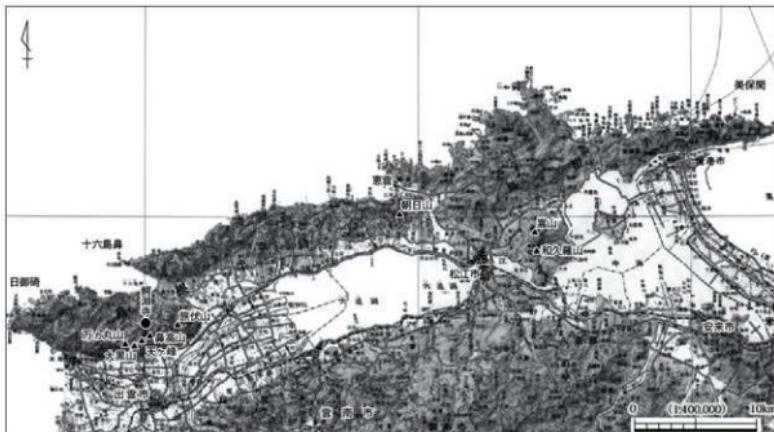
## 第2章 鰐淵寺の位置と環境

## 第1節 鰐淵寺の位置

鰐淵寺は、島根半島西部の「北山」と呼ばれる山塊（以下、北山山系）の一角に立地する。北山山系は、ほねだけさん 鼻高山（536 m）を最高峰に、標高 400 m～500 m 台のピークが連なり、全体に比較的急峻な地形である。鼻高山の北斜面に谷を開削して流れる鰐淵寺川の左岸を中心に、根本堂をはじめとする鰐淵寺に関連する主要な建造物が配置されている。

島根半島は島根県東部の海岸線に並行して東西に細長く伸びる地形で、沖積平野である出雲平野によって本土側と連続した陸繫島状の半島である。島根半島の主軸を構成する山列は3つに分かれ、雁行状に配列している。その山列は、西列は日御崎から旅伏山(421 m)にかけての北山山系、中列は十六島鼻から松江市の朝日山(341 m)にかけて、東列は思蠻湾付近から美保間にかけての3列で、それぞれの間は第四系からなる低地で区分されている。また、東列の南にやや離れて嵩山(331 m)、和久羅山(244 m)の山塊が孤立している。島根半島の山塊は東西方向を主軸とする断層系の活動によって、概ね過去1000万年間に隆起してきた地形で、急峻な部分が多い。

鰐淵寺付近の地形についてみると、境内地を流れる鰐淵寺川は、十六島湾に注ぐ唐川川の支流にあたり、鼻高山（536 m）、天ヶ峰（458 m）、大黒山（443 m）、万ヶ丸山（499 m）が連なる一帯を集水域としている。その谷は全体には急峻なV字谷で河床は岩盤の露出箇所が多く、河岸の土砂堆積は限定的である。谷斜面は全体的に急角度だが、堂などが配置されている左岸側の一帯は小規模な河岸段丘状の緩やかな地形である。この地形を利用して平坦地を造成し、境内が整備されている。また、



第3図 鳥根半島 (1:400,000)

左岸側の尾根を越えた先の北斜面では、別所町から唐川町にかけての概ね1kmの範囲にわたって、標高150m～300m前後のやや傾斜が緩やかな斜面が広がっており、茶畠などに利用されている。これほどの広さをもった緩斜面は、北山山系には他に見当たらず、特徴的である。なお、個々の規模は小さいものの、鼻高山から旅伏山へ連なる尾根筋を挟んだ南側斜面にも、同程度の高度の緩斜面を含む数段の段丘状地形が認められる。これらの緩斜面の分布は、成相寺層の頁岩の分布域と重なる。風化してもろくなりやすい岩質が段丘面の形成に影響しているかもしれない。

鰐淵寺から鼻高山山頂付近へ直線的に続く谷は、河床勾配が約22度のかなり急峻な地形（急傾斜地指定対象は30度以上）で、その一角に硬質な岩盤が切り立っており、18mの落差を持つ浮浪滝が形成されている。

## 第2節 歴史的環境

鰐淵寺が位置する島根半島（北山周辺：島根半島西部）を中心に出雲平野を視野に入れつつ時代ごとの状況を概観する。なお、遺跡名の後の数字は第4・5図に対応する。

### 1. 縄文・弥生・古墳時代

縄文時代の遺跡としては、縄文早期終末の菱根遺跡（53）、中期の鉢片が出土した猪目洞窟遺跡（5）、  
晩期の突帯文土器が出土した出雲大社境内遺跡（2）が挙げられる。

弥生時代には、前期に原山遺跡（50）や平野部の拠点集落・矢野遺跡（24）が成立する。中期には、  
大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡（64）や加茂岩倉遺跡のほか、銅戈、ヒスイ製勾玉などが出土し  
た真名井（命主社境内）遺跡（54）がある。後期には平野部では、青木遺跡（17）など沖積地上にも  
集落や四隅突出型墳丘墓が造られた。後期後葉には、西谷墳墓群（27）に「王墓」とされる大規模な  
四隅突出型墳丘墓が築かれた。このほか、猪目洞窟遺跡やひろけ遺跡（55）など海に面した遺跡もある。

古墳時代にはいると出雲平野の集落は急激に衰退する。西谷の四隅突出型墳丘墓に続く前期古墳は  
築かれず、この時期に大きな変動がうかがわれる。前期後半には、大寺1号墳（15）と山地古墳（46）、  
中期から後期前半に軍原古墳（66）や神庭岩船山古墳（65）など造られるがその数は少ない。後期後  
半になると古墳の数が激増する。北山山麓に上島古墳（14）や、未盗掘古墳である国富中村古墳（13）  
が築かれ、平野南部には今市大念寺古墳（26）、上塩治築山古墳（31）、上塩治地藏山古墳（35）と大  
規模な古墳が続けて造られた。

### 2. 古代（奈良・平安時代）

『出雲國風土記』によれば、鰐淵寺を含む山塊は、出雲国出雲郡宇賀郷に属す。猪目洞窟遺跡（5）  
は宇賀郷にあったとされる「黄泉の穴」といわれ、出土した弥生・古墳時代の人骨が注目される。出  
雲郡の郡家は、斐川町出西の後谷遺跡（57）周辺とされる。後谷遺跡では奈良時代から平安時代前  
期にかけての総柱建物跡がみかかり、大量の炭化米や「□□倉」の墨書き土器などが出土したことから  
郡家付設の正倉跡とみられている。郡庁もこの周辺に所在した可能性が高い。古代駅路と考えられる

出雲國山陰遺跡（60）を長原遺跡・杉沢遺跡・三井Ⅱ遺跡・堀切Ⅳ遺跡で確認しており、丘陵尾根上を1kmにわたって縱走している。

このほか、神門郡家推定地の古志本郷遺跡（43）、新造院推定地の神門寺境内廃寺（30）、天寺平廃寺（68）、西西郷廃寺（12）など、官衙寺院関連の遺跡が点在している。

出雲大社南方の鹿嶽山遺跡（51）では、奈良三彩の多口瓶、「堂」や「社」など墨書き土器、金銅製鈎帶金具など宗教的な色彩をもつ遺物が出土し特異である。

火葬墓の事例は、出雲市で9例確認できた。出雲平野西南部に9例が集中し、石櫃を伴うなど規模の大きいものがある。このうち、古坂古墳（42）では古墳石室内から石櫃・藤手刀が出土した。奈良時代に追葬ないし改葬が行われたと考えられている。光明寺3号墓（38）は円形墳丘に火葬骨を入れた石櫃を納める特殊な例である。

北山南麓の大寺薬師には、地方では珍しい平安前期の木造仏が残される。その遺跡と推定されるのが大寺谷遺跡（16）である。鰐淵寺に所蔵される銅造觀世音菩薩像銘にある「出雲国若倭部臣」は『出雲國風土記』にみえる橘樹郡郡司氏族であり、かつ青木遺跡（17）出土木簡にもその名が見えるなど、この地域を代表する氏族であった。

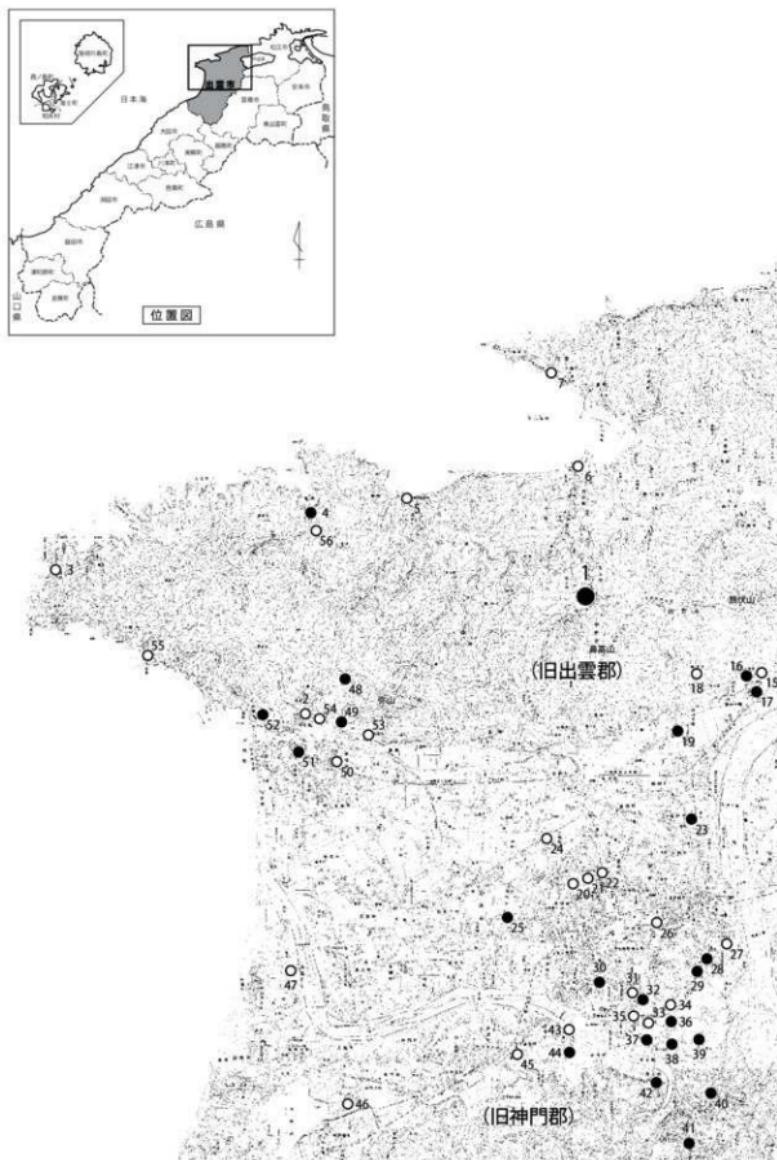
飛鳥時代以来、国家的崇敬を受けてきた出雲大社（杵築大社）とともに、半島の西端に位置する日御崎神社（3）もまた、平安時代末（12世紀末）には都にまでその名が知られる存在であった。『梁塵秘抄』には聖の修業の場として「鰐淵」と並んで「日御崎」が挙がる。

### 3. 中世

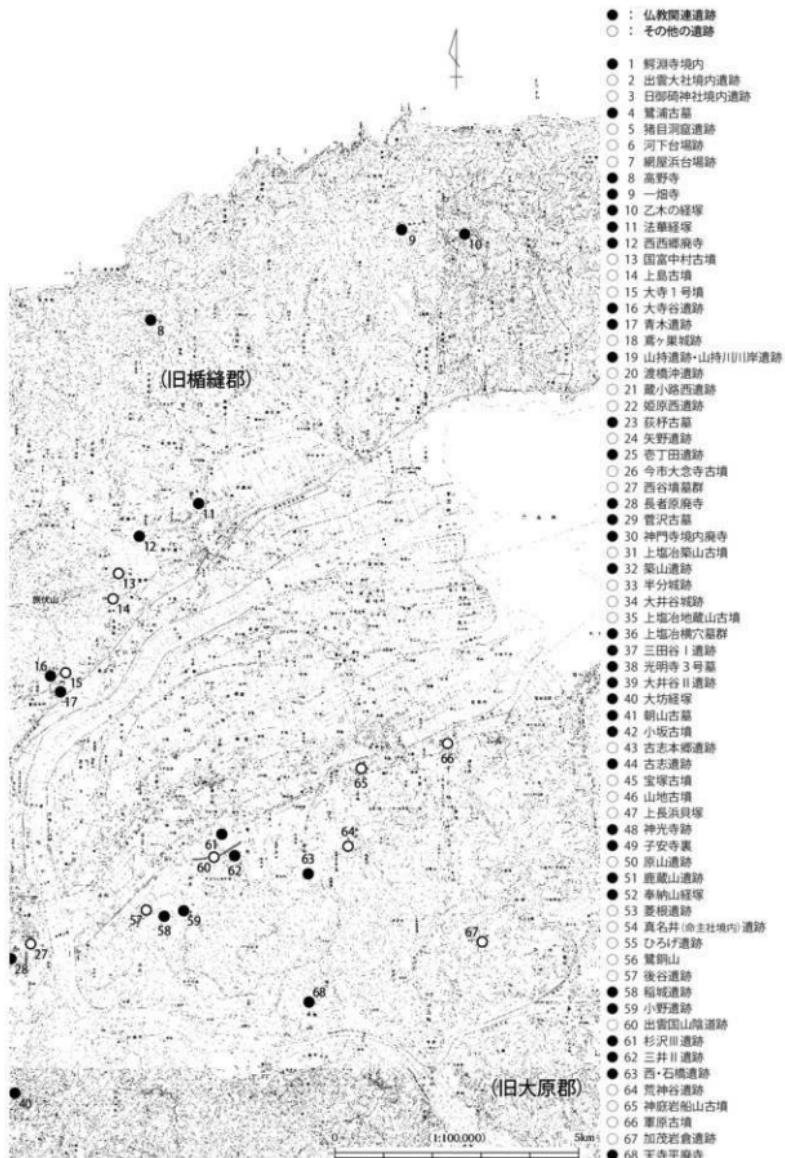
古代以来、出雲国の政治・経済の中心は国府（松江市大草町）にあった。しかし、鎌倉時代に出雲守護に補せられた佐々木義清の孫頼泰は、13世紀後半に塩治郷（出雲市）を根拠とし塩治氏を称した。この塩治氏に関わるのが築山遺跡（32）で、上塩治築山古墳に隣接して礎石建建物跡や区画溝などが見つかっている。塩治氏が出生平野に定着したころ、杵築大社の国造家は千家・北島に分かれた。出雲大社境内遺跡（2）で発見された巨大な三本柱の社殿は、これを少し遡る宝治2年（1248）の正殿式遷宮のものと推定されている。この遷宮には鰐淵寺の僧も参加した（井上編1997）。出雲平野の中世は、杵築大社と鰐淵寺、そして塩治氏が動かしていく。

守護職塩治氏に対し、有力な国衙在庁官人だったのが朝山氏である。藏小路西遺跡（21）はこの朝山氏の居館跡と目され、12～15世紀にわたる大量の貿易陶器が出土した。貿易陶器は築山遺跡にも優品があるほか、越前焼大甕に龍泉窯青磁が副葬された荻原古墓（23、国重要文化財）が著名である。この時期の遺跡には、他に渡橋沖遺跡（20、13～14世紀）、矢野遺跡（14～15世紀）などがある。

平野を囲む丘陵地には、応仁文明の乱を大きな契機として多くの山城が築かれた。発掘調査された城跡に、半分城跡（33）と大井谷城跡（34）がある。半分城跡では周囲に柵と土塁を設けた郭が調査され、室町時代後半から戦国時代末まで使われたと推定された。大井城跡とともに塩治氏に関わる遺跡と考えられる。



第4図 鯉淵寺の位置と周辺の遺跡（1）(1:100,000)



第5図 鯉淵寺の位置と周辺の遺跡（2）(1:100,000)

室町時代の出雲国守護は、山名氏と京極氏（佐々木氏）が入れ替わりとめたが、14世紀末以降は京極氏が継続して補任された。15世紀前半には、その守護代として同族の尼子氏が富田城（安来市広瀬町）に入部した。松田氏や三沢氏と対立しながらもこれを押さえ、塙治氏に対しても尼子経久の三男興久を養子に入れるなどで掌握した。興久は享禄3年（1530）に経久に対し叛くが、その後には杵築大社や鰐淵寺がいたようである。

経久は、杵築大社に三重塔や鐘楼などを建設して境内の景観を一変させた。そのまま『杵築近郷絵図』に描かれている。これ以前からも、大社には本願僧がその運営に参画しており、杵築を目指して法華經納経をおこなう、廻國聖も活発に活動していた。奉納山經塚（52）から出土した金銅製經筒には、東は常陸、西は伊予にわたる国名が残されている。寺院に対しては、鰐淵寺に捷書を定めるとともに、清水寺（安来市）と競わせるなどしてその勢力の制圧を試みた。

尼子氏は、晴久の代（1537～1560）には8ヵ国守護に任せられたが、天文9年（1540）毛利氏を安芸吉田郡山城に攻めて敗れ、同12年の大内氏の出雲攻めは凌いだものの、以後も大内氏、のちには毛利氏との攻防が続いた。出雲平野もたびたび戦場となり、永禄9年（1566）の富田城開城・尼子氏滅亡に至る戦いにおいても、毛利元就は南に平野を見渡す北山の一角・鳴ヶ巣城跡（18）を陣城とした。標高281mの主郭を中心に四方の尾根に郭を配置した放射状連郭式山城である。築城時期は永禄5年（1562）6月ごろとされる。

出雲大社の『杵築大社近郷絵図』には、出雲大社境内に三重塔や鐘楼が見られる。これも鰐淵寺の影響下で尼子氏が造営したとされている。なお、境内地にあったとされる三重塔は、兵庫県養父市の名草神社に、鐘楼にあったとされる梵鐘は福岡県の西光寺にあり、それぞれ重要文化財、国宝となっている。

大社町修理免坊床の神光寺跡（48）にあったとされる一石宝鏡印塔は、主に石見地方で流通する福光石製の石塔であり、一石造りである点など注目される。（大社町史編集委員会2002）

また、上長浜貝塚（47）では、古代末から中世にかけての漁村の姿を知ることができる。

鷲ヶ岳山（56）は戦前まで採鉱されていた鉱山で、開山時期は定かではないが、『銀山旧記』によれば、鷲ヶ岳山が石見銀山の発見に関与する鉱山として登場することから、中世にさかのぼる可能性がある。

## 4. 近世

近世に入ると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川左岸には原来原岩檻や間府岩檻が開削され、物資輸送や農業用水の確保に利用された。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を有数の穀倉地帯とした。

十六島湾沿岸では、我が国に現存する最古の台場として寛政11年（1799）に築造された網屋浜台場（7）、文久3年（1863）に西洋式台場として河下台場（6）が築造された。（石原聰）

### 参考文献

井上寛司編 1997『出雲國浮浪山鰐淵寺』浮浪山鰐淵寺

大社町史編集委員会 2002『大社町史』史料編（民俗・考古資料）大社町

## 第3章 境内の過去の調査

### 第1節 国指定前の分布調査・発掘調査・石造物調査

#### 1. 歴史的調査の成果

平成21年度(2009)から3年間にわたり、島根大学井上寛司名誉教授を研究代表者とする総合調査『出雲鰐淵寺の歴史的・総合的研究』では、文献、考古、建築、美術、自然環境の5分野で調査が行われた。

また、平成21年度(2009)から26年度(2014)において、出雲市教育委員会を調査主体に埋蔵文化財調査を実施した。主な調査としては、分布調査、発掘調査及び石造物調査である。

ここでは、近年の調査などをもとに、国史跡指定前の文献史学の成果を鰐淵寺の歴史(概要)としてまとめるとともに、考古学的調査(分布調査、発掘調査、石造物調査)を示す。

平成28年(2016)3月1日の国史跡指定までの調査成果である。

#### 2. 鰐淵寺の歴史(文献史学の成果)

##### (1) 鰐淵山の時代

鰐淵寺はもと鰐淵山と呼ばれ、寺伝などでは智春上人の開基とされ「推古天皇の勅願」により推古2年(594)に開創されたといわれる。寺号の「鰐淵」は、智春上人が誤って浮浪滝の滝壺に落とした開伽の器を鰐がくわえてきたことに因む、とされる。

もともと、鰐淵山は浮浪滝を中心とした修験の場であり、「梁塵秘抄」に「聖の住所はどこぞぞ、<sup>すみか</sup>眞面よ勝尾よ播磨なる書写の山、出雲の鰐淵や日御崎、南は熊野の那智とかや」と謳われたように、平安時代末期には、全国的にも著名な信仰の対象へと発展した。そして浮浪滝の裏側は洞窟となっており、そこに藏王権現が祀られていたと考えられる。このころ、「鰐淵山金剛藏王宝窟」に安置された石製經筒(重要文化財)の銘文によると、仁平3年(1153)に僧円朗らが書きし終わった如法妙法蓮華経8巻を經筒に納めたという。この銘文からは、比叡山延暦寺の慈覚大師(円仁)に始まった如法経信仰が鰐淵寺に浸透していたことがうかがえ、両者の本末関係が成立していく過程が垣間見える。それは、出雲における藏王信仰の拠点である鰐淵山が、比叡山延暦寺の本寺に対して「別所」と呼ばれる所以でもあった。

##### (2) 浮浪山鰐淵寺の成立と南北両院の統一

12世紀後半になると堂塔・僧坊に関する記録が現れ、13世紀初めには寺院鰐淵寺へと発展した。鰐淵寺は草創期以来、千手観音を本尊とする北院と薬師如来を本尊とする南院からなっていた。建暦3年(1213)には国富郷100町が寺領として最初に認められ、南北両院の長吏が50町ずつ支配する体制となった。南北朝期には、北院が足利尊氏と結んだのに対して、南院が隠岐に流された後醍醐

天皇や南朝勢力と結びつきをもった。これにより、南北朝の争乱を寺内に引き込むこととなったため、北院と南院の対立が深まり、鰐淵寺の存続が危うくなかった。この危機を脱するため、正平10年(1355)に全山の寺僧122名(大衆89名、行人33名)が連署し、一味同心していくことを誓い合って南北両院は和合、統一され、それまで別個に祀られてきた南北両院の本尊を左右に並べて祀る根本堂が新たに創建された。

### (3) 杵築大社との神仏習合

いまひとつ中世で注目すべき点は、杵築大社(出雲大社)との強い結びつきである。鰐淵寺の西約6kmに杵築大社は位置しており、鰐淵寺が「国中第一之伽藍」と称されるのに対して、杵築大社は「国中第一之靈神」と称された。両者が宗教上、対をなして出雲国を代表する存在であったことがうかがえる。中世の杵築大社において祭神がスサノヲとされたのは、鰐淵寺が藏王権現をスサノヲと同体とみていたことが影響していると考えられる。中世杵築大社の三月会では、鰐淵寺僧が大般若經の転読を行った。三月会は杵築大社のもっとも重要な祭礼となり「山陰無双の節会、国中第一の神事」と称された。この鰐淵寺と杵築大社の関係は「神仏隔離の原則に基づく神仏習合」という日本の宗教全体に認められる最も本質的で典型的かつ特殊な事例と評価できる。

### (4) 戦国大名とのかかわり

戦国期には、大きな転換をとげる。それは戦国大名による介入である。尼子氏は自らが出雲国における新たな統一権力であることを内外に誇示するため、寺社勢力を抑圧しようとした。尼子経久は、永正6年(1509)鰐淵寺に対して三ヶ条の掟書を示し順守を求めた。掟書により寺の構成や運営など、鰐淵寺の根幹をなす部分にまで介入したのである。また経久は、永正6年から天文6年(1509~37)にかけて杵築大社境内に鐘楼や大日堂、三重塔、輪藏など仏教施設を次々と建てた。そして、鰐淵寺僧が杵築大社の「社僧」と呼ばれ、かつ鰐淵寺が杵築大社の「神宮寺」「奥の院」などと称されるようになり、これまでの「神仏隔離の原則」が大きく後退し両者の一体化が進んだ。

この動向は次の毛利氏時代にも継続され、永禄13年(1570)からは、毛利元就の命により杵築大社神前で鰐淵寺僧による護摩供も行われた。この供養は毛利氏の個別的な利益擁護のために行われたもので、戦国大名毛利氏への従属が一層強まつたことや杵築大社の寺院化がさらに進んだことを意味した。

### (5) 近世以降の鰐淵寺

出雲大社の寺院化は、大社の神官達に危機感を生じさせ天正年間以降、その想いは大きくなつていつたこと、そこに近世になると松江藩主松平直政とその儒者・黒沢石斎による排仏論が展開された。寛文7年(1667)の正殿式造営に合わせて全国の先駆けとなる「神仏分離」が行われ、杵築大社境内から仏教施設が撤去された。寛文6年(1666)杵築大社は鰐淵寺に対し、翌年以降の祭礼への参加は無用と通告し、三月会をはじめとするあらゆる祭礼への鰐淵寺僧の参加が途絶えた。これにより400年余りにおよぶ鰐淵寺と杵築大社との不即不離の関係に終止符が打たれた。

加えて中世最盛期に3,000石あった寺領は、豊臣秀吉による全国的な検地により、3分の1に削減された。さらに近世には300石にまで削減された。これら杵築大社との関係途絶や財政基盤の大

幅な縮減により、鰐淵寺の規模は縮小していったと想像され、江戸中期の『雲陽誌』(1717)などでは僧坊が12坊にまで減少した様子がうかがえる。

一方、寛永5年(1628)藩主堀尾忠晴が照高山円流寺(松江市)を創建された、円流寺には住職を鰐淵寺から歴代輩出するなど、近世においてもその寺格の高さは保たれていた。

現境内には、根本堂・常行堂・摩多(陀)羅神社・開山堂・釈迦堂・藏王堂といった建物のほか、僧坊としては18世紀中期の建立とみられる本坊(旧松本坊)が残っている。鰐淵寺は、古代に修験の場となった浮浪滝や、根本堂と大社造の摩多羅神社が並び建つ特異な境内景観など、神仏習合の姿をみることができる。

#### (6) 鰐淵寺の時期区分

このような変遷を経た鰐淵寺について、井上寛司氏は大きく三つの時期区分を示している。つまり、北院と南院がそれぞれの空間的なまとまりを持ちつつ、藏王権現を中心として結びあっていた時期を鰐淵寺第1期(平安時代末から鎌倉時代)、南北両院の本尊を併せ祀る根本堂を中心として鰐淵寺境内が再編された時期を鰐淵寺第2期(南北朝期から戦国期)、多数の僧坊が廃絶し、12の僧坊からなる景観が創出された時期を鰐淵寺第3期(近世から近代初期)としている。加えて、鰐淵寺は今日まで存在し続け、天台寺院としての法統を受け継がれている。このような例は山陰地方では極めて稀であり、この時期を鰐淵寺第4期(近代初期以降から現在)と設定したい。

### 3. 考古学的調査

#### (1) 調査の経緯と経過

##### A. 調査の経過

平成22年(2010)度からの発掘調査で最初に調査対象としたのは、和多坊跡(A-24平坦面)である。和多坊は、根本堂地区の北部に位置し、戦国期には栄芸といった傑僧を輩出したことでも知られており、戦国期には鰐淵寺のなかでも中心的役割を果たした僧坊である。平成22年(2010)6月下旬から和多坊跡の清掃・測量調査を開始し、11月中旬まで発掘調査を実施した。

翌平成23年(2011)度は、坊名不明の平坦面として、等渕院跡の南側に位置するA-38平坦面(等渕院南区と呼称)を選定した。僧坊名の不明な平坦面においても、僧坊など建物跡が存在したのかどうかの確認が目的である。調査は、平成23年5月から10月にかけて行った。

このような経緯のもと、平成24年度当初に鰐淵寺川の南側、浮浪滝の入り口にあたる鰐淵寺川の南側F-1・2・3平坦面(鰐淵寺川南区と呼称)での分布調査を行い、その状況を第1回の鰐淵寺調査委員会で報告し、発掘調査区の設定位置等を検討した後、発掘調査を実施した。調査期間は、平成24年(2012)6月から10月までである。

発掘調査と並行して、境内地の分布調査も実施した。調査は科研費研究組織考古班および鰐淵寺調査委員会の指導に基づき、平成23年(2011)度は、12月から3月、24年度は、4月から25年3月、25年度は、4月から11月を行った。平成25年度は発掘調査を行わず、分布調査に傾注した。調査範囲は境内地および唐川地区で行い、大きな成果を得ることができ、平成26年度に報告書を作成した。

## (2) 分布調査

鰐淵寺の位置する別所の境内地において、根本堂を中心に主要な堂宇や僧坊などの関連諸施設が配置されている様子は、江戸期や明治期の絵図から垣間見ることができ、現在の鰐淵寺も両院統一後の状況を色濃く残している。しかし、絵図では省略されている施設もあり、全てが描かれているわけではない。また、絵図が描かれる以前の鰐淵寺は、これまでの史料研究から、中枢地域に堂宇が建ち並び、周辺を僧坊が取り巻いていたことは想像に難くないものの、実際それらがどこに存在したかは、ほとんど特定されていなかった。

このような課題を考古学的な手法を用いて解明するため、分布調査を行うこととした。

分布調査で明らかにしようとした点は、大きく次の二つである。一つは、北院と南院がどこにあつたか、もう一つは、鰐淵寺の中枢地域における堂宇や僧坊など諸施設のあり方についてである。

なお、調査に際して、鰐淵寺の寺域を次のように区分した。

①いわゆる四至は、北山遙堪峠、伊努谷峠、般若坂、心経院坂の四つ堂で示され、現在の鰐淵寺所有地とほぼ一致する範囲である。よって、この範囲を「境内地」と称し、ここを地名から「別所」(比叡山延暦寺の別院の意)と呼ぶこととする。

②「別所」は、鰐淵寺境内の中心をなす中枢とその周縁に分かれる。「中枢地域」とは、鰐淵寺根本堂や僧坊などを含むエリアを指し、「周縁地域」とは、中枢に至る道を含む山野エリアを指す。この外縁境界に四つ堂が建っていることになる。

③中枢地域の中は、鰐淵寺根本堂とその僧坊群がある「根本堂地区」、鰐淵寺原初の場である「浮浪滝地区」、そして歴代住職の墓地などが所在する「松露谷地区」と「川奥地区」に区分できる。

中枢地域の踏査とその記録に当たっては、山の稜線や川などの自然地形をもとに、A～Hの8区画に分け、その区画内の平坦面にA-1, A-2というように機械的に番号を付けた。ちなみにAは根本堂地区、Cは松露谷地区、Fは浮浪滝地区、Hは川奥地区、B・D・E・Gは周縁地域に対応する(28ページ、第16図)。

分布調査の結果を整理すると、大きくは次の点を確認した。

### ア. 中世の面影を残す境内地

鰐淵寺境内地は、約288haにおよぶ広大な領域である。そのほとんどが急峻な山地で、根本堂など堂宇が建ち並ぶ中枢地域はわずか15haと狭い範囲である。

江戸後期の絵図(IV・Vページ)にも、最高峰の鼻高山を中心とする山々に囲まれた境内地の様子が詳細に描かれている。遙堪峠、林木峠、般若坂、心経院坂で示される四至には四つ堂が建てられ、根本堂や僧坊、浮浪滝、浴室、仁王門など主要施設が細かく表現されている。

現在の鰐淵寺の境内中枢部では、古代末から活動が始まり、中世期には計画的かつ大規模な造成が継続して行われていたことが明らかとなった。また、江戸期の絵図に比べれば、堂宇や僧坊こそ減少したもの、その景観を彷彿とさせる地形や平坦面が良好な状況で残されていることも判明した。絵図に描かれた範囲が今も鰐淵寺の所有地であることを鑑みると、境内(寺域)の広がりは、近世期はもちろんのこと、中世にさかのぼる歴史的な領域だったとみられる。そして境内中枢部には、中世期

の面影が今なお色濃く残されているのである。

#### イ. 僧坊数を裏付ける多数の平坦面

分布調査によって、鰐淵寺中枢地域を中心として 122 の平坦面を確認した。そのうち、墓地や小規模平坦面を除く 90 箇所で、堂舎や僧坊施設が建てられていた可能性を推定した。これまで、正平 10 年（1355）の起請文に連署した僧（大衆）89 名を根拠に、僧坊数は 80 前後と推計されていたが、これを考古学的に裏付けたわけである。中世期の鰐淵寺境内を多くの僧らが行き来する姿が浮かびあがる。

#### ウ. 決着がついた南北両院問題

従来、鰐淵寺の北院と南院の所在地については、一般に北院が唐川地域、南院が大寺谷もしくは別所地域という考え方があった。だが、今回の調査により、北院と南院がともに別所の中枢地域である根本堂地区にあったことがわかり、この問題に決着がついた。唐川地域では、全く遺物が拾えなかつたことや平坦面も確認されなかつたことが決め手である。一方、大寺谷地域では、平安期の薬師如来を本尊とする大寺薬師と鰐淵寺とは関係がなく、古代から別の寺院として存在した可能性が高いと結論付けたことによる。

さらに、分布調査では根本堂を挟んで北東側と南西側のゾーンで、12～13 世紀の白磁や青磁、中世須恵器が多数採集された。このことは、中世前期においては南北両院それぞれが、根本堂の北側と南側で活動していたことの表われだと判断できる。南北両院が近接しすぎているように見えるが、大山寺僧坊群（鳥取県西伯郡大山町）の南光院・西明院・中門院がともに隣接していた事例などからも、中世期には一般的であったと考えられる。

#### エ. 分布調査のまとめ

唐川地域と大寺谷地域にそれぞれ北院、南院が存在しないことを周辺エリアの踏査で示し、80 坊前後あったとされる僧坊数に足る 90 箇所の比較的広い平坦面が確認できたことにより、現境内地に南北両院が並存していたことを明らかにした。さらに採集した遺物を集計し、分布図に反映することにより、北院と南院が境内でそれぞれ独立していた時期と、その後、南北両院が統一した時期の状況を示す成果が得られたことは大きい。

さらに、別所中枢地域の分布調査によって、約 9,000 点もの遺物を採集した。古代からの遺物が採集できたのは、連綿と続く鰐淵寺の歴史を物語るものだろう。特に A 地区（29 ページ、第 17 図）の開山堂をとりまく地域で古代須恵器が採集できたのは、開山堂周辺の丘陵が古代以来一つの拠点となっていた可能性を示唆する。周辺の木がない状態ならば、開山堂から鰐淵山誕生の端緒である浮浪滝が見通せた可能性があるが、そうであるならば、開山堂の丘陵が鰐淵山成立の原点であった可能性も考えておく必要がある。

中世前半の僧坊は、北院と南院がそれぞれ分かれて存在した様相を示し、根本堂が成立した 14 世紀に谷部であった根本堂下面部が埋められて、新たに僧坊として利用された可能性を指摘した。

C 地区（松露谷地区）は、14 世紀代から墓域となっており、それが現代まで連綿と続いている。F 地区（浮浪滝地区）では、F-8, F-9 で 3,300 点を超える夥しい数の中・近世土師器を採集した。その

中には、地鎮祭祀の可能性が高い遺物や経塚の存在を示唆する褐釉四耳壺も含まれており、16世紀から17世紀に上段の山王七仏堂周辺で行われた祭祀に伴う遺物であると想定される。祭祀空間としてF地区が利用されていたことが推定できる。

今回行った分布調査では、鰐淵寺の悠久の歴史を物語る遺物群が、現境内域の中核地域（特にA・F地区）に大量に保存されていることを認識した。これまで述べてきたように、まさにそれが鰐淵寺の歴史である。今回の分布調査は、僧坊のあり方や境内での活動の様子など、発掘調査だけではつかめない実事を解明する大きな役割を果たした好事例といえるだろう。

### （3）発掘調査

発掘調査は、根本堂地区の北部、南部の2つの平坦面（和多坊跡…A-24、等樹院南区…A-38）、鰐淵寺川南区（浮浪灘地区北部）の2つの平坦面（F-1・2、浴室跡…F-3）において実施した。

各調査区における発掘調査の要点を整理する。

#### ア. 和多坊跡（第6図）

根本堂地区の北部には、江戸期（IV、Vページ）および明治期（VI、VIIページ）の絵図に、和多坊の建物が描かれている。

和多坊主屋は南北方向に棟を持つ建物で、江戸期の絵図には主屋の南側にも別棟の建物があるが、明治期にはこの建物は描かれておらず、今は礎石が残るのみである。

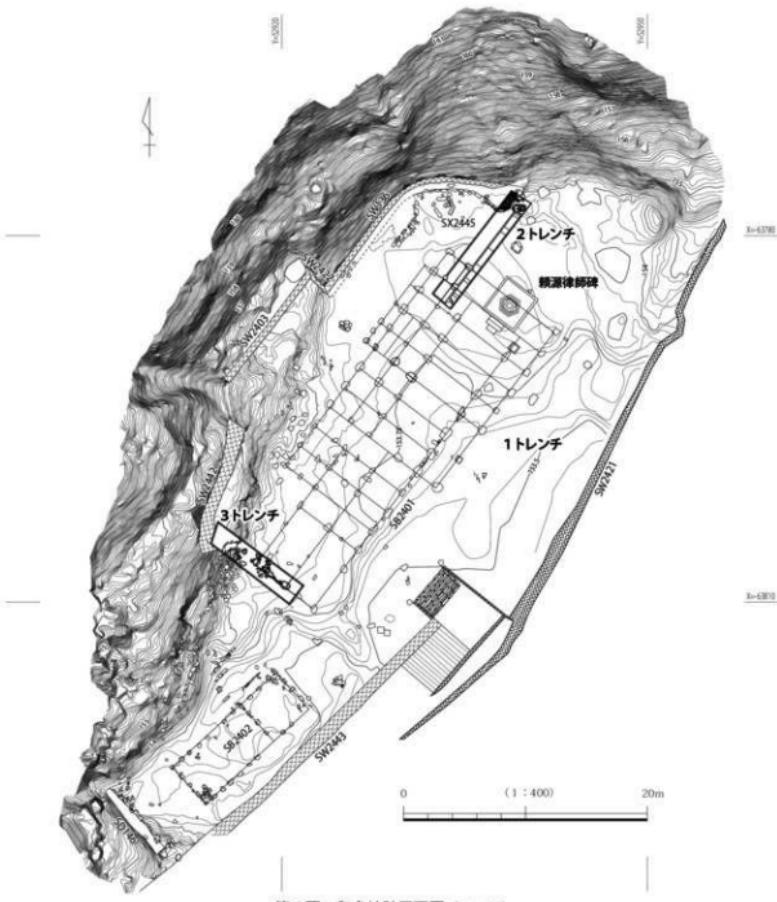
和多坊跡は、根本堂より約10m低い場所（上段平坦面、標高153m）にあって、その面積は1,239m<sup>2</sup>（南北67m、東西28m）ある。和多坊は、明治38年（1905）に焼失し、敷地の一角には頼源律師碑（大正13年（1924）建立）が和多坊跡を見守るように立っている。

和多坊跡には礎石群が整然と並んでいる。これは明治38年に焼失した建物の礎石である。礎石群は平坦面の中心に建つ建物跡SB2401の一部で、1トレンチの中央で10通りの礎石列の据付掘形を確認した。その結果、建物規模を桁行15間、梁間6間の南北棟に復元できた。このほか、SB2401の西（背面）で裏門跡と推定される石組、2トレンチでは池を確認した。

建物跡SB2401の南側で確認された建物跡SB2402は、桁行12間、梁間4間の南北棟で、倉庫等の建物の可能性がある。明治期の絵図にSB2402が描かれていないことから、江戸後期から明治初期に廃絶したと考えられる。

和多坊跡からの出土遺物は6,000点近くあり、そのなかで土師器が約82%と圧倒的多数を占めている。貿易陶磁器と国産陶磁器は2%弱と極端に少ないことが分かった。なお、第1期造成の時期の決め手となった土器溜りSX2419から出土した中世土師器は、13世紀後半頃の一括資料で、編年材料として有効な資料となった。また、古代須恵器や土師器の出土は、古代において何らかの活動があったことを示している。

今回の調査で大きな成果は、三度の造成面を確認したことである。第1期造成は標高153.5m、東西の造成幅17.5m、第2期造成は標高153.7m、東西の造成幅20m、第3期造成は標高154m、東西の造成幅28.8m（西側拡張部5.7mを含む）となり、平坦面の東側（本覚坊側）を埋め立て、次第に規模を大きくする状況を確認した。

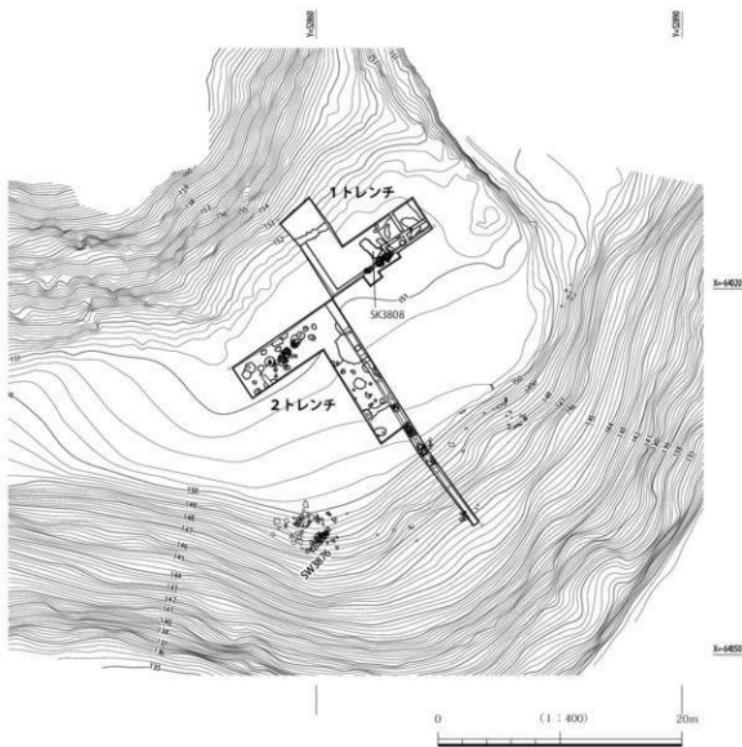


第6図 和多坊跡平面図（1:400）

狭小なトレンチでの調査のため各造成時期を出土遺物から確実に押えることはできなかったが、全体の出土遺物や炭化物の測定年代から第1期造成は13世紀後半以前、第2期造成は13世紀後半以後、3期造成は16世紀代と推定した。

#### イ. 等済院南区（第7図）

根本堂地区の南端にある等済院跡から、さらに南の小高い丘を登ると広い平坦面が現れる。面積は約743m<sup>2</sup>（南北65m、東西18m）と広く、主要な僧坊跡に劣らない敷地である。本調査区は、絵図に記載がなく、現状では礎石を確認することはできないが、この広い平坦面に何らかの僧坊施設が存



第7図 等渕院南区平面図 (1:400)

在したのではないかとの想定のもと調査を行った。

遺構の存在が想定される平坦面の中央に2つのトレンチを配置した。1トレンチ(北側)は、南北7.5m、東西10m、幅3m(面積75m<sup>2</sup>)、2トレンチ(南側)は、南北11.5m、東西10m、幅3m(面積115m<sup>2</sup>)とした。2トレンチの南北方向には、さらに南にサブトレンチを設定した。なお、和多坊跡と同様に各トレンチには任意のグリッドを設定した。

等渕院南区の広い平坦面は、絵図には描かれていないものの、調査で50穴以上のピット、柱痕が残る柱穴列、2つの埋葬遺構を確認したことから、何らかの僧坊施設があった可能性が高い。

2つの埋葬遺構から出土した越前大甕や備前大甕の製作時期は異なるが位置関係から同時期に使用されたものと思われる。廃棄土坑と思われるSK3808からは、200点近い陶磁器類が出土した。寺ならではの青磁の香炉や茶道具としての中国製天目のか、青磁碗や青白磁梅瓶、朝鮮系黒釉壺などの貿易陶磁器を含んでいる。

また、出土遺物全体としては6,000点以上を数え、中・近世土師器は80%近くと圧倒的に多く、

貿易陶磁器と国産陶磁器の合計は約11%であった。調査では中世瓦も出土したが、量的には少なかった。分布調査の採集遺物としては、備前焼の甕や鉢など貯蔵用、調理用の遺物が目立つ。

2トレンチの調査で三度にわたる造成が行われ、それぞれ石垣を備えていることが確認できた。この造成は、南側の崖面を面的に二度拡張している。第1期造成は地山削り出しに、第2期造成は南へ2.4m盛土造成し、第3期造成はさらに南へ2.2m盛土造成して、次第に面積を拡大させている。

各造成時期は、和多坊跡と同様に狭小なトレンチ調査であったため造成時期を特定することは困難であったが、全体の出土遺物や炭化物の測定年代から第1期造成は12世紀代、第2期造成は13世紀後半以降、第3期造成は15世紀～16世紀と推定した。

#### ウ. 鰐淵寺川南区（第8図）

浮浪淹地区としたエリアの北部については、平成24年（2012）度に埋蔵文化財調査を行った。

浮浪淹地区にはD-1、E-0～E-4およびF-1～F-15の平坦面があるが、これらのうちF-1～F-6のある範囲を鰐淵寺川南区とした。遙堪岬から鰐淵寺に訪れる際は、かつて鰐淵寺川にかかっていた仏心橋（昭和18年に流失）を渡りこの地に至り、北の根本堂方面または南の山王七仏堂や浮浪淹方面に向かうこととなる。まさに鰐淵寺の玄関口ともいえる場所であり、江戸期の絵図ではここに高札場や浴室が描かれている。また、この地は鰐淵寺における信仰の中心である藏王堂と根本堂地区の結節点に位置しており、両者間を移動する際は必ずここを経由することとなる。

また、三方を川に囲まれた生活における利水が容易な場所である。

以上のような観点から、鰐淵寺川南区の平坦面は僧坊などの施設が存在していた可能性が高く、また、根本堂地区とは性格を異にすることも考えられた。よって、この地のうち、道路沿いの比較的広い平坦面であり、鰐淵寺川に面する崖で遺物包含層が確認されたF-1・F-2、および、江戸期の絵図に浴室が描かれていたF3を調査対象地とした。なお、これら3つの平坦面の標高はそれぞれ134m、132m、130.5m付近である。

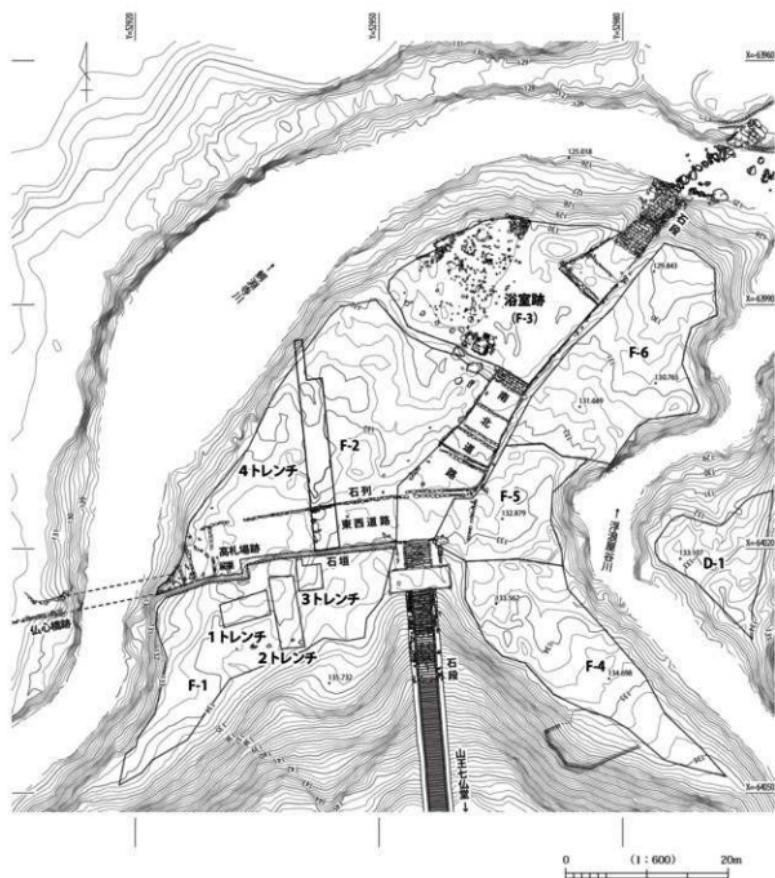
この区の平坦面F-1～F-6を合わせた面積は2,201m<sup>2</sup>に及び、うち調査対象となったF-1・F-2・浴室跡（F-3）の合計面積は1,391m<sup>2</sup>を占める。このように、鰐淵寺川南区は、山間にあっては比較的広い平坦面が確保できることから、僧坊などの関連施設が配置されたと想定できた。

今回の調査の結果、僧坊があったことを傍証するとみられる建物跡などを発見することができた。

また、江戸期の絵図に描かれた浴室の存在を裏付ける礎石列や窓跡を確認したほか、採集した墨書きや刻書土師器からは、鰐淵寺川南区が鰐淵寺において、重要な宗教的空間であったことが垣間見てきた。

今回の調査では、鰐淵寺川南区で度重なる造成が行われていることが分かり、平坦面の利活用が積極的に行われていたことが判明した。F-1とF-2で推定した造成時期のうち、第1期（13世紀以前）、第2期（13～15世紀）、第3期（15～18世紀）、第3期の中間時期（16世紀）は和多坊跡や等湯院南区でそれぞれ確認された三度にわたる造成時期とほぼ合うことから、鰐淵寺川南区における境内整備も、根本堂地区と一体的に行われていたことが明らかとなった。

この地における境内整備の目的は、僧坊の設置がまず考えられる。F-2で見つかった建物跡などは、



第8図 鰐淵寺川南区平面図 (1:600)

僧坊の存在を傍証するものとみて良いであろう。

しかし、今回の調査における最も興味深い成果は、「天王」と刻まれた土師器や、京都系土師器皿の大量出土により見えてきた、鰐淵寺川南区がもつ宗教的、儀礼的な場としての機能である。浮浪淹、藏王堂から下った最初の開けた場所であるこの地が、鰐淵寺の信仰・儀式における重要な空間であったことが垣間見えてきた。

## 工. 発掘調査のまとめ

以上、3箇所の発掘調査によって土層の状況や出土遺物などから各造成時期を推定したが、これをまとめると下記のとおりとなる。

第1期造成 12世紀代 和多坊跡 1期・等湯院南 1期・川南 (F-1) 1期造成

第2期造成 13～15世紀和多坊跡 1期・等湯院南 2期・川南 (F-1) 2期造成

第3期造成 16世紀代和多坊跡 3期・等湯院南 3期・川南 (F-1) 3期・川南 (F-2) 2期造成

根本堂地区の北部と南部に対峙する位置関係となる和多坊跡と等湯院南区は、ほぼ同じ標高に立地している。現成院跡も含め、境内中枢部の上段平坦面の造成が同時に、大規模かつ計画的に行われたことが推定できた。また、鰐淵寺川南区も第1期造成段階から根本堂地区と一連の計画に組み入れられていたとみられる。これがもつ意味は非常に大きい。

井上寛司氏の時期区分との関係で言えば、第1期造成が鰐淵寺第1期に、第2期造成が鰐淵寺第2期の開始期に、第3期造成が鰐淵寺第2期の末期に当たると考えられる。これらは鰐淵寺の歴史の転換期に大規模な造成を行っていたこととなる。換言するならば、歴史学の認識と考古学の実態とがまさに整合性を持つのである。

また、これらの遺構・遺物が良好に遺存していることも確認した。中世の姿をそのまま目にできる境内であることを認識できた今、それがいかに貴重、かつ重要であるかを感じないわけにはいかない。和多坊跡では、13世紀以降大規模な造成が断続的に行われていた事実をつかんだ。中世から近世にかけて活躍する鰐淵寺の中核僧坊が、その出現から明治38年の焼失まで継続してそこに営まれていたことを明確にしたのである。中世から続き、後醍醐天皇や毛利元就などとも関係したこの坊の姿が今なおひっそりとあることに、一種の感動を禁じえない。

等湯院南区では、これまで知られていなかった僧坊跡を発見し、僧坊群の展開を実証することができた。分布調査で確認された平坦面が僧坊跡である蓋然性を高くする点で重要な成果である。かつまた、ここは鰐淵寺第2期末期に焼失した後、再建されなかった。戦国大名らの介入によって、宗教的な抑え込みと寺領の大幅な削減をこうむり、寺としての岐路に立っていた鰐淵寺のあり様を直接的に示す事例である。壮大な歴史の一頁がまさに眼前に現われたのである。

鰐淵寺川南区は、特殊な遺物の出土等から宗教的・祭祀的な場としての役割を担っていた場所と推定できた。しかもそれは鰐淵寺総体としての計画のもとに造成されており、中世から近世にかけて連綿とその意味を維持していくのである。

いずれの調査も方法的に反省すべき点はあったが、成果は想定以上のものがあったと考えている。今後はこの成果を基盤として、より詳細に鰐淵寺史とその実態を追及していくれば、この稀有な寺の価値は一層高まるものと考えている。

#### (4) 石造物調査

鰐淵寺は山陰地方屈指の天台宗の古刹であり、豊富な文化財の伝来とともに、これらについて諸研究の蓄積が知られている。しかしながら、石造物の分野に限って言えば、石造美術、歴史考古学からごく一部の資料が紹介されたに過ぎず、これまであまり調査研究の対象に登っていないかったと言ってよい。

本調査は、以上のような現状を踏まえて、石造物の有無の確認から始まり、その種類や分布といった全体的様相を掴むことを第一の目的とした。そして、その整理の上に立って、鰐淵寺石造物の年代

や特徴を明らかにすることを第二の目標とした。具体的には、①境内外の分布調査を実施する、その上で②石造物の様相を把握する、そして③特徴的なものについて実測調査を行い、年代や性格などを検討する、という方法をとった。

今回の調査によって、境内の石造物、墓地群の石塔、参詣道沿いの一丁地蔵など、すべてではないが、鰐淵寺の石造物の全体像を、概ね把握できたものと思われる。

鰐淵寺境内中枢地域の石造物は、灯籠、石仏、狛犬、水盤、石塔、石碑など種類は多く、それらのほとんどは、根本堂から摩多(陀)羅神社周辺に置かれている。石材は来待石が大半を占め、紀年銘によると18世紀後半から20世紀、江戸時代後期から近・現代のものであった。

鰐淵寺の墓地群は、堂宇や僧坊群とは別の地区、すなわち松露谷墓地I群・II群、そして川奥墓地の3箇所からなる。

根本堂地区の対岸の松露谷地区（墓地群）では、急峻な斜面に平坦面が並び、そこに五輪塔、宝篋印塔、無縫塔などの墓石が今も残されている。墓石の造立は14世紀に始まり、現在まで連続と継続している。

一方、鰐淵寺川の上流、谷の奥まった川奥地区も墓地として選定された。川奥墓地の造墓開始時期は同じ14世紀ごろであるが、16世紀末から17世紀前半にはその機能を停止する。

なお、松露谷墓地群では、13世紀代の藏骨器と思われる常滑焼も採集され、14世紀以前に既に墓地利用が始まっていた可能性がある。基本的には中世期のあり様を踏襲し、そこに近世期の改変と新たな墓塔造立が継続された。つまり、境内中枢部と同様に、中世の面影を残しつつ、現在に至る寺の歴史を加味しているのである。

#### (5) 考古学的調査のまとめ

以上のように、考古学的調査によって顕わになった成果は多岐にわたるが、主要なものとして次の3点に絞ることができよう。

第1点は、この地での活動が古代（11世紀以前）にさかのぼることを示す土器を多数採集したことである。鰐淵寺の創建に関しては、考古学なくしては語れなくなつた、といえる。

第2点は、南北両院が現境内に位置することをつきとめたことである。これまでには、北院は唐川、南院は大寺谷あるいは別所、という、境内から離れた場所を考える説が有力だったが、これを完全に否定した。

第3点は、現境内地が大きく三度の造成工事によって形成されたことを解明したことである。鰐淵寺境内の形成過程が具体的に見えてきたことは、寺史と関連して極めて重要である。 （石原聰）

## 第2節 A-62 平坦面の調査

『前報告書』P52 第5表の平坦面一覧表の備考欄に「平成15年試掘トレンチ（遺構・遺物なし）」であることから、調査内容について改めて報告する。

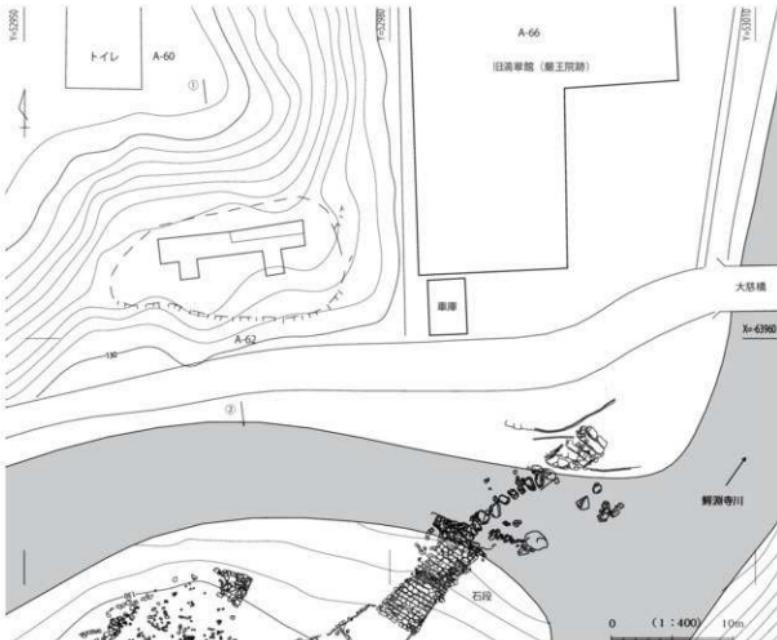
なお、今回、トレンチの位置を測量し国土座標を取り付け、当時作成していた平板測量による平面図と合成した<sup>(1)</sup>。

### 1. 調査に至る経緯（第9・10図）

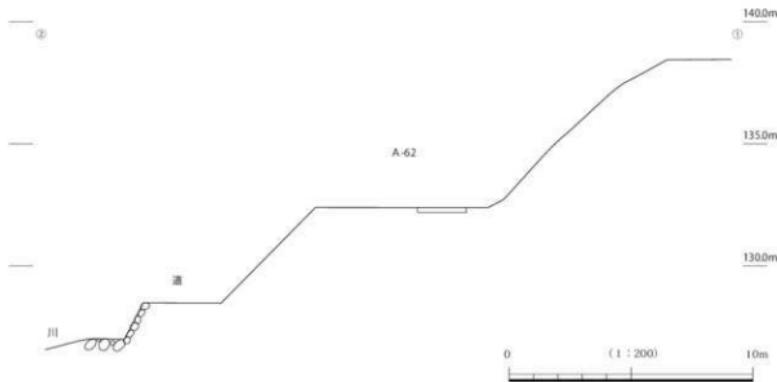
平成15年（2003）、島根県（景観自然課）による中国自然歩道の便益施設として、A-60 平坦面<sup>(2)</sup>に設置されているトイレに替わる、新たなトイレ建設工事が計画された。平坦面を、川沿いの道の高さまで削平し、既存のトイレより規模を拡張するものであった。削平を伴う新たな施設建設であることから、平田市教育委員会（当時 以下、委員会）に埋蔵文化財の有無について照会があった。

委員会では建設予定地が、一定の面積を持った平坦地であることから、何らかの施設が存在した可能性を考え、調査が必要と判断した。

そこで、工事着手前に国庫補助事業の市内遺跡発掘調査事業で、試掘調査を実施することとした<sup>(3)</sup>。



第9図 A-62 平坦面 平面図



第10図 A-62平坦面 断面図

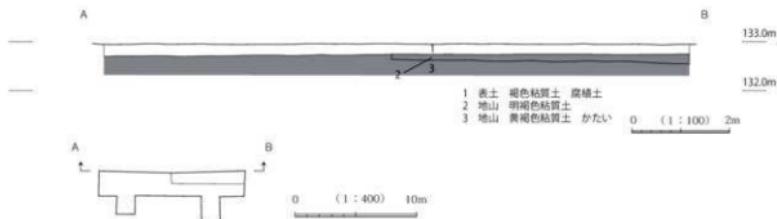
## 2. 調査地（第12・13図）

調査地は、A-66 滴翠館跡（鐵王院跡）広場の西側で、鶴淵寺川沿いの道に接する場所である。道からの高さは約4.5mである。

平坦面は、西に細長く、幅18.60m、奥行9.40m、面積127m<sup>2</sup>である<sup>(4)</sup>。東側（旧滴翠館側）には石垣が積まれている。平坦面南側は、川沿いの道によって削平された可能性があり、本来はさらに広かった可能性がある。

## 3. 調査の方法と結果（第11・14・15図）

調査は、平坦面中央の東南方向に2m×12mのトレンチを設定し、人力による掘削を行った。最終的には、トレンチ西側で南方向に拡張（1.5m×1.5m）し、東側で南方向に拡張（2m×1.5m）し



第11図 トレンチ土層断面図

た。調査面積は 29.25m<sup>2</sup>である。

地表面では、陶磁器などが散見されたが、表土の下はすぐに地山、遺構やそれに伴う遺物は確認できなかつた<sup>(5)</sup>。

のことから、この場所に何らかの施設があつたとは考えにくく、地表面の陶磁器類も廃棄物と判断した。  
(原 俊二)

### 註

- (1) トレンチの埋め戻しは、工事が引き続き行われる予定であったことから、埋め戻しは不要とされていた。しかし、結局、諸般の事情により工事は中止となり、予定地はそのまま放置された。現在、トレンチは自然に埋まり、なんだ状態となっている。
- (2) 平坦面の名称は、3ページ、第2図を参照。
- (3) 平田市教育委員会での調査名は、鰐淵寺第1次発掘調査としている。
- (4) 平坦面の規模等は、『前報告書』P52、第8表に従う。
- (5) 地表面採集の陶磁器は、国産陶磁器・土器のうち、中・近世土師器(不明)4点。その他として、近世陶器7点・近世磁器14点・擂鉢1点・近世瓦2点である。(『前報告書』80.81ページ、第10・11表)。



第12図 A-62 平坦面遠景（鰐淵寺川対岸・南から）



第13図 A-62 平坦面遠景（東から）



第14図 A-62 平坦面近景（完堀状況）



第15図 A-62 平坦面調査風景



## 第4章 発掘調査

### 第1節 調査の目的と方法

#### 1. 調査の目的

平成26年度までの調査により下記の課題が残された『前報告書』。このたび、境内環境の状況を把握するとともに、残された課題を解決するために平成29年度より4年間の年次調査計画を立案し、調査を実施した。

##### (1) 根本堂平坦面造成の時期確認

根本堂の所在する平坦面（A-1～A-71）は、境内中枢部の最上段平坦面である。根本堂は中世期に南北両院が統一されたときに建立されたとされるが、この平坦面の形成時期について考古学的調査により解明する必要がある。また、A-5 平坦面に所在したとされる護摩堂についての遺構残存状況についても面的に確認する。A-5 平坦面の調査は平成29年度に実施し、前面の A-9 平坦面についても令和元・2 年度に調査した。また、釈迦堂については、全解体修理にあわせて、平成29・30 年度に地下の造成状況及び周辺状況を確認した。

##### (2) 覚城院跡・恵門院跡平坦面の形成時期の確認

覚城院跡・恵門院跡平坦面（A-32 平坦面）は、根本堂平坦面の下段にあたり、根本堂平坦面造成時の残土を利用して平坦面とした可能性があるが、分布調査からでは造成の状況がわからず、発掘調査により平坦面の形成時期を解明する必要がある。

##### (3) 開山堂周辺の遺構確認

分布調査の結果では、開山堂を取り巻くように古代の須恵器が発見されていることから、鷲淵山成立の原点の場所であった可能性がある。また、江戸期の絵図には、周辺に三重塔が描かれており、具体的に遺構が存在するか発掘調査を実施する必要がある。

##### (4) 本覺坊周辺の遺構確認

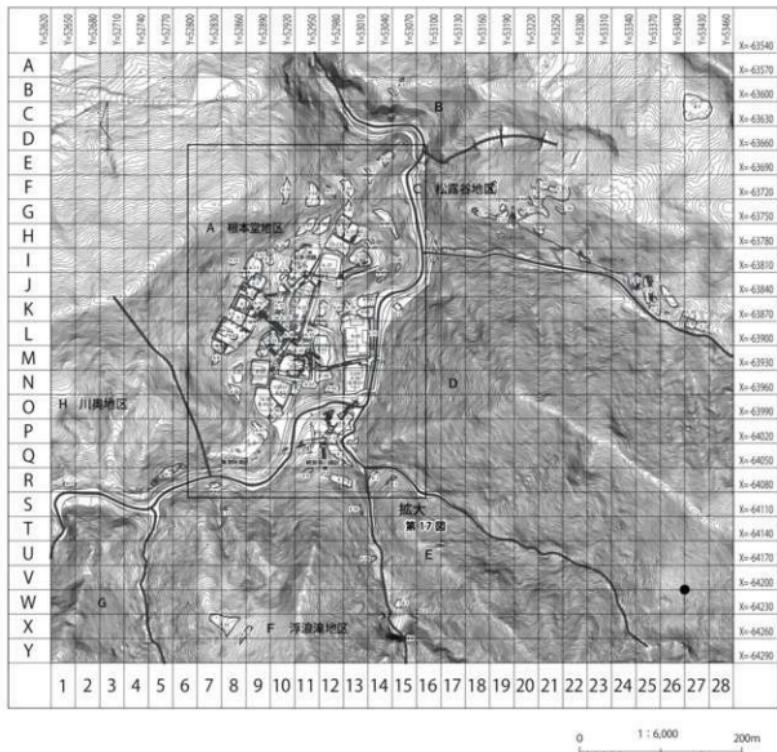
分布調査で、本覺坊跡の地表面から古代の須恵器が確認されていることから、古代の遺構面が確認できる可能性がある。本覺坊の具体的な遺構が存在するか発掘調査を実施する必要がある。

#### 2. 調査の方法（地区割り）

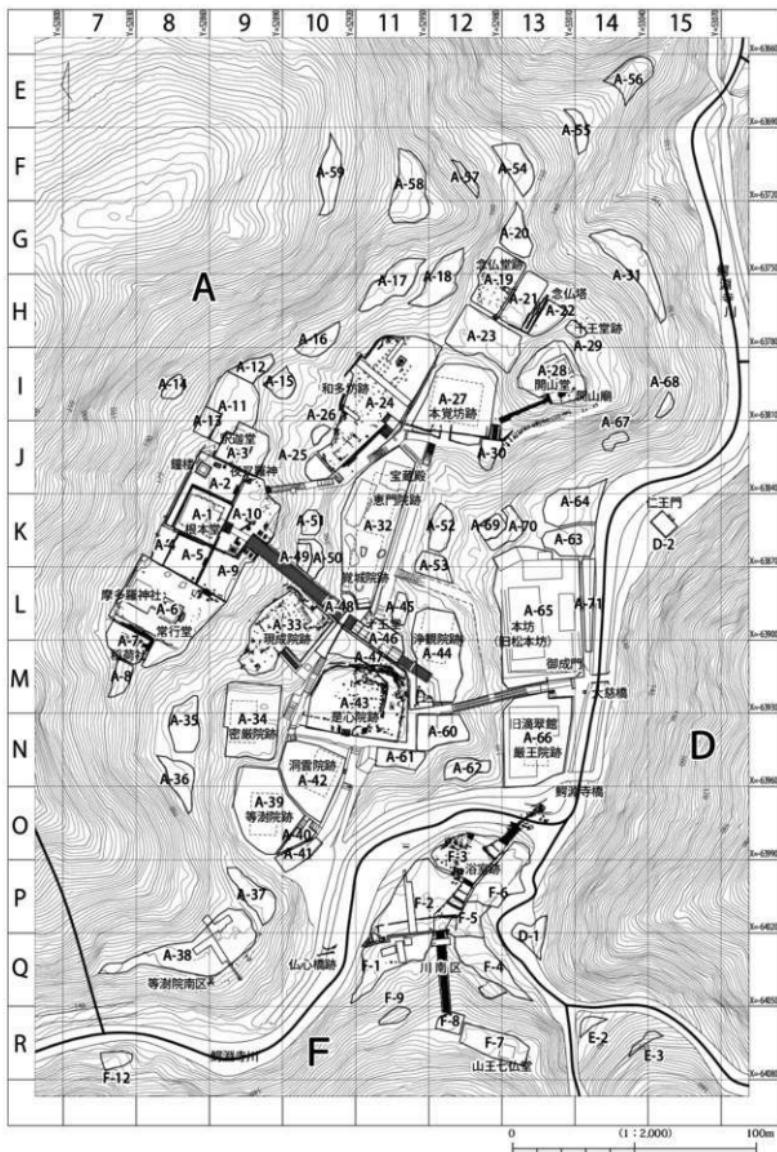
地区については、地形測量図をもとに境内中枢域をAからHの8地区に分けている。山の稜線や川など自然地形により意図的に区分したものである。A地区を中心にした中枢地区を網羅するグリッドを設定した（第16・17図）。1グリッドは、東西30m、南北30mの大グリッドを組み、その中に、柱間寸法10尺に相当する東西・南北3m小グリッドを基本とし、3mグリッドで遺物等の取り上げを行った。遺跡の保護の観点からなるべく狭小のトレーナーでおかつ、遺構、遺物の残存状

況、建物跡の確認を行うこととしたため、トレンチによる部分的な発掘調査しか行っていない。遺物の取上げは、座標軸をもとにグリッドを組み取上げを行った。

(石原聰)



第16図 地区割図 (1 : 6,000)



第17図 地区割図(1:2,000)



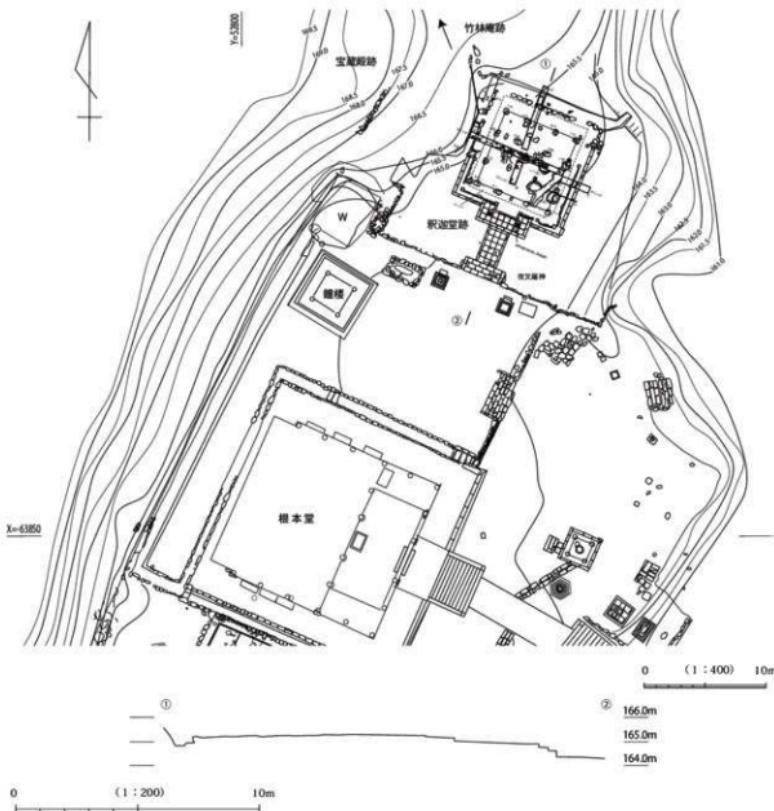
## 第2節 釈迦堂（A-3 平坦面）

### 1. 釈迦堂の位置と沿革（第18図、図版1）

釈迦堂は、根本堂の正面に向かって右側（北側）に立つ三間堂である。建物の形式は、四本の隅棟が屋根の中央に集まる宝形造で、正面に一間の向拝を持つ。

境内に残る建造物の中では最古の建造物で、建立の年月等を記した棟札や部材に書かれた墨書きなどから、江戸時代初期の寛文4年（1664）に建てられたと考えられている（『科研報告書』）。

享保2年（1717）の『雲陽誌』には「法華三昧堂」、宝暦14年（1754）の『万指出帳』には「法華堂」と記されている。



第18図 釈迦堂位置図

## 2. 建物解体修理の成果概要

駿迦堂は、建立の年月等を記した板(棟札)や部材に墨で書かれた年月(墨書)などから、寛文4(1664)年に建てられたと考えられる。平成28年度から行われた解体修理工事は、屋根の葺き替えと部材の取替えを中心に実施した。修理前の屋根は全面が銅板葺であったが、屋根を剥ぐと厚さ約1cmの薄い木の板を重ねて葺く工法(こけら葺)の痕跡が現れたことから、二重の軒付をこけら葺で復元した。修理工事の際に下記の墨書を確認した(『修理報告書』)。

### (1) 建立年代を示す墨書

寛文4(1664)年と寛文12(1672)年の棟札が残されていたが、幕股の上の肘木に「寛文三年」の墨書が見つかり、寛文4年建立の可能性が高まった。また、幕股を飾る法輪には金箔が張られていたことが分かった。金箔が残るものは保存処理して設置し、他は金箔を貼り直して、当時の姿を再現した。

### (2) 改造時期を示す墨書

建物内の奥にある位牌棚は、建立後の改造によって設けられたものであり、内壁の板に「正徳三年」(1713)と大工らの名前を記した墨書があり、改造時期が明らかになった。

### (3) 屋根の葺き直し時期を示す墨書

屋根頂部の宝珠が載る四角い台(露盤)の側面には、葵の紋所が飾られている。その裏面に「文久元年」(1861)の年号と大工名が記されていた。幕末に行われた屋根の葺き直しに伴い、露盤も取替えられたことが分かった。

## 3. 発掘調査の目的と方法

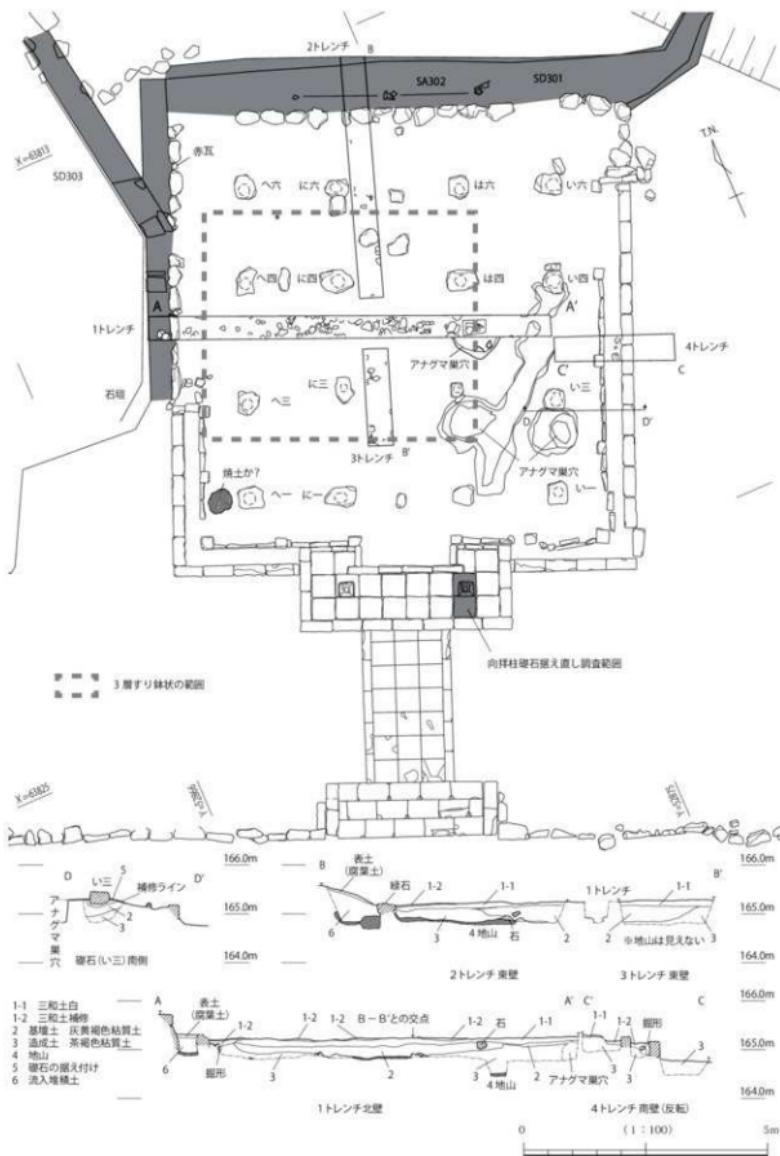
駿迦堂の解体修理工事に合わせて発掘調査を行った。調査の目的は、建物の基礎を確認し、さらに基壇の構造を把握することと、基壇造成年代を明らかにすることである。調査は、平成29年度、建物解体後に建物基壇内のトレンチ調査を行い、平成30年度は、建物修理用作業足場が撤去された後、周囲の排水溝の有無を確認した。

トレンチ調査は、建物解体後に礎石・縫石が露出した状況で、基壇の造成状況を確認するため実施した。礎石に影響を与えないように幅約50cmのトレンチを、基壇の各辺の中央を通る位置で、十文字状に設定して掘り下げた。トレンチは、東西方向に、1トレンチと4トレンチ、南北方向に、2トレンチと3トレンチとし、1トレンチ長さ8.4m(幅0.5m)、2トレンチ長さ5.0m(幅0.5m)、3トレンチ長さ2.0m(幅0.5m)、4トレンチ長さ2.4m(幅0.5m)で、建物基壇部分の造成状況を確認しながら、0.5m程度まで掘り下げた。一部で地山と考えられる黄褐色土(4層)を確認した。

また、建物解体後の礎石の状態についても、現状で記録した。

## 4. 層序(第19図、図版2・3)

建物の中心と想定される部分の造成は、地山整形後、3層茶褐色の造成土を基壇中央付近では、す



第19図 積迦堂平面図・土層断面図

り鉢状に盛り、2層灰黄褐色の基壇土は、すり鉢状部分を中心に盛って造成している。さらにその上に厚さ最大15cmの白色の三和土を突き固めており、白色土が締まった状態であった。つまり、地山から造成土・基壇土・三和土の順に造成されていた。調査区の東半分については、動物（アナグマ）の巣穴により空洞化している箇所があり、この部分については、掘下げて確認した。巣穴が一部礎石にかかっている部分では、礎石下部の状況を確認した。

造成年代については、下層の造成土からコビキAの瓦が出土しており、16世紀以降の造成と考えられる。

トレーンチ西側及び北側では排水施設が土砂で埋没している状況が確認できた。

## 5. 遺構（第19図、図版2～4）

### （1）礎石（図版3）

礎石は、上面が平坦な自然石である。16石配置されており、そのうち、い三の礎石1箇所ではアナグマ巣穴の壁面で礎石の据付状況を断面で確認した（第19図）。土層観察では、礎石の掘形内にグリ石などの基礎は確認できず、礎石底面は、2層基壇土（灰黄褐色粘質土）上面であった。根入れの深さは約18cmである。また、4トレーンチの東端の縁石（雨落葛石）は造成土上に据えられている。

### （2）排水施設 SD301・303

排水施設は、建物背面（北側）では、明確には認められず、西から東へ向けた傾斜による自然排水のみであることがわかった（SD301）。また、建物西側面では、基壇の縁石と西側石垣の間に石組排水溝（SD303）を確認した。これは、釈迦堂北側の竹林庵や西側の宝蔵殿からの雨水を排水する目的の溝であろう。

### （3）杭列 SA302

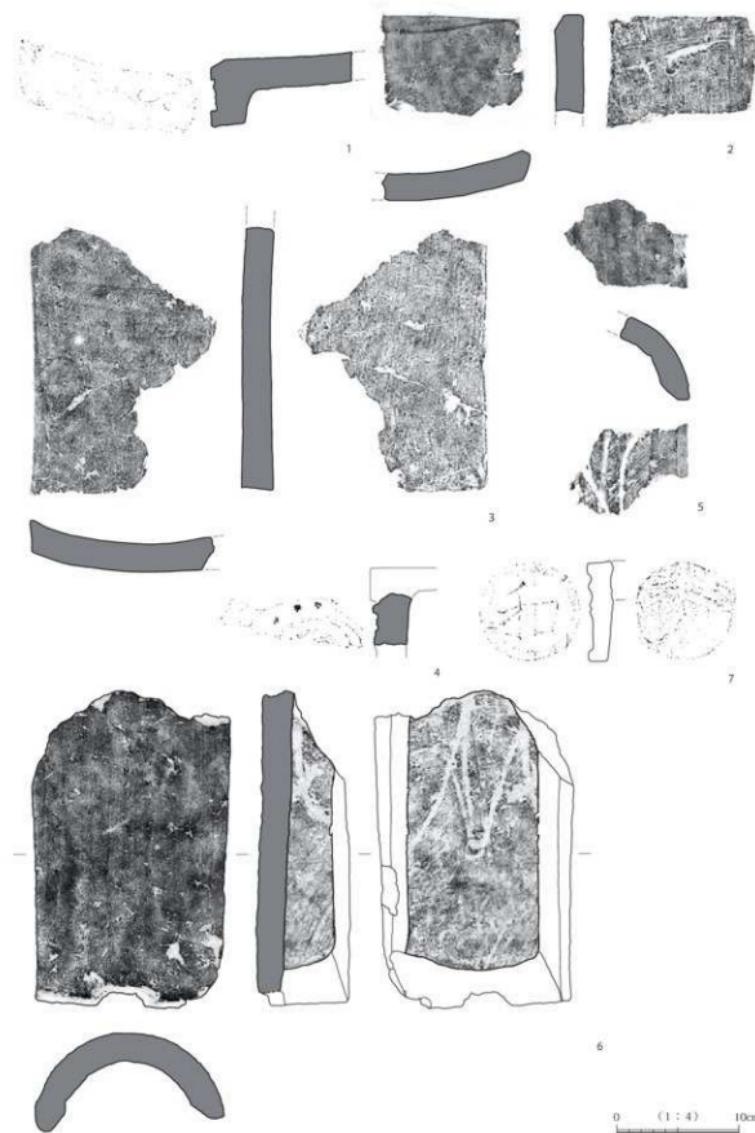
背面、北側に板塀に関連する杭列が3箇所で確認でき、杭の間隔は、1.8mである。明治期の絵図に板塀が描かれており（第20図）、板塀の柱列である可能性がある。

## 6. 出土遺物（第21図、図版26）

基壇表面から、土器・陶磁器・鉄釘・銅の飾金具・錢などを採取したが、いずれも後世の廃棄品と判断した。造成土中から瓦が出土している。主に2層上面及び2層中から丸瓦・平瓦の破片を確認した。丸瓦は17点出土した。いずれも小片である。そのうち7点を図示した。1は軒平瓦である。中心飾が宝珠紋と思われる四回転唐草紋軒平瓦である。唐草紋は宝珠の下側から出ている。2,3は平瓦である。2は狭端部で、凹面の端部を削る。3は広端部。4は軒丸瓦である。5,6は丸瓦である。6は、向拝柱礎石下の造成土から出土した。5,6ともに外面はヘラ



第20図 明治期の絵図（釈迦堂）



第21図 出土遺物

磨き、内面には波状の太い吊り紐痕と糸切り痕（コビキA）が残る。丸瓦A 1大型（幅15cm）である。7は、礎石脇に残置してあった釉薬瓦の赤色石州瓦の軒棟瓦で、小丸瓦当部に「和」の字が確認できる。釈迦堂北東の和多坊で使われた赤瓦と考えられる。

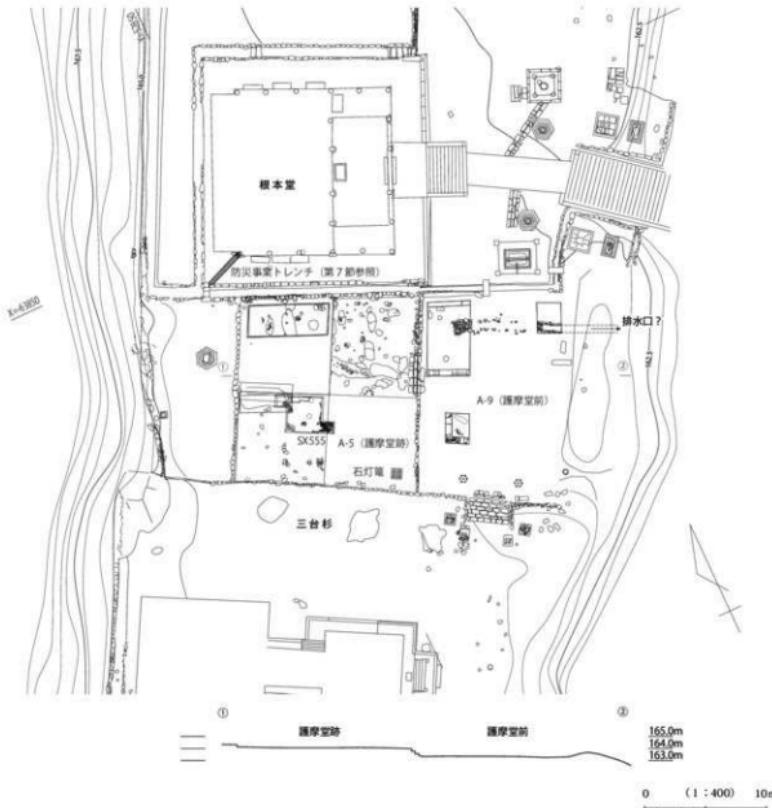
## 7. 造成の状況と時期

釈迦堂の建立年代は、寛文4年（1667）であるが、造成土から瓦が出土したことから、それ以前に一部瓦葺きの建物が存在した可能性がある。おそらく、戦国期末に根本堂平坦面の拡張造成を行い、堂宇を建設したと思われる。今回の調査は建物礎石に影響のない範囲でのトレンチ調査であり、下層の遺構などは確認していない。（石原 晴）

## 第3節 護摩堂跡 (A-5 平坦面)・護摩堂前 (A-9 平坦面)

### 1. 護摩堂の位置と沿革 (第22図、図版5)

護摩堂が所在したと考えられる A-5 平坦面は、根本堂の正面向かって左側(南側)に所在する南北(幅)15.6 m、東西(奥行) 15m の方形平坦面である。現在、堂宇はないが、石灯籠 1 基が残る。平成 29 年までは、梵焼会(護摩供養)がこの平坦面で行われており、『鳥居小路經孝書状(文書番号 279)』によれば、天正 4 (1576) 年に「護摩堂御造営の儀」とあり、このころに毛利輝元によって造営されたと考えられる。享保 5 (1720) 年の『萬抜出』には、「一護摩堂 梁行三間 枠行三間半板 本尊 不動明王 弘法大師彫刻 (中略) 一毎廿八日護摩堂 護摩供修行」とあり、江戸中期前半には護



第22図 護摩堂跡・護摩堂前位置図

摩堂は存在したと考えられる。また絵図A（IV・Vページ）に「ゴマ堂」として三間堂が描かれているが、絵図B（VI・VIIページ）には、描かれておらず、空閑地となっており、江戸後期から明治期に護摩堂が滅失したと考えられる。

## 2. 調査の目的と方法

鰐淵寺境内の最上段の平坦面には、本尊を祀る根本堂がある。さらにその周辺には常行堂、摩多羅神社、釈迦堂など中心堂宇が並ぶ。この平坦面について、平成25年（2013）に行った分布調査では近世以降の遺物のみの確認で、それ以前の状況が不明確であった。今回のトレンチ調査によって護摩堂の建物跡や下層に遺構面があるのか確認する。

平成29年度は、護摩堂跡平坦面（15.0 m × 15.6 m）を4分割し、対角線状に向き合う2区画を調査対象とした。西側区画を1トレンチ（7.3 m × 7.5 m）、東側区画を2トレンチ（6.5 m × 7.6 m）とした。また、1トレンチに北サブトレンチを設定し、廃棄土坑SK502と石垣平坦面造成土の確認を行った。造成土中では被熱層を上下2層確認し、炭化物を採取した。2トレンチでは、礎石抜き取り跡を確認した。

令和1年度は、2トレンチで確認した礎石抜き取り跡の並びを確認するために、第2トレンチの北側の区画を追加調査することとなり、3トレンチ（6.5 m × 2.5 m）を設定した。また、平成29年度に採取した石垣平坦面造成土の被熱層出土の炭化物を年代測定したところ、予想以上に古い年代結果が出た。

令和2年度は、前年度の年代測定結果に基づき、被熱層の面的広がりを確認するため、1トレンチ内の遺構の希薄なところで、なおかつ北サブトレンチにも重なる場所を選び、4トレンチ（3.0 m × 3.0 m、後に一部拡張）を設定した。

## 3. 層序（第23～26図）

層序は、第1トレンチ（北サブトレンチ）の土層を基本とする。地表面から順に、1～3層は、表土及び整地土である。4層上面で、護摩堂の礎石抜き取り跡や廃棄土坑を確認し、瓦（コビキA）などが出土した（第1遺構面）。13～15層は、整地土である。16層は、17層直上に堆積した被熱層（上層の被熱層）である。16層の炭化物を年代測定したところ11世紀前後～12世紀中頃であった。なお、16層を掘り込んで据えられた礎石を確認した。本来の掘り込み面は削平された可能性もある。礎石掘形内の炭化物を年代測定したところ14世紀の年代が得られた。これらのことから、礎石を第2遺構面とした。17層は、16層被熱層堆積時の地表面と考えられるが、土層断面での確認であるため、遺構は確認していない（第3遺構面）。18層は、19層直上に堆積した被熱層（下層の被熱層）である。この層の炭化物を年代測定したところ9世紀末～12世紀中頃であった。19層は、18層被熱層堆積時の地表面と考えられるが、18・19層は土層断面での確認であるため、遺構は確認していない（第4遺構面）。20層は造成土である。21層は地山である。

なお、第1遺構面（4層上面）で確認した廃棄土坑SK502の埋土は、4～12層である。9・10・11・12層から瓦（コビキA）・中世土師器・金属製品などが出土した。

## 4. 遺構

### （1）第1遺構面（第23～26図、図版5～9）

#### ア. 土坑 SX501

1トレンチの中央で確認したが、3トレンチにも広がる。規模は、95cm×78cmの楕円形状の土坑で、最大45cm大の角礫が詰められている。礫間には土砂がなく、隙間があり、礫のみが詰め込まれている。円形の井戸であった可能性があるが、掘り下げていないため、性格については不明である。

#### イ. 土坑 SK502

1トレンチ北端で確認した。平面規模が、420cm×140cmの不整楕円形の土坑である。深さは、確認面（第1遺構面）から最大で125cmある。土坑の底部に炭化物が主体となる黒色土層が確認できる。瓦・土器（中世土師器）・溶けた銅の製品・鉄釘などがその炭化層から集中して出土した。土坑の用途については、廃棄土坑と思われるが、規模が大きく他の性格があるかもしれない。

#### ウ. 建物跡 SB551（礎石跡 SP503・504・510・520）

護摩堂跡の建物跡か。護摩堂跡では、表土層を除去した段階で、礎石の抜取り跡と考えられるSP503・SP504を確認した。さらに、礎石下層のグリ石を残すSP510・SP520を見つけた。SP503とSP504については、遺構を半截して断面を確認した。断面観察では、一部分に礎石の据付け跡が残り、大部分は礎石抜取り跡であった。SP503とSP520の柱間間隔は、約3.3mである。

前面に残る石段との間隔がほぼ一致している。また、SP503とSP504、SP504とSP510の各間隔は、約3.0mである。これらのことから、江戸期に「ゴマ堂」として描かれる建物遺構の可能性が高い。

#### エ. 磚石跡 SP503

2トレンチの中央で確認した。規模は、160cm×80cm隅丸長方形である。上面規模を確認し、南北長軸方向に半截した。断面観察では、遺構に関係する土層は、深さ15cmである。一部で青灰色粘質土が残存しており、礎石の据付跡と考えられる。礎石下部据付のグリ石などは確認できない。

#### オ. 磚石跡 SP504

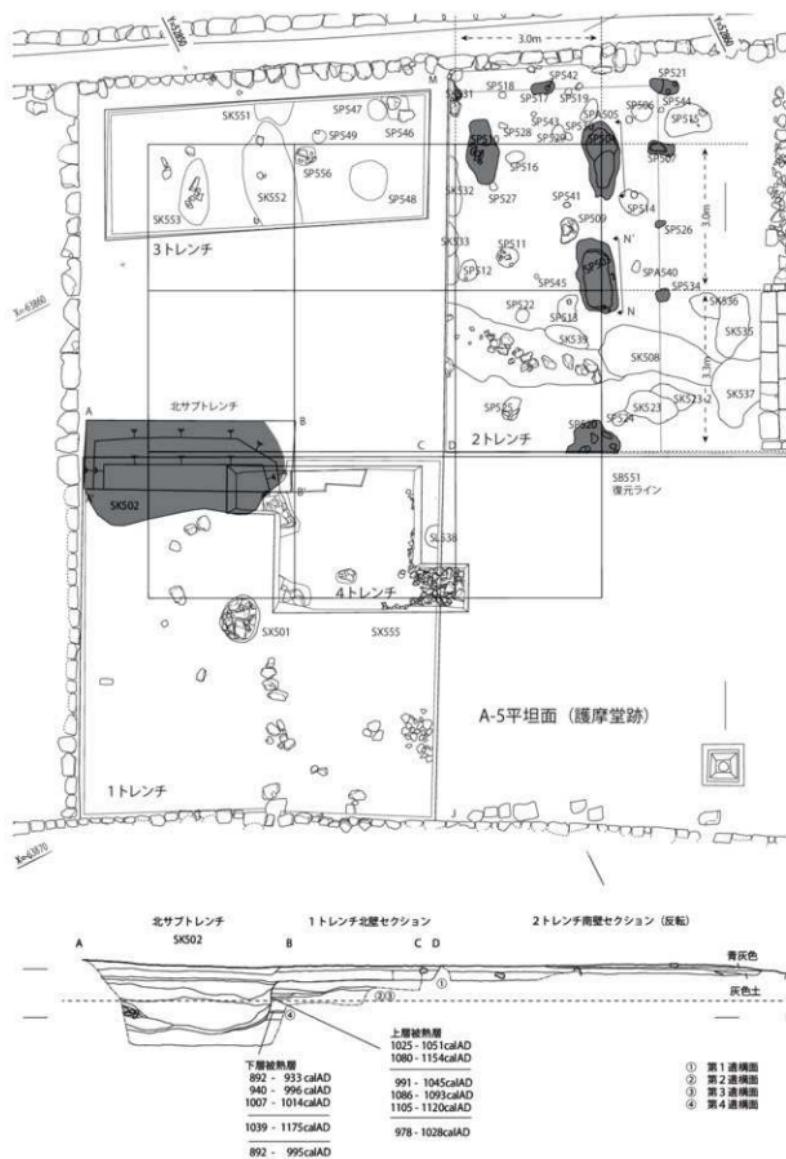
2トレンチの北側で確認した。規模は、160cm×70cmの長方形楕円形である。上面規模を確認し、南北長軸方向に半截した。断面観察では、遺構に関係する土層は、深さ16cmである。一部で青灰色粘質土が残存しており、礎石の据付跡と考えられる。礎石下部据付のグリ石などは確認できない。

#### カ. 磚石跡 SP510

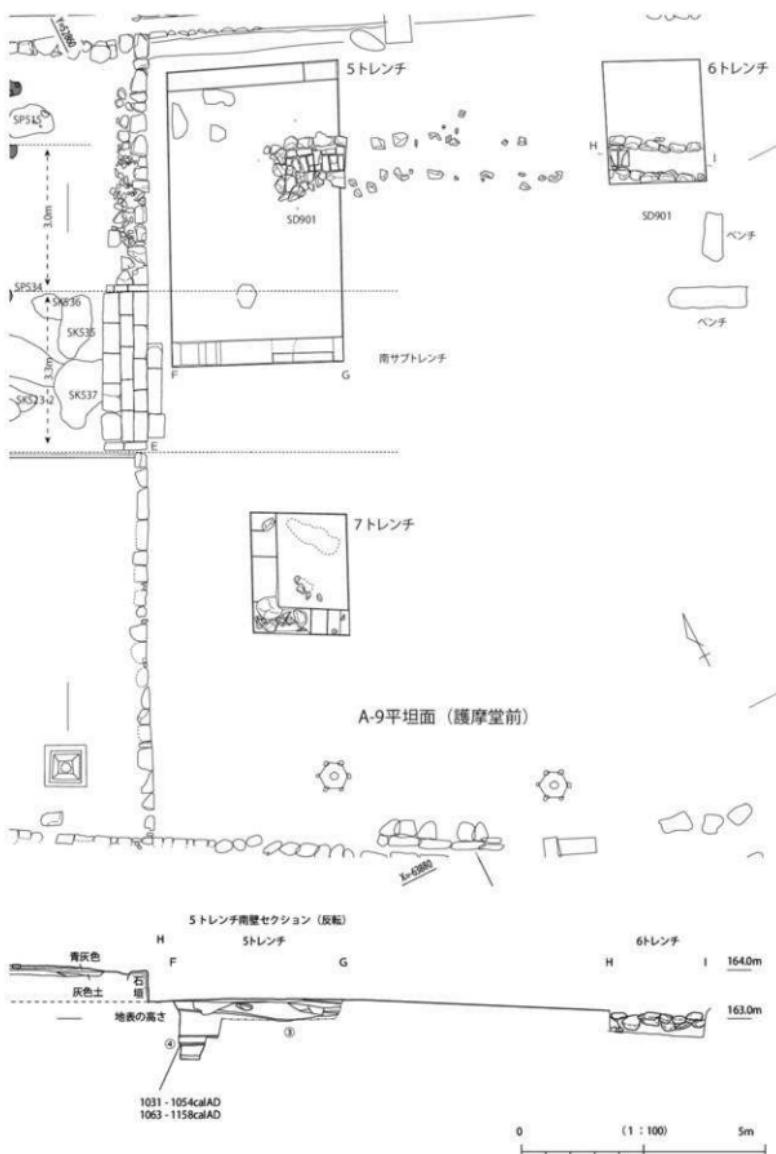
2トレンチの北西角で確認した。規模は、140cm×70cmの長方形楕円形である。上面確認のみで断面は確認していない。遺構の中央部には45cm×45cmの隅丸正方形のグリ石集中地点がある。礎石の下部である可能性がある。

#### キ. 磚石跡 SP520

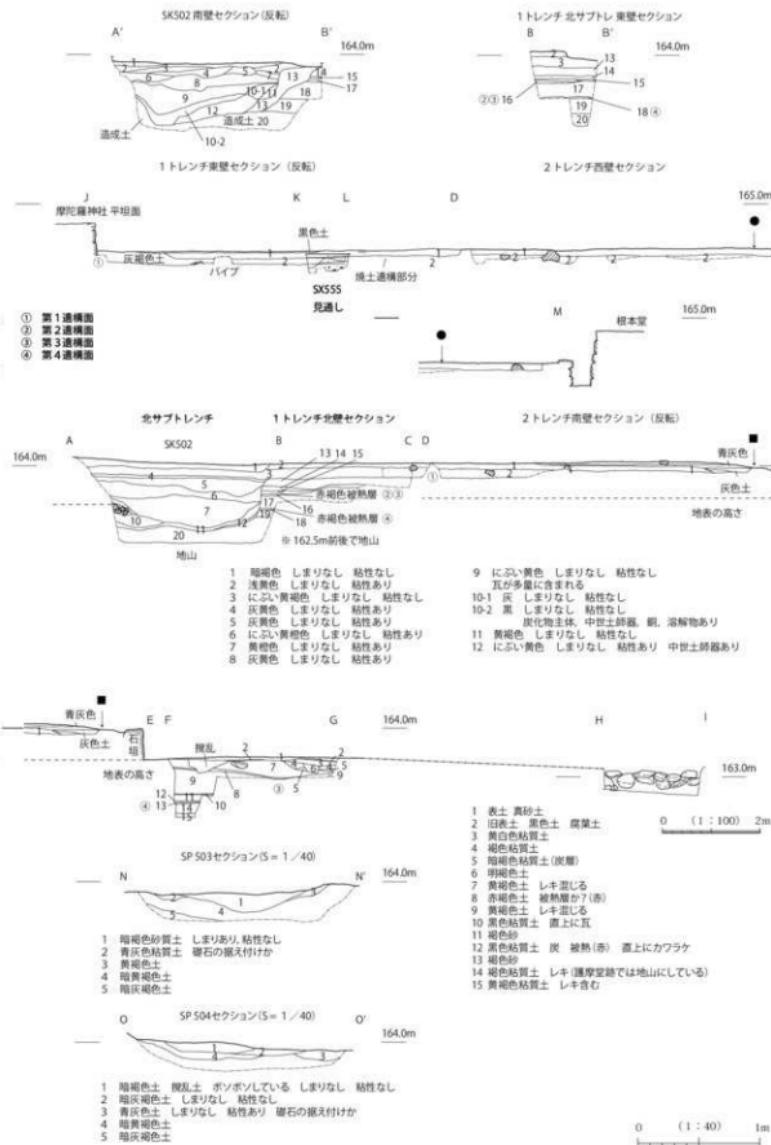
2トレンチの南端で確認した。規模は、100cm×58cmの不整半円形である。上面確認のみで断面は確認していない。グリ石が土坑中に混じっている。



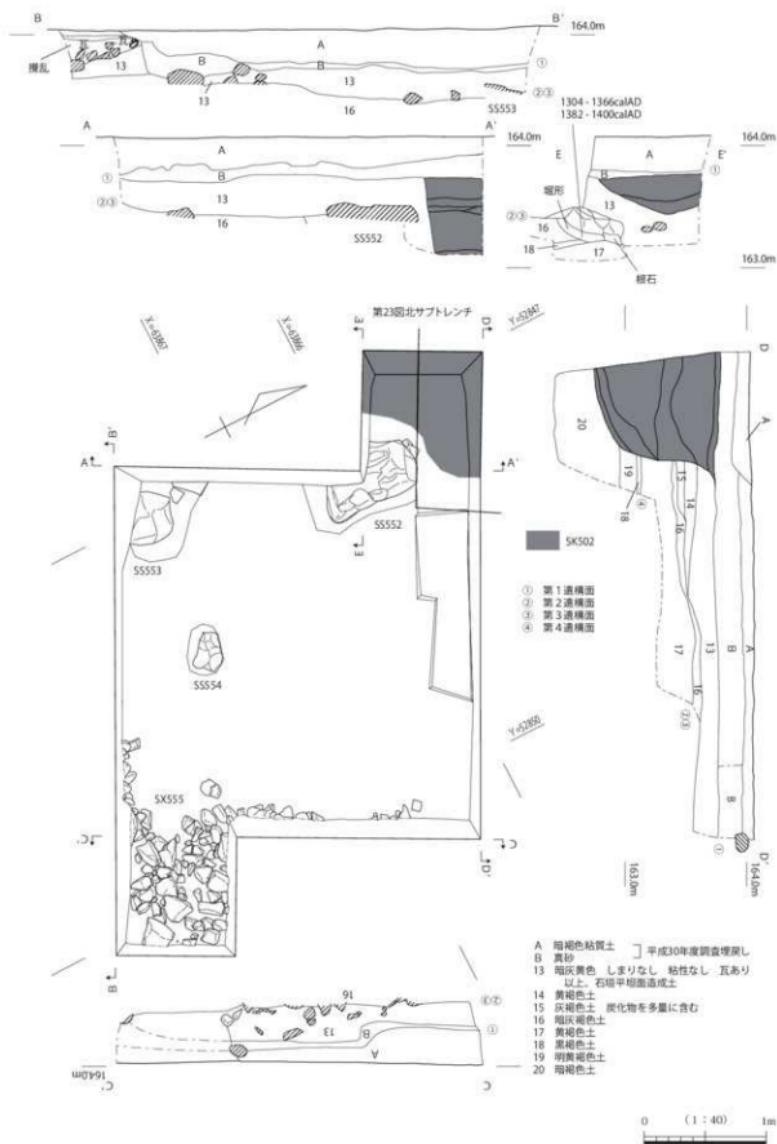
第23図 護摩堂跡・護摩堂前平面図(1)



第24図 護摩堂跡・護摩堂前平面図（2）



第25図 土層断面図



第26図 4トレンチ 第2遺構面 平面図・土層断面図

## (2) 第2遺構面(第23・26図、図版8~10)

## ア. 硙石 SS552

第1遺構面の約20cm下から、焼土が多量に混じる遺構面を確認し、礎石と考えられる上端が平滑な石を確認した。平面形は約85cm×47cmの不整長楕円形で厚みは約20cm以上ある。周囲には10cm前後の掘形が確認できる。上面には赤褐色の被熱痕が残る。掘形から採取した炭化物の年代測定の結果では、14世紀の年代が示されており、この時期に建設された建物の礎石の可能性がある。

## イ. 硙石 SS553

SS552と同一面で確認した。礎石の平面形は約40cm×40cmの隅丸方形の石であり、周囲20cm程度の掘形が確認できる。

## ウ. 硙石 SS554

SS552と同一面で確認した。礎石の平面形は約30cm×20cmの長楕円形の石であり、周囲に8cm程度の掘形が確認できる。

## エ. 集石 SX555

調査区東側では20cm~10cmの角礫が集石した箇所が確認できたため、1m×1mでトレンチを拡張した。集石は確認できるが、遺構の性格は不明である。建物の基礎部分である可能性もあるかもしれない。

## (3) 第3遺構面(第23・26図)

第2遺構面とはほぼ重なる面である。SK502を掘り下げる段階で赤褐色の焼土層や炭化層が壁面で確認できた。層から採取した炭化物の年代測定では、11世紀の年代を中心とする結果が出ており、この時期の火災と結びつけることができるかもしれない。

## 5. 出土遺物

## (1) 遺構に伴う遺物

## ア. 土坑 SK502

## (ア) 中世土師器(第27図、図版26)

1~28は、土師器であり、1~20の土師器は、在地系の糸切りによる土師器、21~28は京都系手づくねの土師器であり、いずれも16世紀後半期の中世土師器である。

## (イ) 国産陶磁器(第27図、図版26)

29は、備前焼の輪花鉢の口縁部から胴部である。弁は7弁以上である。

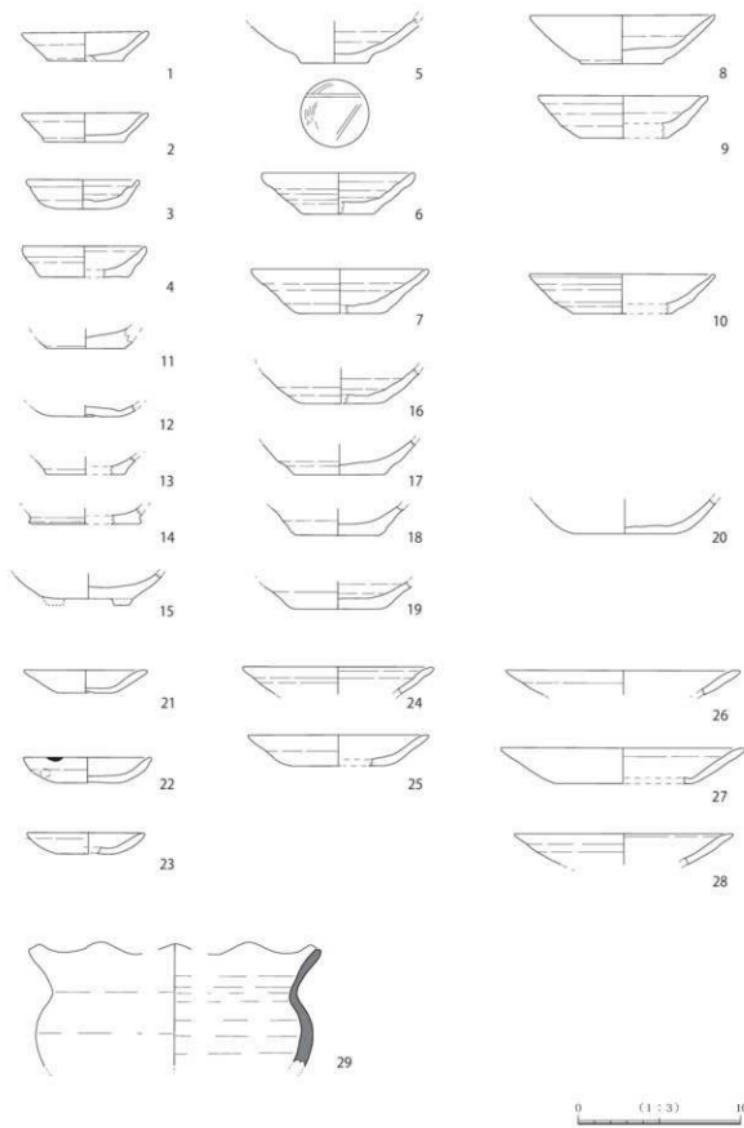
## (ウ) 瓦(第28~31図、図版27~29)

第28図1~12・第29図1・2は、土坑SK502から出土した瓦である。

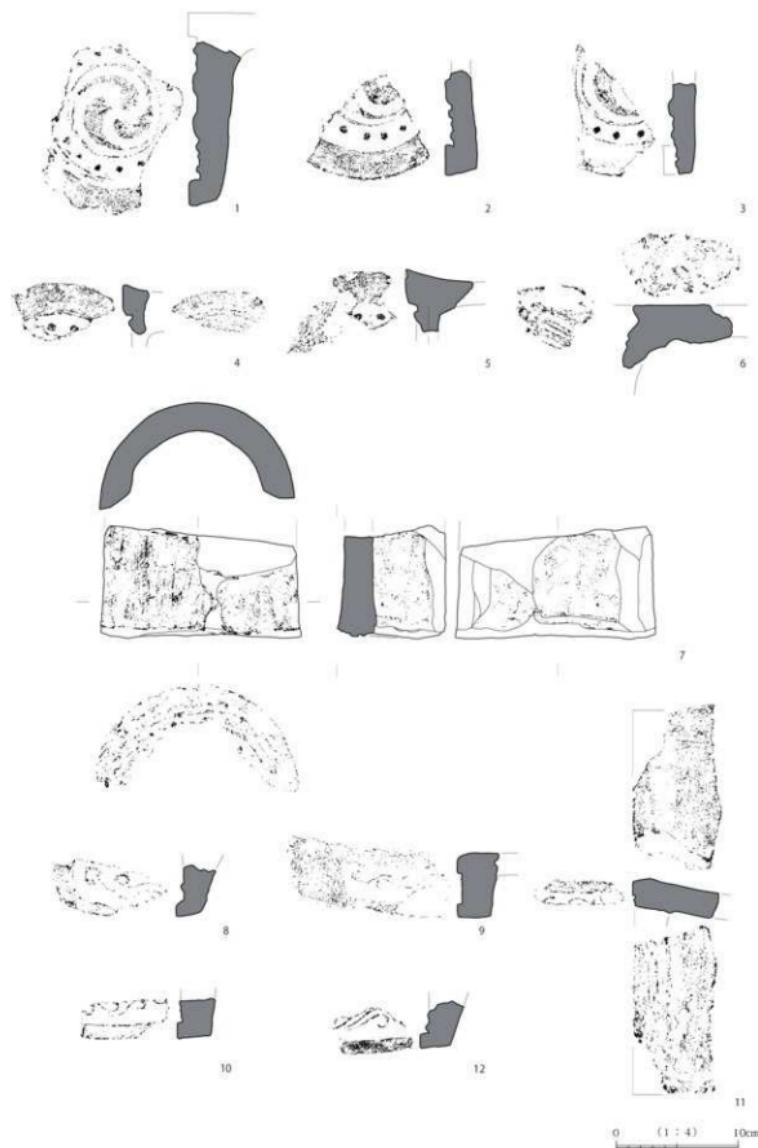
第28図の1~7は軒丸瓦である。

1~3は、瓦当部で、三巴紋軒丸瓦である。4・5は瓦当部で、内区文様は不明。6・7は瓦当部が剥離した丸瓦部である。

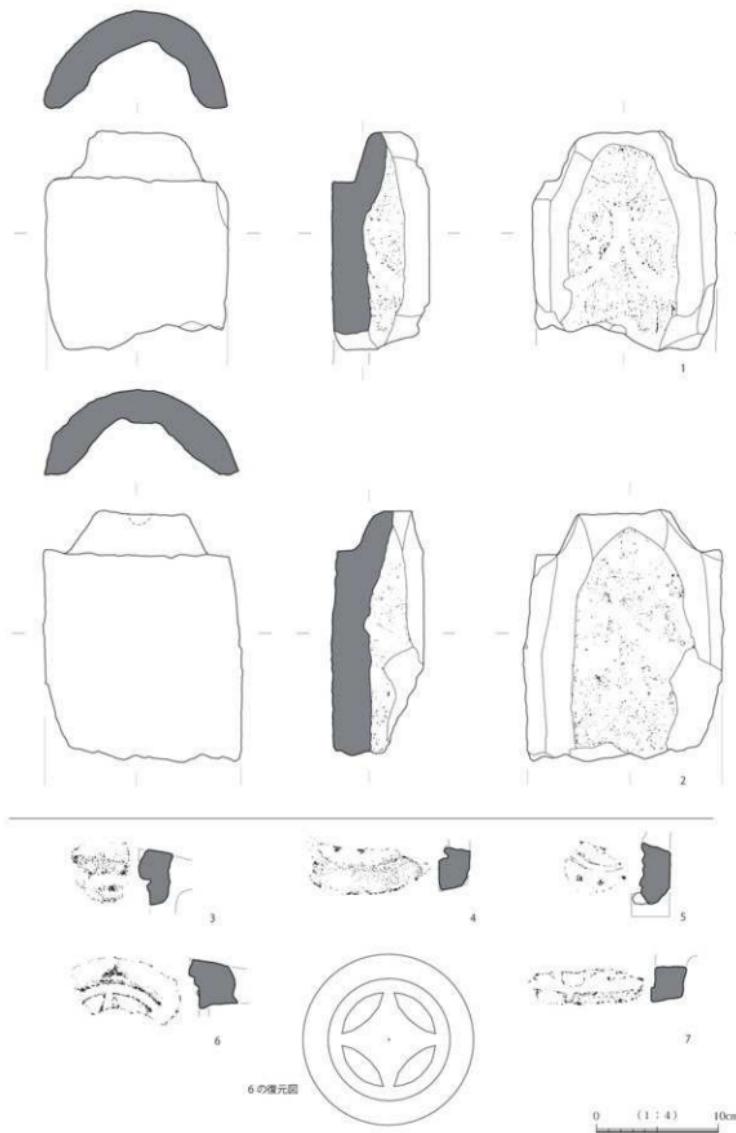
1は、巴が大きく、尾が圈線と一体となる。直径6~8mmの珠紋が11個並ぶが、総数は17個と



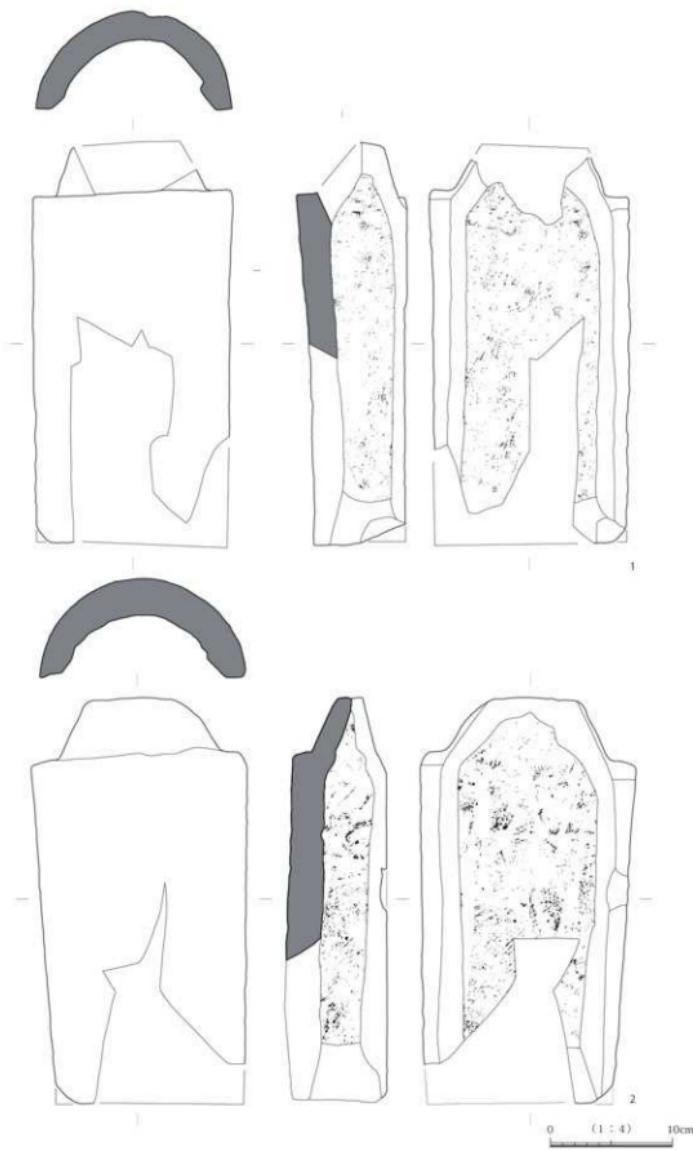
第27図 出土遺物(1)



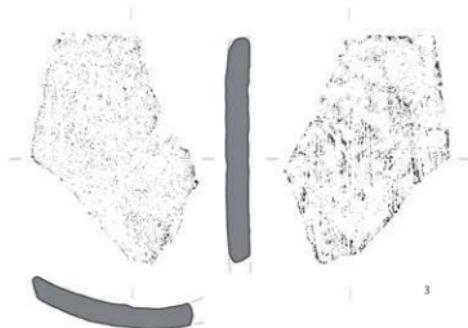
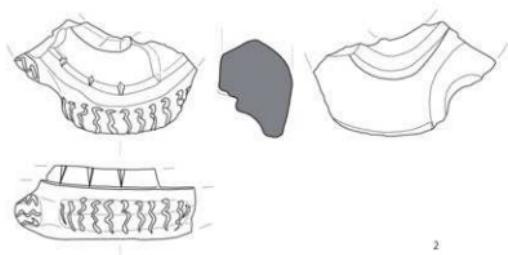
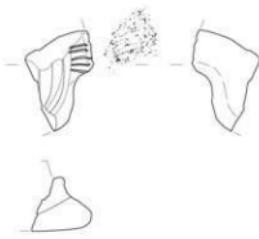
第28図 出土遺物（2）



第29図 出土遺物 (3)

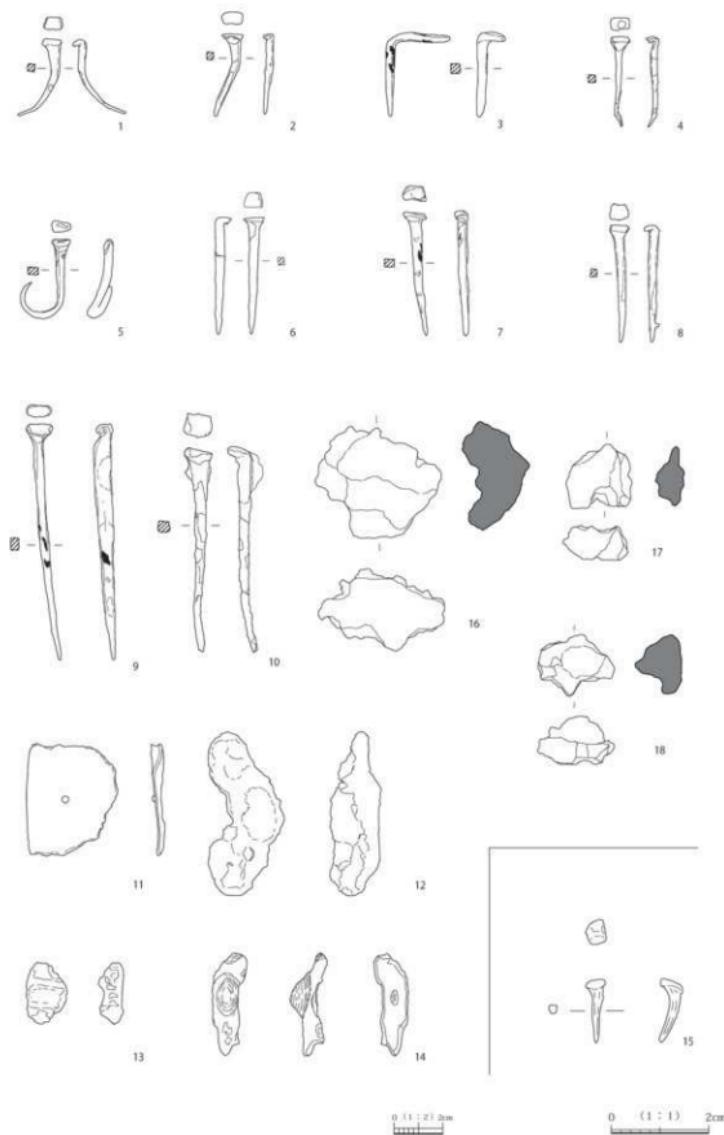


第30図 出土遺物(4)



0 (1 : 4) 10cm

第31図 出土遺物（5）



第32図 出土遺物(6)

思われる。珠紋の間隔は粗い。2は、巴が大きく、尾が圈線と一体となると思われる。直径8mmの珠紋が4個並ぶ。珠紋の間隔は粗い。3は、巴が大きく、尾が圈線と一体となると思われる。直径9mmの珠紋が3個並ぶ。珠紋の間隔は粗い。

4～7は、剥離部分から接合痕がみえる瓦である。

4・5は、直径8～9ミリの珠紋が2個並び、丸瓦部が剥離する。剥離面に、4は同心円状、5は格子状の刻目がみえる。6は、瓦当面が剥離し、剥離面に接合痕の斜め方向の深い刻目がみえる。コビキAである。7は、瓦当面が剥離し、剥離面に同心円状の刻目が残る。

8から12は、軒平瓦である。

8の中心飾は欠損のため不明である。瓦当面の剥離が著しいが、2回転分の唐草紋がみえる。脇区の幅は、1.6cmである。9は、四回転唐草紋と思われる。唐草は連続しない。脇区の幅は4.3cmである。

10は、瓦当部頸の右半を示す。中心飾は欠損のため不明である。唐草紋は下上下上と回転する四回転唐草紋の可能性がある。

11は、瓦当部上半である。中心飾は欠損のため不明である。剥離面に線状の刻目がみえる。

第29図1・2は、丸瓦の段部である。太い吊り紐痕とコビキAがみられる。段部から筒部にかけて面取りを施す。いずれも丸瓦A1の大型で、幅15.1cmと16.1cmである。

#### (エ) 金属関連遺物（第32図、図版30）

1～10は鉄製の折釘である。長さは、2～5は1寸、1・6～8は1寸五分、9・10は3寸である。11～15は、銅関連遺物で、緑青が確認できる。11は銅製品で中央に小さな突起がつく。12～14は、銅の溶解物である。15は、長さ1.3cmの銅製の折釘である。16～18は、鉄滓で、いずれも断面が楕形の鉄滓である。

#### イ. 土抗SK508

##### (ア) 瓦（第28図、図版27）

11は、瓦当部下右半である。中心飾りは不明である。唐草は、中心飾りの下側から伸びる。

##### (乙) 遺構に伴わない遺物

#### ア. 瓦（第29～31図、図版27～29）

第29図3～7、第30図、第31図1・2は、護摩堂跡第1遺構面から出土した瓦である。

第29図3～6は、軒丸瓦である。3・4は中心紋様は不明。5は巴紋である。6は七宝紋状と思われる。

3は、直径8～9mmの珠紋が1個みえる。4は、直径8mmの珠紋が2個並ぶ。5は、直径8mmの珠紋が4個並ぶ。6は、紡錘形の文様を4個配置する七宝紋状の軒丸瓦と思われる。中心文様は不明。

7は、軒平瓦の下側である。中心飾りは宝珠紋で、宝珠紋中程から唐草紋が伸びる。

第30図1・2は、ほぼ完形の丸瓦である。太い吊り紐痕とコビキAがみられる。段部から筒部にかけて面取りを施す。いずれも丸瓦A1の大型で、幅16.1cmと17.0cmである。

第31図1・2は、鬼瓦である。1は、開いた口の顔面左側の頬のあたりである。頬輪は雑な横S字状の線刻で表現される。2は、下顎である。口は空いている。下の歯は四角く、刻み目を入れることで歯並びを表現する。その外側の唇上面は、赤く着色されているが、退色せず鮮やかである。頬輪

は、左右を縦S字と逆縦S字で向き合うように線刻で描かれている。顔面右頬の髭も斜め横S字状の線刻で表現される。いずれの瓦も16世紀以前と考えられる。

## 6. 造成の状況と時期

護摩堂の建物と推定したのは、SB551の正面と考えられるSP520とSP503の間が、約3.3m間隔であり、その位置が、絵図A（江戸後期）に描かれる平坦面入口の石段の位置が類似していることや、平坦面のやや北側に描かれている点からも、今回確認した遺構は、護摩堂の遺構と考えられる。

絵図Aには根本堂の隣に「ゴマ堂」として建物が描かれているほか、文献史料によれば天正4年（1576）に「護摩堂御造営之儀」とあり、護摩堂は、戦国期に建てられたと推定される。

また、平成29年度調査で、護摩堂跡の地表面から0.6～0.9m下の2層の被熟面から採取した炭を年代測定したところ、下層は9～12世紀、上層は10～12世紀という結果が出た。鰐淵寺成立期にかかる年代結果が得られた。

## 7. 護摩堂前（A-9 平坦面）の調査

### （1）調査目的（第22図、図版11）

A-9平坦面は、護摩堂跡（A-5平坦面）の東側に隣接しており関連する遺構が残存するか確認する。また、石列状の石が露出しているところもありどのような遺構があるのか確認する。

A-5平坦面下で2層の赤褐色の焼土層及び炭化層を確認したが、A-9平坦面でも同様の焼土層及び炭化層が存在するのか確認する。

### （2）調査規模（第22・24図、図版11～13）

5～7のトレチを設定した。トレチの規模は、5トレチが5.8m×2.3mの13.34m<sup>2</sup>、6トレチが2.0m×1.6mの3.2m<sup>2</sup>、7トレチが2.0m×1.5mの3.0m<sup>2</sup>である。

### （3）遺構（第24・33図、図版12）

#### ア. 石組溝 SD901

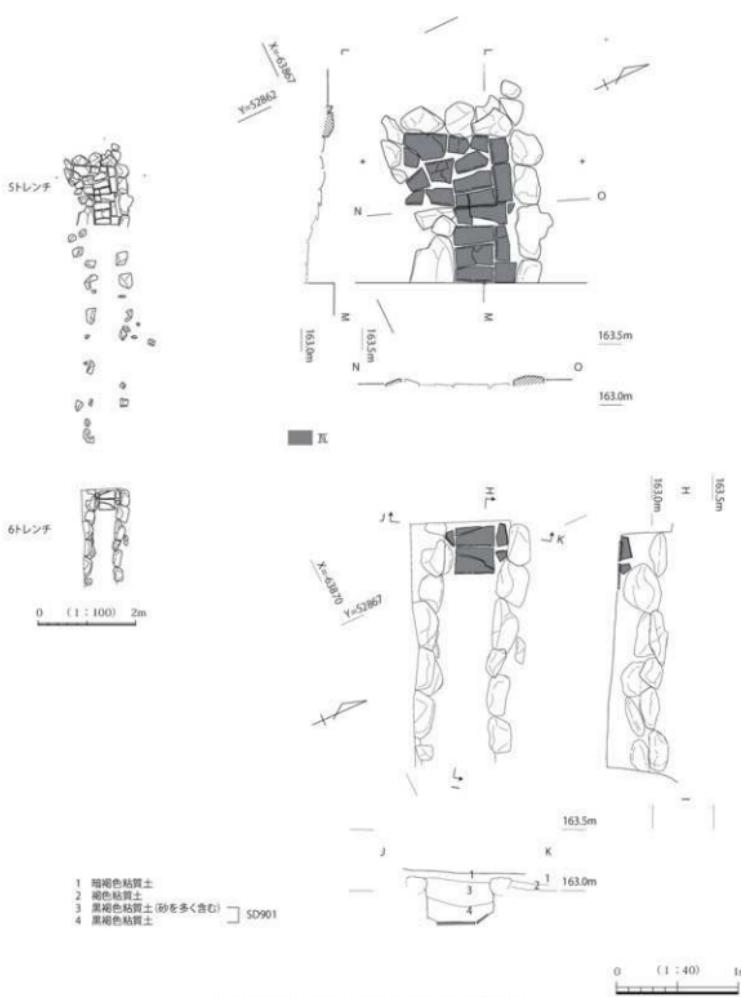
5トレチと6トレチで確認した、瓦敷きの石組み溝である。両トレチ間の地表面にも、溝幅で石が並ぶことから1本の溝と確認できる。絵図B（明治期）に見えるような、手水鉢の排水溝と推定する。

5トレチでは、溝の縁をL字状に石で固み、底に瓦を敷く。側石は1段積みで、底には平瓦が敷かれており、東に向かって瓦1枚分の厚さで階段状に深くなる。東西方向の長さ1.1m、屈曲部の長さ0.4m、深さは西側で4cm、東側で21cmである。幅は、屈曲部で0.6m、東西方向で0.5mである。

6トレチでは、東西方向の長さ2m、幅0.4m、深さは西側で37cm、東側で50cmである。石は2～3段積みである。底の瓦は、西側0.5mまで敷かれている。溝の埋土4層上面から瓦が出土した。

両トレチの底に敷かれた瓦は、縦30cm前後、横22cm前後の中世の平瓦と思われる。また、5トレチの埋土出土の瓦も、中世の丸瓦・平瓦の小片である。

なお、溝の排水口は5トレチ東側の平坦面斜面に開口すると思われることから、溝底の傾斜角度



第33図 護摩堂前 SD901 平面図・断面図

から、全長は約 13 m と推定する（第 22 図）。

#### （4）出土遺物（第 31 図、図版 30）

##### ア、造構に伴わない遺物

###### （ア）瓦（第 31 図、図版 30）

第 31 図 3 は、護摩堂前から出土した古代の平瓦である。凸面に縄目が残り、凹面は風化が著しい。

#### （5）調査成果

護摩堂跡の 2 層の被熱層の広がり、及び地表面に見える石列状のものを確認する目的で、3箇所のトレンチを設定し掘削した。

石列は逆 L 字状の石組み溝（底面瓦敷き）であった。石組み溝の延長を確認するため、トレンチを増やして確認した。手水鉢の排水溝ではないかと考えられるが、時期は不明である。

5 トレンチの南サブトレンチでは地表面から 0.2 ~ 0.4m 及び 0.95m 下で被熱層を 2 層確認した。下層の被熱層で採取した炭を年代測定したところ、11 ~ 12 世紀という結果が出た。護摩堂跡及び護摩堂前被熱層の年代測定結果の年代が一致することから、護摩堂が建てられる以前は、護摩堂跡（A-5 平坦面）と護摩堂前（A-9 平坦面）は、一体の平坦面であり、何らかの施設があった可能性がある。

（石原 晴）

## 8. 護摩堂跡発掘調査に係るAMS年代測定

### （1）はじめに

鰐淵寺は島根県東部、出雲市別所町に位置する天台宗の寺院で、智春上人により594年（推古天皇2年）に開山されたと伝えられている。

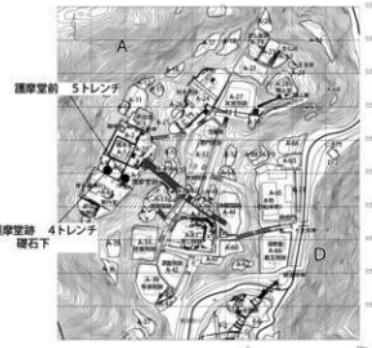
本報は文化財調査コンサルタント株式会社が、鰐淵寺伽藍の開発時期を確認する目的で、出雲市（文化財課）からの委託を受けAMS年代測定を実施・報告した複数の分析報告書から、護摩堂跡発掘調査に関する年代測定結果について抜き出し、再編したものである。

### （2）分析試料について

出雲市文化財課により採取・保管中の試料から、分析試料の御提供を受けた。

第34図に遺構の配置、第35図に護摩堂跡付近のトレーニングの配置及び試料1～8採取地点、第36～38図に各地点の断面図及び試料採取位置を示したほか、第2表に試料の一覧を示す。

また、以下に示す平面図及び断面図は、出雲市文化財課より御提供を受けた原図をもとに、作成した。



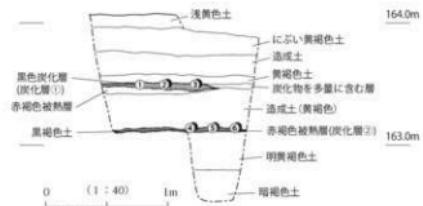
第34図 遺構の配置

### （3）AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 $^{14}\text{C}$ 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

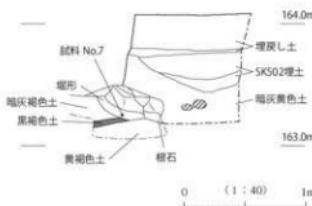


第35図 トレーニング平面図（試料採取地点）



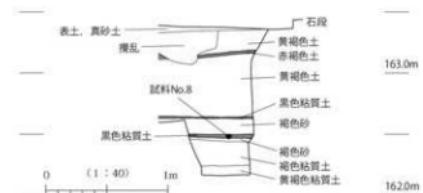
第36図 護摩堂跡1トレンチ断面図

(試料No.1～6採取位置：①～⑥)



第37図 護摩堂跡4トレンチ 確石下断面図

(試料No.7採取位置)



第38図 護摩堂跡5トレンチ断面図

(試料No.8採取位置)

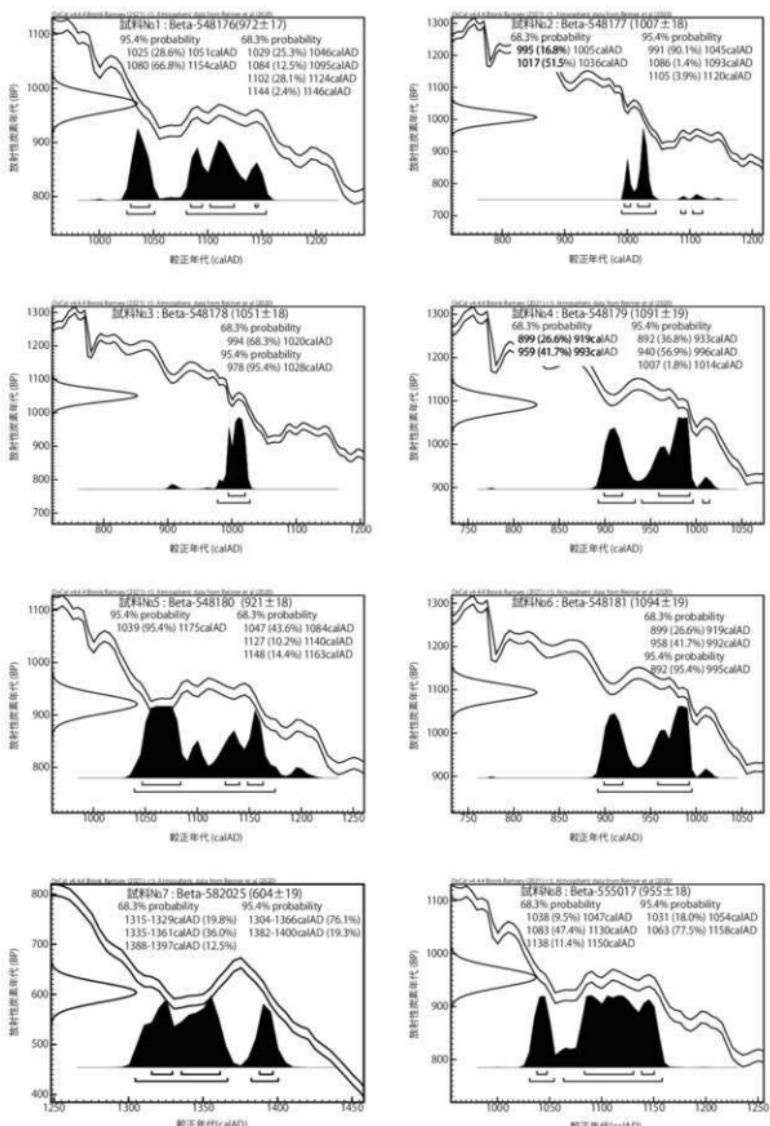
#### (4) AMS 年代測定結果

測定結果を第2表、第39図に示す。

第2表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$  値と4種類の測定年代を示している。第39図に

第2表 試料一覧表（年代測定結果）

試 料 番 号	測定区 域	出土地名 (遺構区分)	状況	測定位 置	初期年 代	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) ( $\text{pp}_{\text{VP}}\pm 2.1\sigma$ )	$\text{C}^{14}$ 年代 (yrBP ± 2.1σ)	CAMS年代(測定年代と測定誤差)		測定番号	
								1標準誤差 (1σ)	2標準誤差 (2σ)		
1	護 摩 堂 跡	炭化層①	表 土	B0845	23.04	-872 ± 17	930 ± 11	1029-1046 cal AD (0.3%)	1030-1046 cal AD (0.3%)	1025-1081 cal AD (0.6%)	Beta-348176
			堆 積	B0143	23.06	-1007 ± 18	1005 ± 20	1021-1124 cal AD (2.1%)	1148-1146 cal AD (2.4%)	1080-1154 cal AD (0.6%)	Beta-348177
		表 土	B01977	25.83	1051 ± 18	1050 ± 20	994-1026 cal AD (6.8%)	991-1045 cal AD (0.0%)	1001-1036 cal AD (0.3%)	1105-1120 cal AD (1.9%)	Beta-348178
4	護 摩 堂 跡 4トレンチ	炭化層②	表 土	B1139	24.13	-1091 ± 19	1090 ± 20	899-919 cal AD (26.8%)	955-993 cal AD (47.7%)	892-933 cal AD (34.8%)	Beta-348179
			表 土	B4466	25.74	-921 ± 18	920 ± 20	1087-1104 cal AD (0.6%)	1127-1140 cal AD (0.7%)	1039-1175 cal AD (9.4%)	Beta-348180
		護 摩 堂 跡 5トレンチ	表 土	B9799	24.63	-1094 ± 19	1095 ± 20	899-919 cal AD (26.8%)	956-992 cal AD (47.7%)	892-995 cal AD (95.4%)	Beta-348181
			表 土	B2554	27.81	-604 ± 19	605 ± 20	1325-1329 cal AD (19.8%)	1388-1397 cal AD (12.5%)	1304-1366 cal AD (16.3%)	Beta-348203
8	護 摩 堂 跡 5トレンチ	南壁12壁	表 土	B1287	21.13	-955 ± 18	955 ± 20	1038-1047 cal AD (0.3%)	1083-1130 cal AD (47.4%)	1138-1150 cal AD (11.4%)	Beta-348182



第39図 歴年較正結果(No.1~8)

は OxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と  $\sigma$ 、 $2\sigma$  の構成範囲を示している。

### (5) 年代測定値について

第40図に、暦年較正結果の分布を示した。

#### ア. 護摩堂跡 1トレンチ 炭化層①

炭片を利用した年代測定値では、樹幹が切られた年代より古い値が一般的である。これは、樹幹の側と樹皮直下での形成年に差が生じるためである。また、建造物では転用材が用いられることがあり、この際には建物が建てられた年代より古い年代値を示す。一方、何らかの擾乱により、新しい時期の炭片が下位に混入することも起こりうる。

今回得られた年代値は、11世紀初頭前後と11世紀から12世紀中頃の年代値である。一般論で言えば、11世紀から12世紀中頃の火災に由来したものと考えられる。

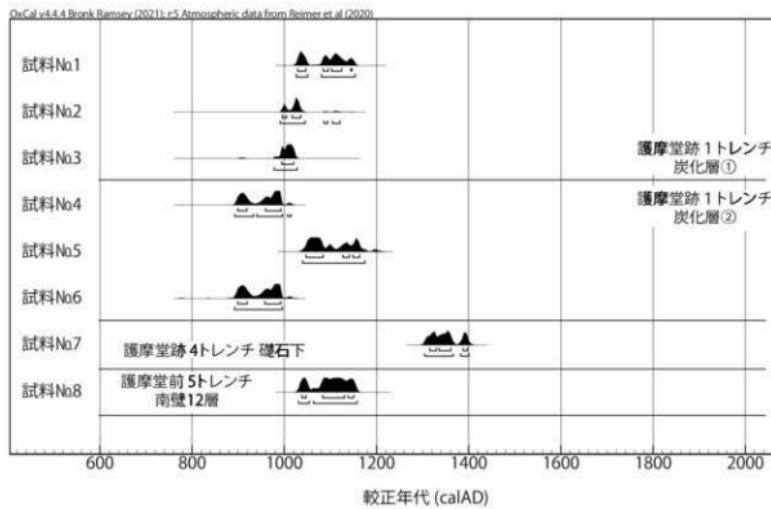
仮に試料No.1が擾乱により混入したものとすれば、やや古い11世紀初頭前後に火災があったものと考えられる。

#### イ. 護摩堂跡 1トレンチ 炭化層②

一般論で言えば、炭化層①とほぼ同時期の11世紀中頃から12世紀中頃の火災に由来したものと考えられる。仮に試料No.5を混入とすれば、炭化層①より古い9世紀末から10世紀末に火災があったものと考えられる。

#### ウ. 護摩堂跡 4トレンチ 護摩堂礎石下

同トレンチ内及び護摩堂前トレンチでも年代値が得られており、護摩堂跡礎石下から得られた試料



第40図 暦年較正結果の分布

№7が14世紀と、他の試料（10～12世紀）に比べ著しく新しい年代値であった。護摩堂跡礎石は炭化層（炭層①：試料№1～3）を掘り込んで据えられており、礎石下から得られた試料№7の年代値がこれらより新しいことには矛盾がない。したがって、護摩堂跡礎石は、14世紀の遺構と考えられる。

## 工. 護摩堂前5トレンチ12層

12層は炭層であり、更に上位にも炭層が検出されていた。12層で得られた年代値と、護摩堂跡トレンチで認められた2層の炭層の年代値が重なることから、上位の炭化層が護摩堂跡1トレンチ炭化層①に、下位の12層が護摩堂跡1トレンチ炭化層②に、対応する可能性が指摘できる。

（奥中亮太・渡邊正巳）

## 引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62.



## 第4節 開山堂（A-28 平坦面）

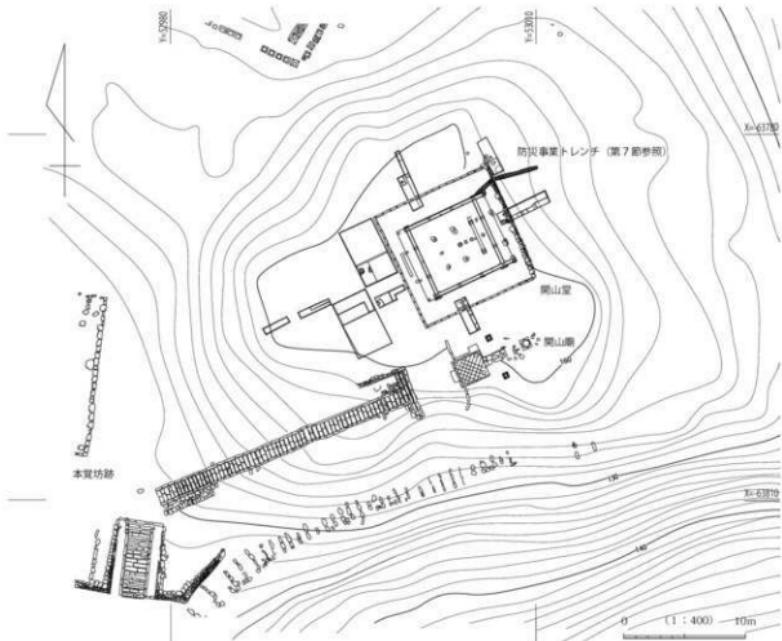
### 1. 開山堂の位置と沿革（第41図、図版14）

開山堂は、根本堂地区の東端の標高 160.2 m の独立尾根上に位置する。平坦面の四周は崖になってしまっており、ここへは本覚坊側からの石段を上るのみである。同じ平坦面には、開山廟（拝堂と開山塔）が建つ。

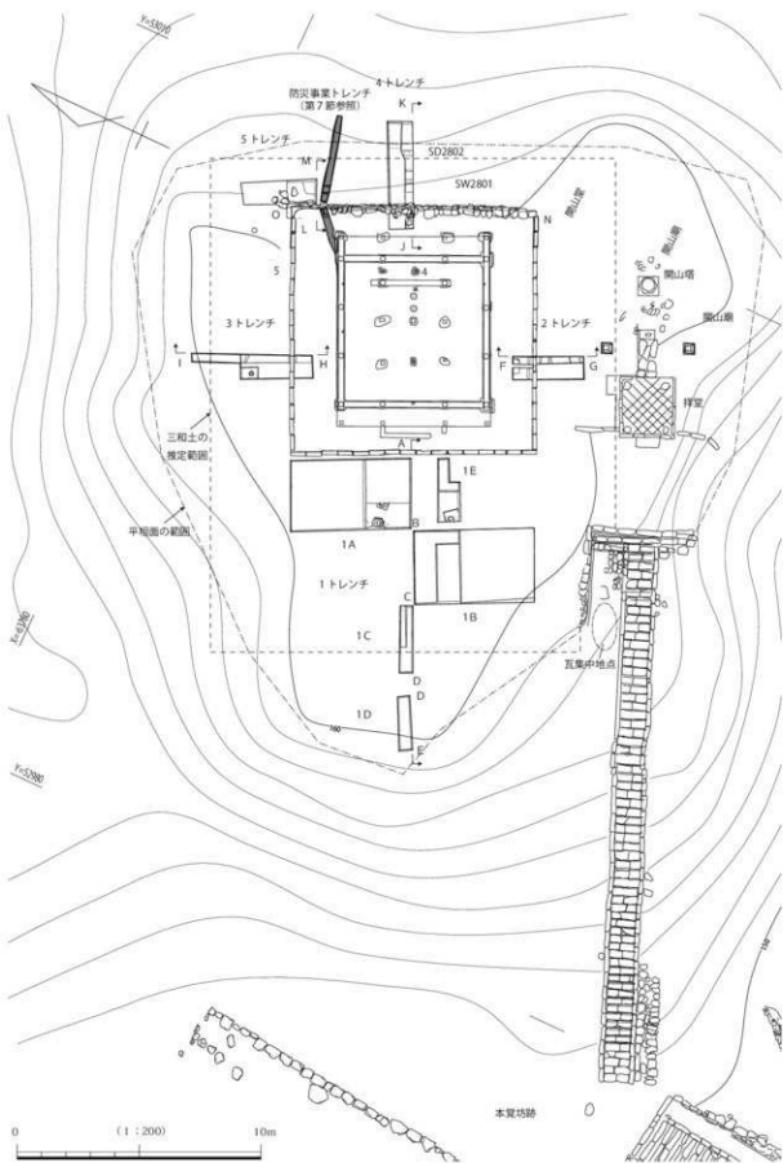
建物は、基壇の上に建ち、3間四方の宝形造で向拝は無い。屋根には露盤宝珠をのせる。基壇の縁石は、正面及び左右は切石作りであるが、背面には無く、石垣が築かれている。

開山堂は、絵図 A（江戸後期）と絵図 B（明治期）では描かれた位置が異なる。絵図 A では山裾にあり、絵図 B では現在位置と同じ場所に描かれていることから、この間に移動したことがわかる。現在の建物は、疊頭板の墨書きにより文政3年（1820）か、それ以前の建てられたことがわかる。この年代は、絵図 A の年代に近い。

その後、幕末に絵図 B の位置、すなわち現在地に移動するとともに、建物の大改修を受けたと考えられている（山岸 2012・花谷 2015）。



第41図 開山堂位置図



第42図 開山堂平面図

建物修理は、昭和25年（1950）の屋根葺直（露盤の墨書きより）を経て、昭和39年（1964）の修理工事（東面化粧裏板墨書きより）において屋根葺替がなされ、茅葺から鉄板葺に替わった。その後、令和1・2年の半解体保存修理工事により、屋根は鉄板葺から銅板葺に替えられた（宗教法人鰐淵寺 2021）。

## 2. 調査の目的と方法（第42図）

先の分布調査において、開山堂周辺から古代の須恵器が採取されていることから、古代の遺構が存在する可能性が考えられた。また、江戸後期の絵図（絵図A）には三重塔が描かれているが、場所が開山堂周辺であることから、三重塔の遺構を確認するための調査である。

トレーナーは、建物の周囲に5箇所設定した。その内、1トレーナーは建物正面広場に設定した。当初、面的に掘る予定であったが、三和土が全面に広がることがわかったため、トレーナー調査に変更した。

1トレーナーは、順次拡張したことから、5つの小トレーナー（1A～1E）からなる。2～4トレーナーは、基壇の縁石を挟んで内側と外側にまたがるように設定した。5トレーナーは、基壇北端の角に設定した。

## 3. 層序（第43～45図）

### （1）基壇の外側

建物周辺の基本層序は、1層表土（2層三和土の風化土）・2層白色の三和土（整地土）、3層造成土、4層地山である。1層は厚さ約2cm、2層は厚さ約15cmで、白色の三和土である。3層は厚さ約30cmで、赤褐色の粘質土である。コピキAの本瓦片を含んでいる。4層は地山で、固い赤褐色粘質土である。

### （2）基壇の内側

1層表土（2層三和土の風化土）、2層白色の三和土（整地土）、3層造成土、4層地山である。1層は厚さ約1cm、2層は厚さ約34cmで、白色の三和土である。3層は厚さ約10～24cmで、赤褐色の粘質土である。

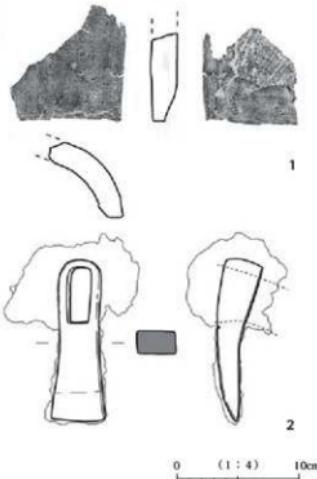
令和2年度の保存修理事業において縁石の据え直し作業中に、丸瓦と鉄製の手鋸状の工具も出土している（第43図）<sup>(1)</sup>。4層は地山で、固い赤褐色粘質土である。

## 4. 遺構（第44～47図、図版14～16）

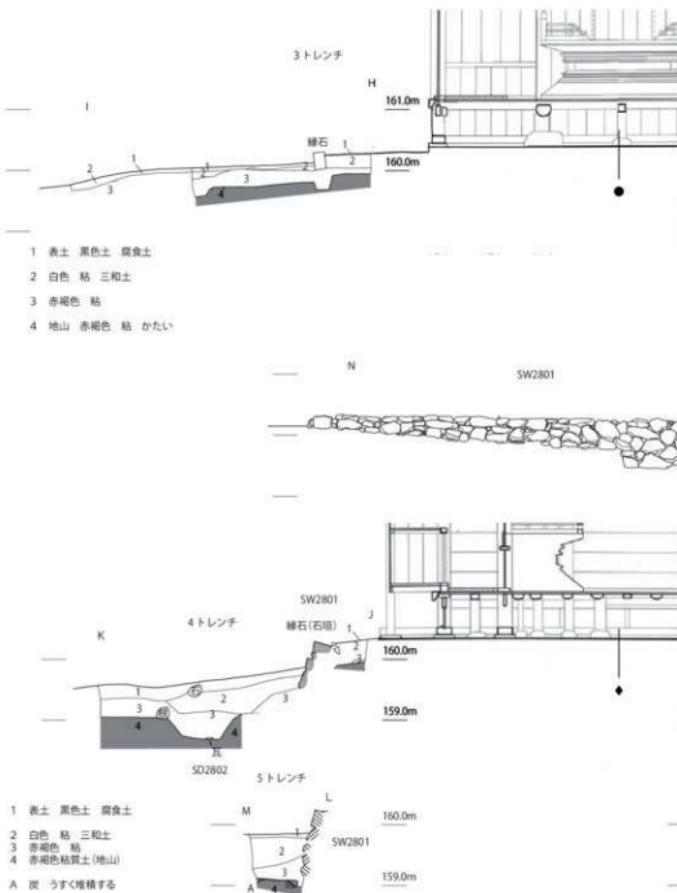
### （1）検出した遺構

**A. 基壇 SW2801** 基壇は、ほぼ方形で、規模は南北10m、東西9.7mである。基壇の四面を開む縁石は、正面と両側面は切石であるが、背面は自然石か野積みされた石垣である。

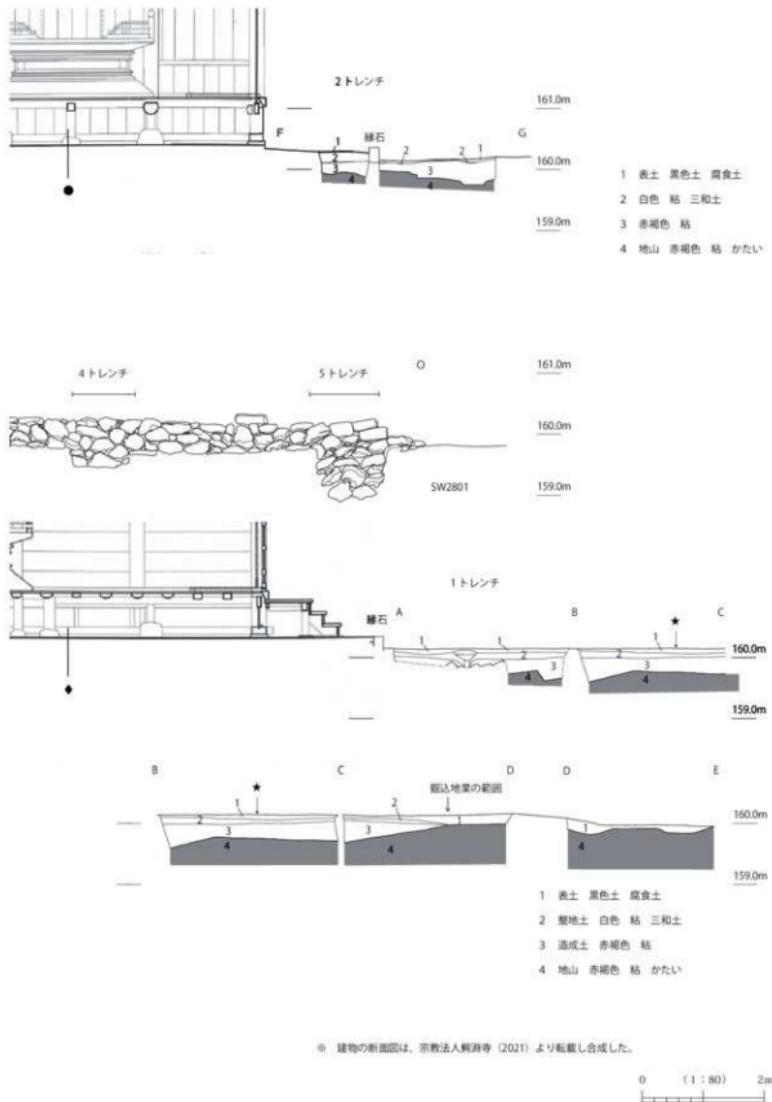
地表面に露出している石垣は長さ10m、高さは中央



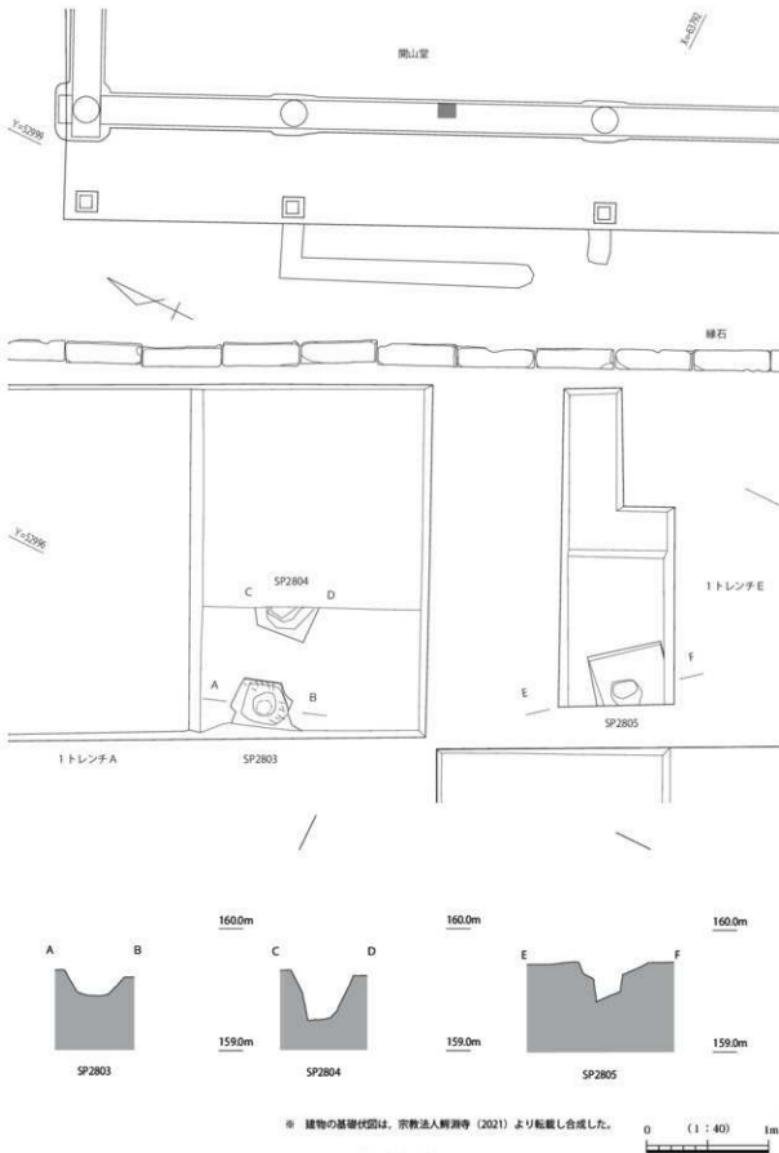
第43図 出土遺物（1）



第44図 トレンチ 土層断面図・石垣立面図(1)



第45図 トレンチ 土層断面図・石垣立面図（2）



第46図 1トレンチ ピット平面図・断面図

で44cm、東西両端は約20cmである。

背面の4トレンチにおいて、石垣の根石が約20cm埋もれていることを確認した。このことから、石垣の高さは75cm（基底部の標高159.44m）となる。また、北端の5トレンチでは、石垣の高さが1.3m（基底部の標高159.0m）であることから、石垣中央と北端では44cmの高さの違いが認められた。

一方、5トレンチの石垣基底部の標高と、4トレンチで確認した東西溝SD2802の堀込面の標高がほぼ一致することから、基壇の角を補強するために、石垣を高く積み上げた可能性が考えられる。

基壇中からは、縁石の据え直し作業中に、南側から丸瓦A1小型（約14cm）が出土し、北西溝からは手鍛状の工具が出土した（第43図）。

#### イ. 東西溝 SD2802 4トレンチにおいて東西溝SD2802を確認した。

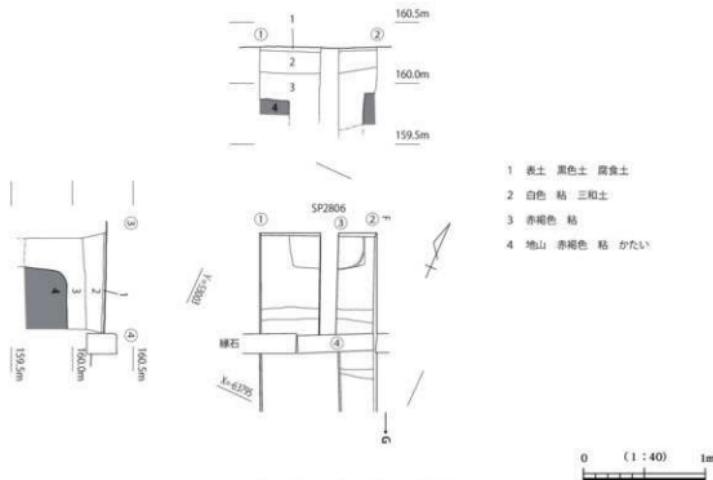
長さ不明、幅1.2m、深さ0.4mの素掘りの溝である。溝の底は瓦溜りである。コビキAの瓦が出土する。溝底からは、平瓦が140点（21.7464kg）、丸瓦が131点（2.7232kg）出土した。

また、炭化物も出土していることから年代測定を行い、16世紀中頃から17世紀中頃の年代を得た。

ウ. 柱穴 SP2803～2806 柱穴と思われる掘り込みを、基壇外の1A・1E・3トレンチと、基壇内の2トレンチで確認した。いずれも地山の4層上面であり、埋土は3層造成土で、遺物は出土していない。

エ. SP2803 1Aトレンチで確認した。平面形は0.3m×0.4m以上の方形で、底面も約20cmの隅丸状の方形である。底面は平らである。深さ22cm。側面には加工痕状のものが残る。

オ. SP2804 1Aトレンチで確認した。平面形は0.4m×0.3m以上の多角形な方形で、深さは40



第47図 2トレンチ ピット平面図・断面図

cm以上で未確認である。

**カ. SP2805** 1 Eトレーナーで確認した。平面形は6.1m×4.2m以上の不整形な方形で、深さ0.1mである。底面には約25cmの多角形の柱穴がある。底面は傾く。底面は深さ24cm。

**キ. SP2806** 2トレーナーの基壇内で確認した。平面形は一辺0.6mの方形で、深さは30cm以上で未確認である。

## 5. 出土遺物

### (1) 遺構に伴う遺物

**ア. 東西溝 SD2802**

#### (ア) 瓦 (第49図、図版31・32)

1は、軒丸瓦。巴紋の尾がみえる。

2は、軒平瓦。中心飾りは宝珠紋と思われる。下向きの唐草が宝珠の下側から延びる。

3は、軒平瓦。中心飾りは宝珠紋である。唐草紋は、3回転唐草紋で上下上の順で回転する。平瓦部と顎部の粘土継ぎ目に、刻み目がみえる。

4と5は丸瓦。凹面に糸切り痕(コビキA)と波状の太い吊り紐痕が残ることから丸瓦A1に分類される。4は、幅を復元すると約18cmとなり、丸瓦A1の大型に分類される。5は、幅を復元すると約12cmとなり、丸瓦A1の小型に分類される。

6は、平瓦の広端部である。

#### (2) 遺構に伴わない遺物 (第48~50図、図版31)

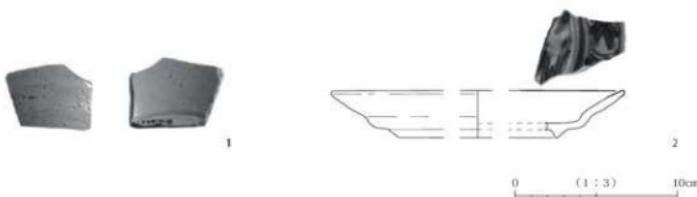
**ア. 貿易陶磁器**

#### (ア) 白磁 (第48図、図版31)

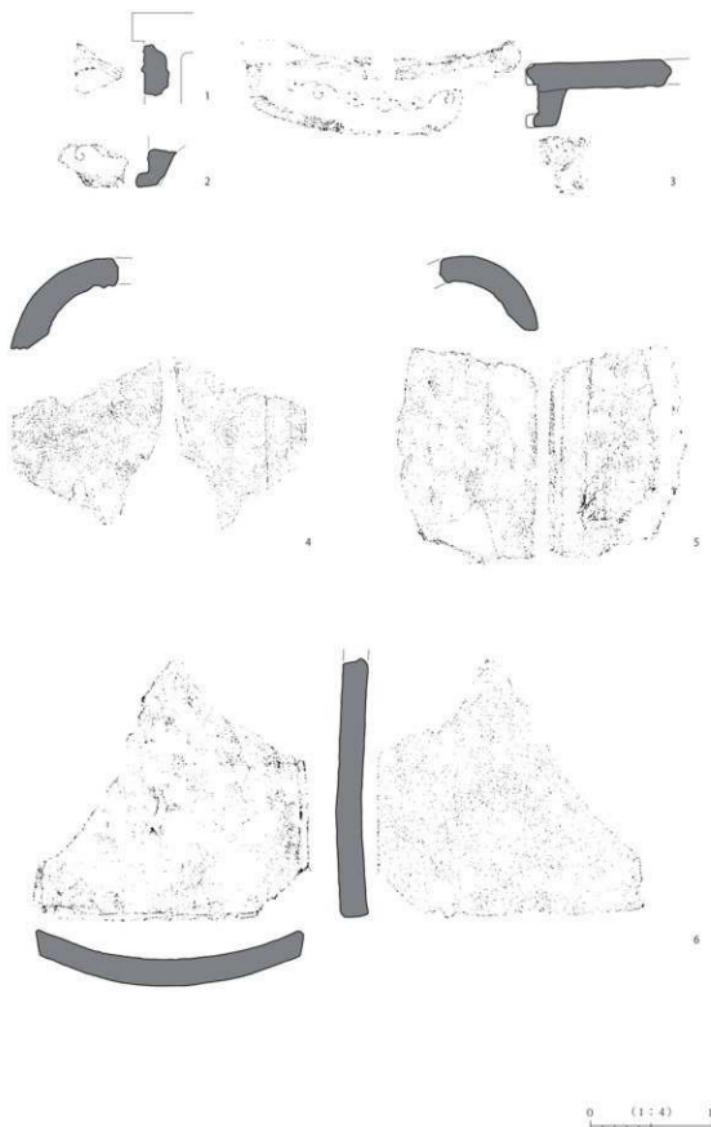
1は、皿か碗の底部から体部にかけての破片である。12世紀代か。

#### (イ) 青花 (第48図、図版31)

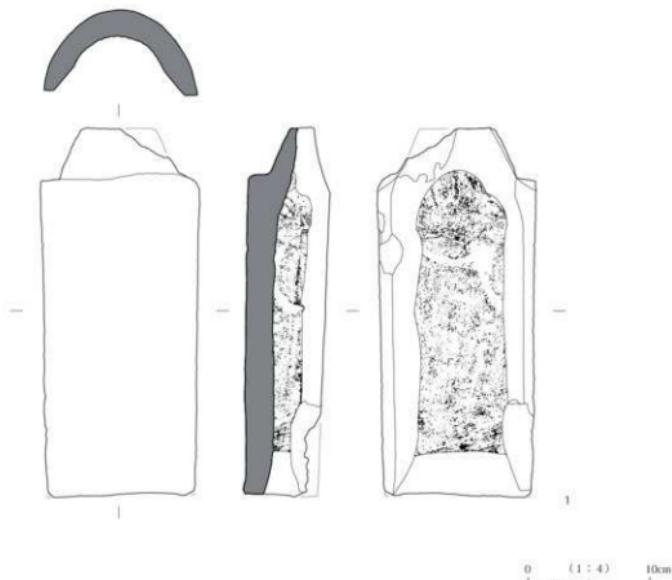
2は、漳州窯系の青花皿である。体部内面に芙蓉手が見える。青花E群。16世紀後半~17世紀初頭。本覚坊跡の第63図11と同一個体の可能性がある。



第48図 出土遺物(2)



第49図 出土遺物 (3)



第50図 出土遺物(4)

#### ア. 瓦(第50図、図版31)

1は、丸瓦である。裏面に糸切り痕(コビキA)と太い吊り紐痕が残ることから丸瓦A 1に分類する。幅が12.7cmであるから丸瓦A 1の小型である。玉縁部側面の面取りは、段部の側面全体に及ぶ。

## 6. 小結

今回の調査では、開山堂の四方にトレンチを設定し調査を行った。

平坦面造成方法については、地山の上に、赤色粘質土で盛土し、その上に白い三和土で整地するものである。特に三和土は平坦面全域に及ぶと推定でき、丁寧な造りであることが判明した。

背面の4トレンチでは、溝SD2802の底から瓦がまとまって出土した。軒平瓦は2種類あり、いずれも宝珠紋であるが、唐草紋の第1単位が下向きと上向きで始まるものとの2種類がある。また、丸瓦の裏面には糸切り痕(コビキA)がみられることから、16世紀以前の瓦であり、開山堂が移動する前の建物に使われていた瓦の可能性も考えられる。なお、溝底の炭化物を年代測定したところ、16世紀中頃～17世紀中頃の年代を得た。瓦の年代観とおおむね一致する結果となった。

(原 俊二)

**註**

(1) 第43図は、『保存修理報告書』(第43図)から転載した。

**参考文献**

花谷 浩 2015 「第7章総括 第1節鰐淵寺伽藍の構造とその変遷」『前報告書』

山岸常人 2012 「鰐淵寺境内の歴史的建造物」『科研報告書』

## 7. 開山堂発掘調査に係るAMS年代測定

### (1) はじめに

鷲淵寺は島根県東部、出雲市別所町に位置する天台宗の寺院で、智春上人により594年（推古天皇2年）に開山されたと伝えられている。

本報は文化財調査コンサルタント株式会社が、鷲淵寺伽藍の開発時期を確認する目的で、出雲市（文化財課）からの委託を受けAMS年代測定を実施・報告した複数の分析報告書から、開山堂発掘調査に関する年代測定結果について抜き出し、再編したものである。

### (2) 分析試料について

出雲市文化財課により採取・保管中の試料から、分析試料の御提供を受けた。

第51図に遺構の配置、第52図に開山堂付近のトレーナーの配置及び試料採取地点、第53図に断面図及び試料採取位置を示したほか、第3表に試料の一覧を示す。

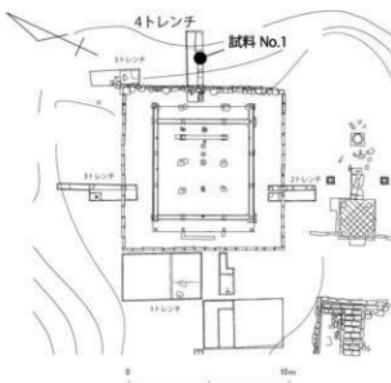
また、以下に示す平面図及び断面図は、出雲市文化財課より御提供を受けた原図をもとに、作成した。

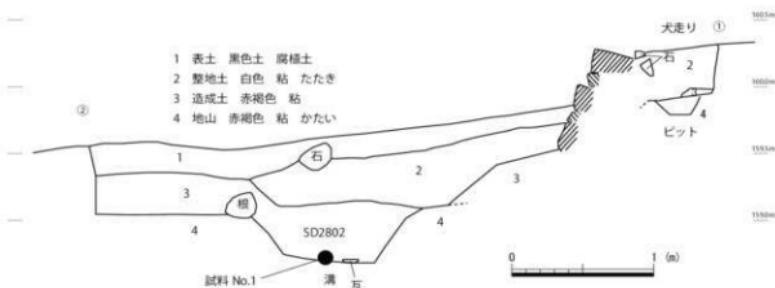


第51図 遺構の配置

### (3) AMS年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 $^{14}\text{C}$ 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。





第53図 開山堂4トレーン断面図（試料No.1採取位置）

第3表 年代測定試料一覧（測定結果）

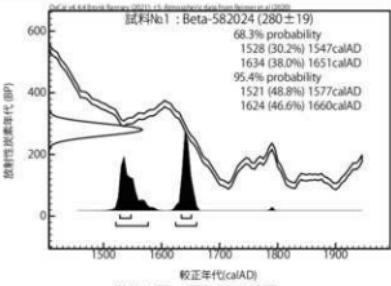
試料No.	調査区	出土地点（遺構ほか）	状況	重量(g)	前処理	
					酸素洗浄	有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗剤（硫酸1.2N, 水酸化ナトリウム1.0N, 食酢1.2N）
1	開山堂	4T3層：瓦溝	炭片	0.2483		
$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	歴年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP ± 1σ)	$^{14}\text{C}$ 年代を歴年に較正した年代範囲 1σ 歴年代範囲		測定番号	
-26.01	280 ± 19	280 ± 20	1528-1547 cal AD (30.2%) 1634-1651 cal AD (38.0%)	1521-1577 cal AD (48.8%) 1624-1660 cal AD (46.6%)	Beta-582024	

#### (4) AMS 年代測定結果

測定結果を第3表、第54図に示す。

第3表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第54図には INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた歴年較正結果を示した。また、確率分布と $\sigma$ 、 $2\sigma$ の構成範囲を示している。

16世紀中頃から17世紀中頃の年代値を得たことから、開山堂は遅くとも17世紀中頃に建立されたと考えられる。



第54図 年代測定結果

(歴年較正已)

#### 引用文献

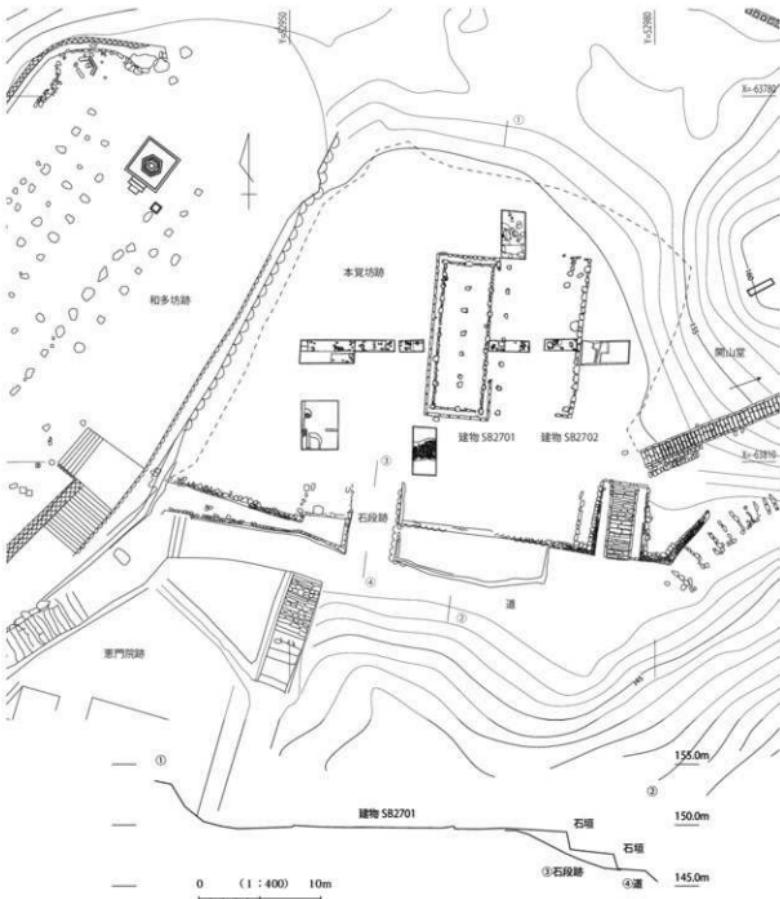
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62.



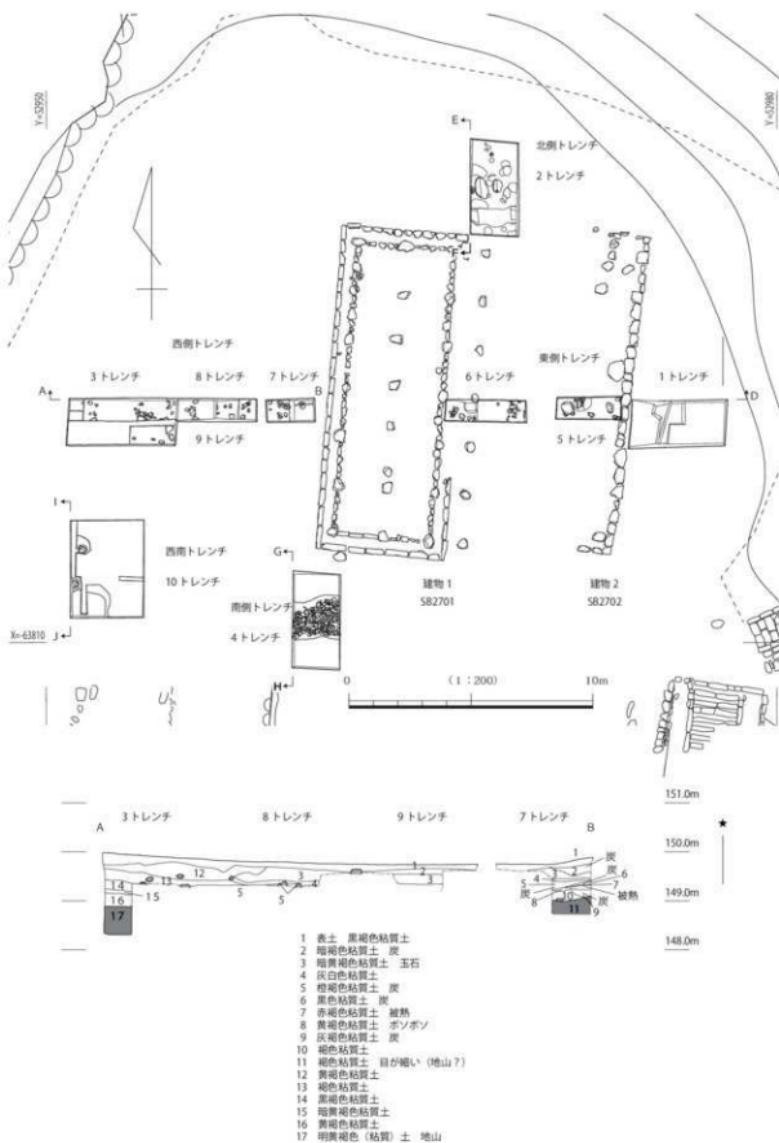
## 第5節 本覚坊跡 (A-27 平坦面)

### 1. 本覚坊の位置と沿革 (第55図、図版17・18)

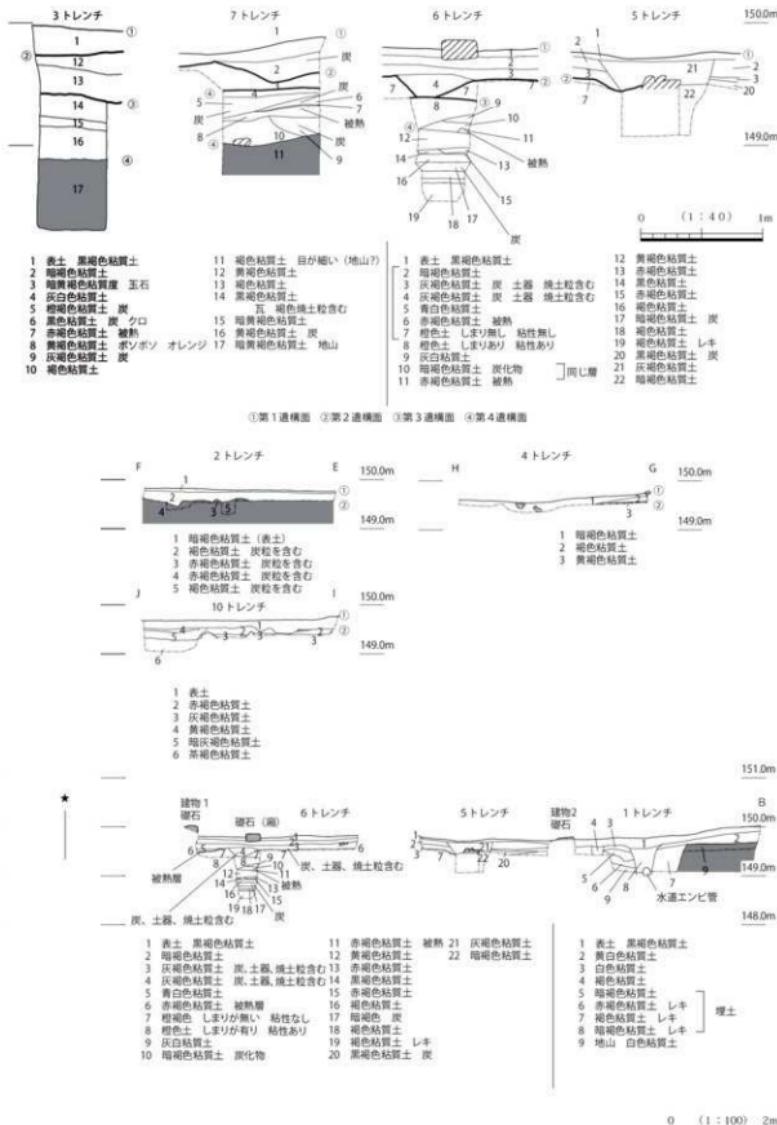
本覚坊は根本堂の東北側にあり、西を和多坊跡、東を開山堂の高台にはさまれた平坦面にある。面積は 771m<sup>2</sup>である。西側は和多坊の石垣が最も高いところで 3.6 m、長さ 37 m にわたって続く。東側の開山堂側は高さ約 10 m の崖で地山が露出し、北側は地山が露出した約 3 m の崖状になる。南側



第55図 本覚坊跡位置図



第56図 トレンチ土層断面図(1)



第57図 トレンチ土層断面図 (2)

は開けており、石垣が2段に築かれており、1段目は高さ約1.1m、2段目は約1.2mである。

本覚坊は、鰐淵寺の中でも、最も古くからある僧坊名の一つである。本覚坊の歴史を文献からたどると、永万元年（1165）年に初めて名が見える（『文治2年（1186）鰐淵寺古記録写（文書番号17）』）。その後、約750年あまり続き、明治20年（1887）の『明細帳』までは、確実に僧坊名を確認することができる。しかし、明治43年（1910）の『僧房二閑スル答申書』（池橋1997）では「敗類シテ寺址ノミ・建築物ナシ」とあることから、この23年間に滅失したことがわかる。

## 2. 調査の目的と方法（第56・57図）

前回の分布調査で採取した古代の須恵器を基に古代の遺構確認と、絵図Aに見える三重塔の遺構確認を調査目的とした。この場所は、普段の境内散策コースから外れていることもあり、草木が繁茂していたため、最低限の伐採と清掃を行い、地表面を確認した。

地表面で礎石や縁石が並ぶ建物跡を2箇所確認した。1箇所目は平坦面中央で、遺構名をSB2701（建物1）とし、2箇所目は平坦面東側で、遺構名をSB2702（建物2）とした。

トレンチの設定は、建物遺構の主軸等にはこだわらず、国土座標を基準に設定することとした。トレンチは10箇所設定したが、必要に応じてグループにまとめるうこととし、建物SB2701を中心に、西側トレンチ（トレンチ3・8・9・7）、東側トレンチ（トレンチ6・5・1）、北側トレンチ（2トレンチ）、南側トレンチ（4トレンチ）、南東トレンチ（10トレンチ）として呼称することとする。

なお、トレンチ内で石が散見された。礎石下の根石とも考えられることから、石に影響がない場所を選んで、数か所深掘して下層の状況を確認した。

## 3. 層序（第56～61図）

礎石などの石を確認した面と被熱層をもとに層を区分した。被熱層は本覚坊の被災を表すものと思われるが、被災するたびに再建されてきた様子が層位からうかがえる。

地表面を第1遺構面（地表面）とし、下層に向かって第2遺構面・第3遺構面・第4遺構面とした。

同じ場所で繰り返し建替えられていることから搅乱が著しく、各遺構面の年代の特定は難しい状況であった。

### ①第1遺構面（第58図）

地表面（第1層）である。標高は、149.7～149.9mである。建物SB2701（建物1）と建物SB2702（建物2）を確認した。建物SB2701（建物1）は、明治43年（1910）以降に建てられた旧国宝殿と思われる。また、建物SB2702（建物2）は、明治43年（1910）年までに焼失した本覚坊の東側縁石と思われる。

### ②第2遺構面（第59図）

5トレンチの7層上面、6トレンチの7層上面、7トレンチの3層上面、3トレンチの12層上面である。地表面からの深さは約15～25cmで、標高は、149.4～149.7mである。

5トレンチの礎石SS2704の底面もこの層であることから、他のトレンチで散見される石も、礎石に関係する石と考えることが出来る。

また、2トレンチの4層上面でピットや溝SD2708、4トレンチの2層上面で石敷き溝SD2703、10トレンチの4層上面で礎石SS2706を確認した。

### ③第3遺構面（第60図）

6トレンチの8層上面、7トレンチの4層上面、3トレンチの14層上面である。地表面からの深さは約30～58cmで、標高は、149.3～149.5mである。石が散見されることから、何らかの遺構に関係するものと思われるが不明である。

また、10トレンチの3層上面で、SS2707を確認した。

### ④第4遺構面（第61図）

6トレンチの12層上面、7トレンチの11層上面、3トレンチの17層上面である。地表面からの深さは約75～80cmで、標高は、148.9～149.1mである。7トレンチの11層上面で、礎石SS2705を確認した。

## 4. 遺構

### （1）検出した遺構（第56～61図、図版19～22）

#### ア. 第1遺構面（第56～58図）

##### （ア）建物SB2701（建物1・旧国宝殿）

1層上面の、平坦面のはば中央で確認した遺構である。残存状態の良い建物跡である<sup>(1)</sup>。礎石の配置などから片面廂の建物と考えられる。南北方向に6間（11.9m）、東西方向に2間（4m）の身舎をもつ建物である。礎石が並び、その周りには縁石が巡るが、東側は南端の一部にのみ縁石が認められる。屋根の形は切妻と想定する。東側は縁石の外側にも礎石が並ぶことから、4尺（1.35m）ほどの廟が付くものと思われる。

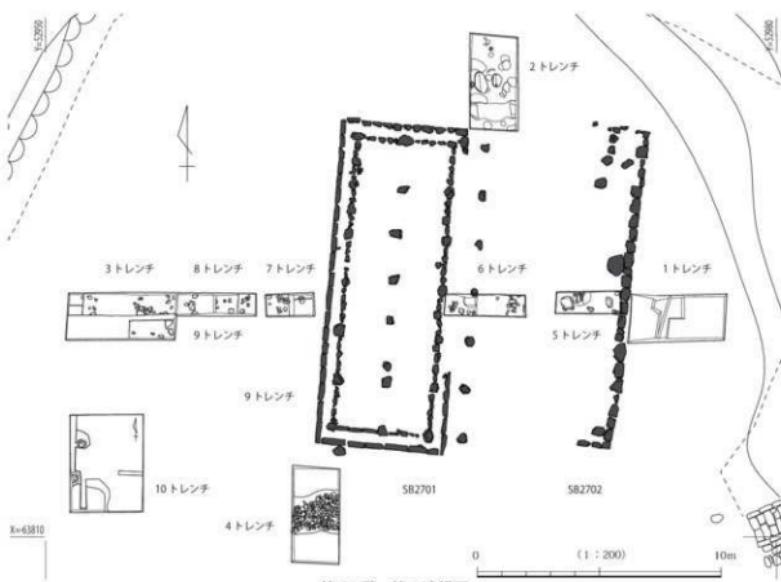
母屋の屋根には、セメント製の軒平瓦・平瓦・袖瓦・棟丸巴瓦・熨斗瓦が葺かれ、棟石もセメント製であった。庇の屋根には、釉薬瓦の赤色石州瓦の軒平瓦・平瓦・袖瓦が葺かれていた。この建物は、文献から旧国宝殿と考えられる<sup>(2)</sup>。

##### （イ）建物SB2702（建物2・最後の本覚坊跡）

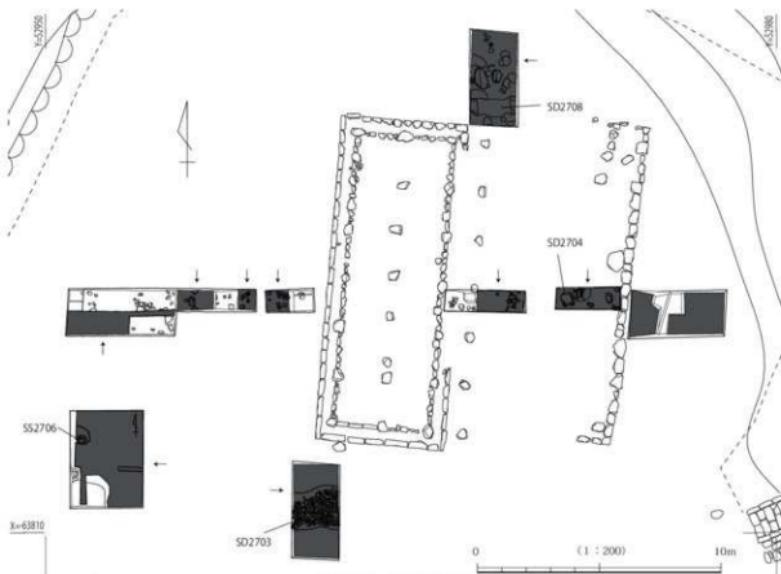
1層上面の、平坦面の東端で確認した遺構である。東西方向に長い建物の、建物側面の縁石のみを確認した建物跡である。東側の縁石のみ残されているが、建物の中央や西側の礎石や縁石は、建物SB2701（建物1）の建設時に除去されたと思われる。縁石の南北両端が確認できたことから、東側面の縁石の長さは12.6mであることがわかる。縁石は切石を中心に、一部自然石を用いている。

#### イ. 第2遺構面（第56・57・59図）

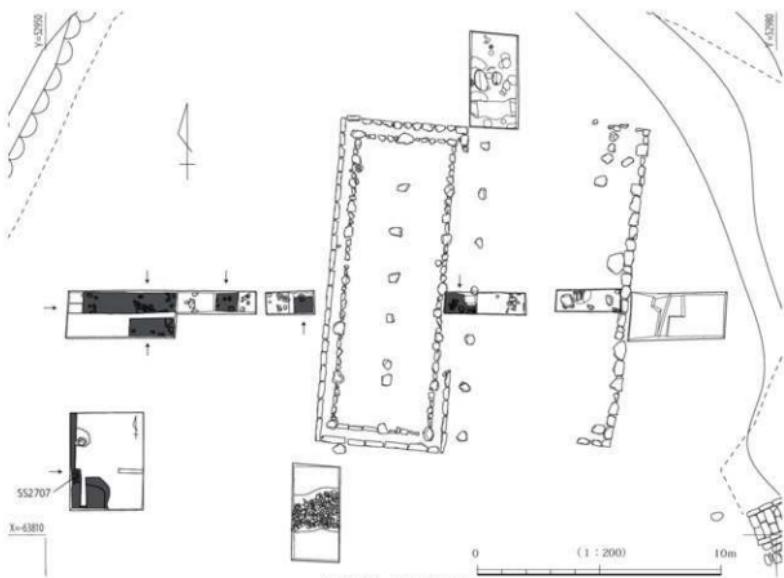
東側トレンチ（5・6トレンチ）、西側トレンチ（7・8・9トレンチ）の、各トレンチでは、小石が散見されることから、礎石下の根石の可能性も考えられる。



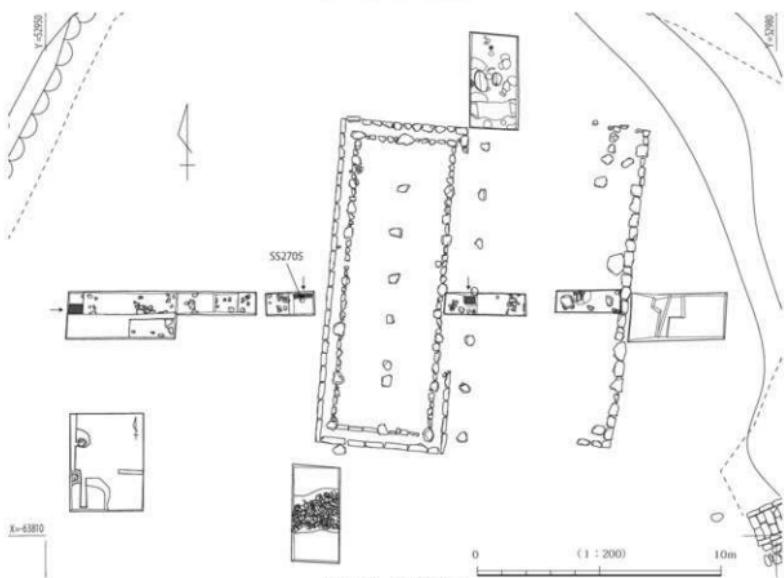
第58図 第1遺構面



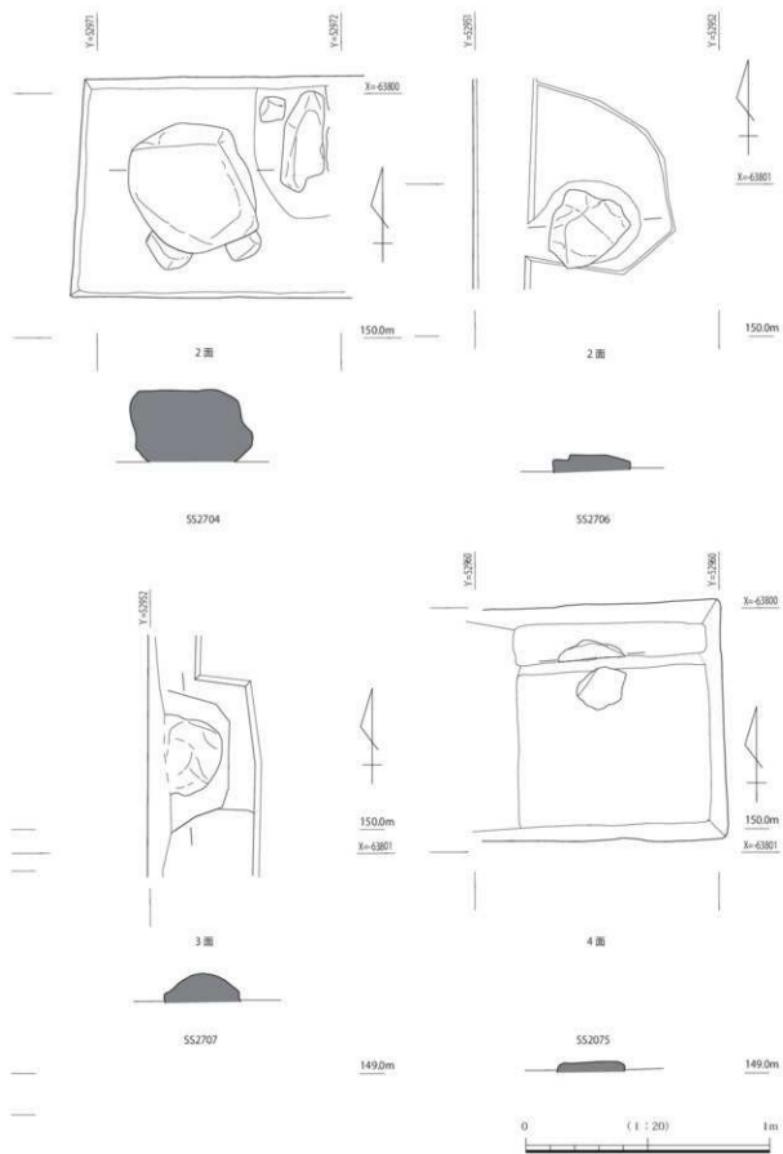
第59図 第2遺構面



第60図 第3遺構面



第61図 第4遺構面



第62図 碓石 平面図・断面図

## (ア) 東西溝 SD2703

SB2701の南、4トレンチで確認した東西方向の溝である。長さ2m以上、幅1.7m、深さ0.2mである。底の断面は丸い。溝の中は、人頭大の礫を充てんする。礫の上面が平らでないことから、道ではなく排水施設と考えた。

## (イ) 東西溝 SD2708

北トレンチ(2トレンチ)で確認した東西方向の素掘りの溝である。長さ2m以上、幅0.5~0.75m、深さ0.2~0.3mである。底は平らである。遺物は出土していない。

## (ウ) 磐石 SS2704

東トレンチ(5トレンチ)の建物SB2702の内側で確認した礎石である。一石のみ確認した。礎石は0.5m×0.5mの不整形な方形で、厚さ27cmである。上面はほぼ平らで、礎石下には根石を置く。掘方は確認できなかった。礎石上面の高さ(標高149.75m)が、建物SB2702の縁石より低い(標高149.80m)ことから、別の建物と推定する。

## (エ) 磐石 SS2706

南西の10トレンチの2層で確認した礎石である。約33cmの不整形な円形である。周囲には5cm前後の掘方が確認できる。石の上面は平らである。これにつながる石は確認できなかった。

## ウ. 第3遺構面(第56・57・60図)

一面は、東側トレンチ(6トレンチ)、西側トレンチ(3・7・9トレンチ)である。各トレンチでは、小石が散見されることから、礎石下の根石の可能性が考えられる。3トレンチから道具瓦の鳥衾が出土した。

## (ア) 磐石 SS2707

10トレンチの3層で確認した礎石である。約32cmの不整形な円形である。周囲には10cm前後の掘方が確認できる。石の上面は丸い。これにつながる石は確認できなかった。僧坊の位置からすると、倉庫等の附属屋の礎石と思われる。

## エ. 第4遺構面(第56・57・61図)

西トレンチ(7トレンチ)の深掘りで確認した。

## (ア) 磐石 SS2705

3層上面で出土した。西トレンチ(7トレンチ)の東端で深掘りの部分で確認した礎石である。円形で、直径約26cm、厚さは不明である。上面はほぼ平らで、掘形は確認できなかった。礎石は一石のみ確認した。

## 5. 出土遺物

## (1) 遺構に伴わない遺物(第63~66図・図版32~34)

## ア. 貿易陶磁器

## (ア) 白磁(第63・64図、図版33)

第63図1~4・第64図9は、碗である。

1・2は、玉縁口縁をもつ碗IV類である。12世紀。3は、E群。16世紀代。4は、5類。口唇部が平坦である。第64図9も、12世紀。

第63図5・6は皿である。

5は、小皿である。IV類。12世紀。6は、菊皿である。E類。16世紀中頃から後半。

第64図11は、四耳壺である。耳の部分である。12世紀。

(イ) 青磁 (第63・64図、図版33)

第64図12は、同安窯の皿である。点描文。

第63図7・8、第64図10・13は、龍泉窯の碗である。

第64図13は、碗I類である。劃花文がみえる。第64図10は、碗I類。劃花文がみえる。12世紀。第63図7は、碗の底部である。第63図8は、IIIの口縁である。端反。15～16世紀前半。

(ウ) 中国陶器 (第63・64図、図版33)

第63図9、第64図14・15は褐釉陶器である。

第64図9は、黄褐釉色の盤である。12世紀。第64図14は、壺である。12世紀。第64図15は、壺や鉢の体部と思われる。

(エ) 青花 (第63図、図版33)

10は、碗である。16世紀中頃から後半。11は、漳州窯系の青花皿である。芙蓉手が見える。16～17世紀初頭。開山堂の第48図2と同一個体の可能性がある。

イ. 国産陶磁器・土器

(ア) 古代須恵器 (第65図、図版34)

表片が45点3188.4g出土し、それ以外の器種が2点出土した。

1は、長頸壺の口縁から頸部である。口唇部上面は平らであり、口縁に沿って沈線状のものが見える。これは外側に粘土を貼り付け、口唇部を拡張した時の、粘土の継ぎ目と思われる。

2は、短頸壺の胴部である。胴部最大幅がやや下側にあり、傾斜変化点となる。胴部は回転ナデ。底部は残存状態が悪く不明である。いずれの須恵器も、11世紀以前と思われる。

(イ) 備前焼 (第63・64図、図版33)

第63図12・13は、壺である。12は、肩に5条の沈線文が1本巡るが、一周してずれる。13は、肩に5条の波状沈線文が1本巡る。いずれも16世紀。

第64図1・2は擂鉢である。1は、内面が使い込まれており滑らかである。磨り目は7条である。16世紀中頃まで。2は、口縁部である。磨り目が見える。

(ウ) 濑戸・美濃焼 (第64図、図版33)

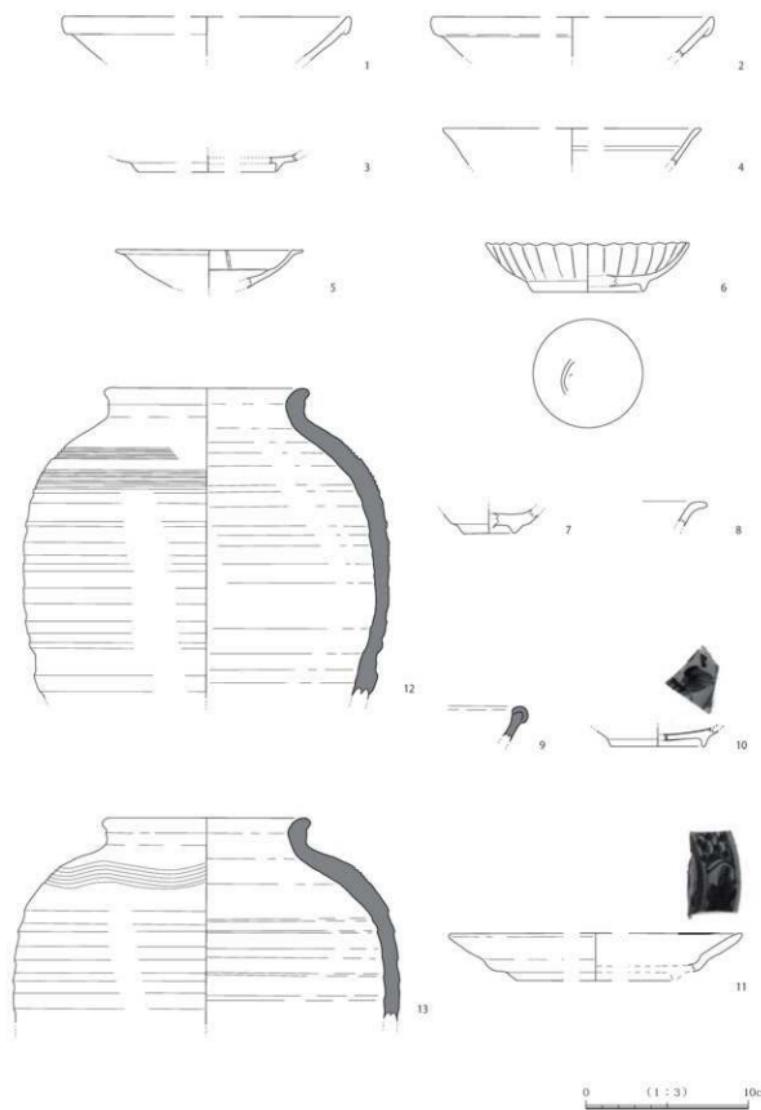
3は、瀬戸焼の火鉢である。底部に脚が付く。19世紀以降。

(エ) 不明 (第64図、図版33)

4は、合子の身である。外面は花文である。

(オ) 中世土師器 (第65図、図版32)

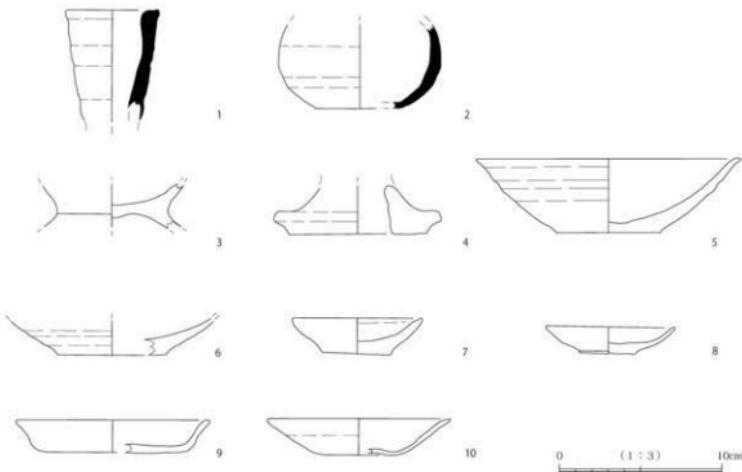
3は、足高高台付壺の壺部から脚部にかけてである。12世紀。4は、柱状高台付の壺か皿の脚部



第63図 出土遺物 (1)



第64図 出土遺物（2）



第65図 出土遺物(3)

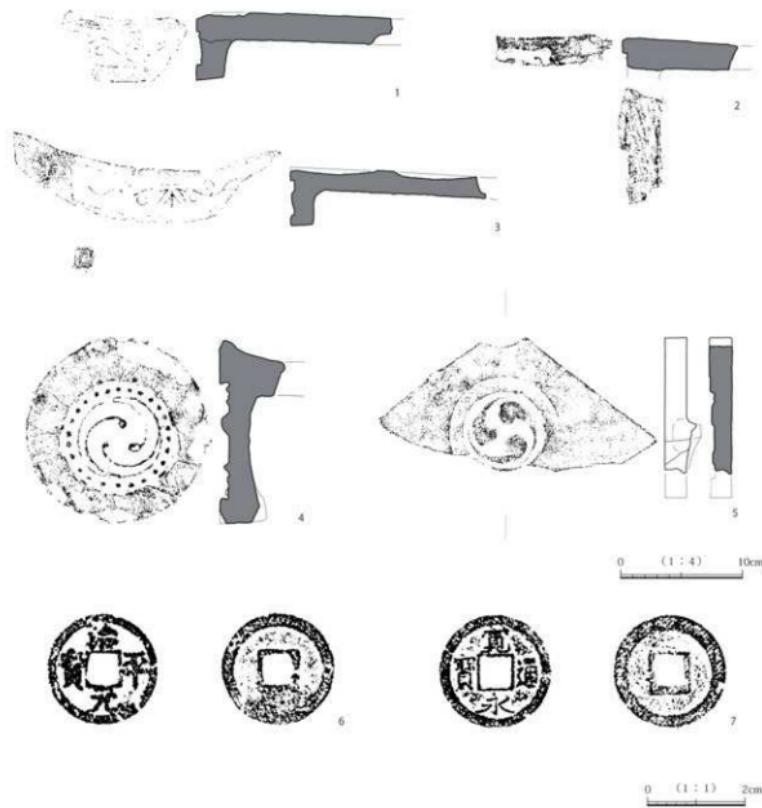
である。12世紀。5は、壺で、体部外面は外反しながら立ち上がり、内面は底部から体部へ滑らかにつながる。口縁部は端反である。鰐淵寺分類の壺Bで、12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。6は、壺で、体部外面の底部付近を若干しづり、外反する。内面は底部から体部へ滑らかにつながる。鰐淵寺分類の壺Gで、16世紀中頃から後半と考えられる。7は、皿で、体部外面の底部付近を若干しづり、直掩的に立ち上がる。内面は底部にナデが不十分で渦巻痕が残る。口縁部内側が平坦である。鰐淵寺分類の皿Cで、13世紀前半と考えられる。8は、皿で、体部外面の底部付近を若干しづり、強く外反する。内面の体部立ち上がりは、外面底部より外側から立ち合あがる。鰐淵寺分類の皿Eで、13世紀から14世紀と考えられる。9は、皿で、体部外面の底部から体部は丸みをおび、急角度で外反しながら立ち上がる。内面も外面の形に沿う。鰐淵寺分類の皿H-1、16世紀後半と考えられる。10は、皿で、手づくねである。底部から体部は指頭圧痕が残る。口縁部外面はナデにより窪み、内面は平らになる。口縁部を指でつまんで成形したものと思われる。16世紀と考えられる。

#### (カ) 土師質土器 (第64図、図版33)

5は、土鍋である。13～15世紀か。ハケ目は磨滅する。6は、土鍋の底部である。19世紀以降。7は、土鍋である。ハケ目が見える。

#### (キ) 瓦 (第66図、図版34)

1は、軒平瓦である。中心飾りは宝珠紋である。唐草が宝珠紋の中程から伸びる。2は、軒平瓦の平瓦部である。瓦当部の頸が剥離する。接合部に切り込みがみられる。3は、左軒棟瓦である。小丸瓦当部を欠く。中心飾りは下向き三葉文で、唐草は2回転半である。キラコを含む。脇区に四角い刻判があるが、文字は不明である。4は、鳥衾である。左巻き三巴文で巴の尾は圈線に重なる。珠文は



第66図 出土遺物(4)

25個である。5は、扇形の棟端瓦である。右巻き三巴文である。瓦范の跡が丸く残る。キラコを含む。

2・5の瓦の年代は18世紀以降と思われる。

(ク) 錢貨 (第66図、図版34)

銅錢が2枚出土した。

6は、北宋の治平元寶（初鑄年1064年）の真書体である。重さ2.4g。7は、寛永通寶（無背銭）で、3期の新寛永（初鑄年 1697年または1767年）である。重さ2.8g。

(ケ) その他 (第64図、図版33)

8は、石臼の下臼である。受けが付く。茶臼の可能性がある。

## 6. 小結

今回の調査では、平坦面に十字状にトレーニングを設定し調査を行った。

地表面で国宝殿と最後の本覚坊を確認した。国宝殿は、新しい建物のうえ、最近まで使われていた建物であることから、良好な残り具合であった。一方、最後の本覚坊は、国宝殿建設時に礎石等が除去されたことから、ほとんど現存せず、唯一、東側の縁石のみが現存していた。

また、各トレーニングの地山の深さから、平坦面は谷地形であったと推定することができた。地山は、平坦面周辺部の1・2トレーニングでは149.6m前後、3・7トレーニングでは149.0m付近で確認したが、平坦面中央付近の6トレーニングでは標高148.55mまで掘り下げたが確認できなかった。また、2トレーニングの北側の崖でも地山が露出しており、崖上端の標高は153.3mである。これらのことから、6トレーニング付近は地山が深く、平坦面の旧地形は南に開く谷地形であったと推定できる。この場合、6トレーニングで確認した被熱層や炭化層は、本覚坊の火災に関連した堆積土の可能性も考えられる。今回は、調査面積が限られていたことから平坦面造成方法の確認については今後の課題である。

(原 俊二)

### 註

- (1) 平坦面の草木を伐採すると、平坦面中央付近でセメント瓦と赤瓦が一面に広がっていた。これらの瓦を除去した後、礎石・縁石を確認した。この建物が最終的に倒壊した時期は不明であり、セメント瓦の広がり具合から、西南方向に建物が倒れたことがわかる。
- (2) 明治43年(1910)の『答申書』によれば、本覚坊跡地に「本坊跡或國宝殿建設の目的地」とあり、この遺構がその国宝殿と推定できる。後に、この建物の機能は、恵門院跡(A-32 平坦面)の旧国宝拝観所に引き継がれている。また、建物のその後の利用は、現住職佐藤泰雄氏によれば、茅小屋や瓦小屋として使われていたようである。



## 第6節 恵門院跡・覚城院跡 (A-32 平坦面)

### 1. 恵門院・覚城院の位置と沿革 (第 67・68 図, 図版 23)

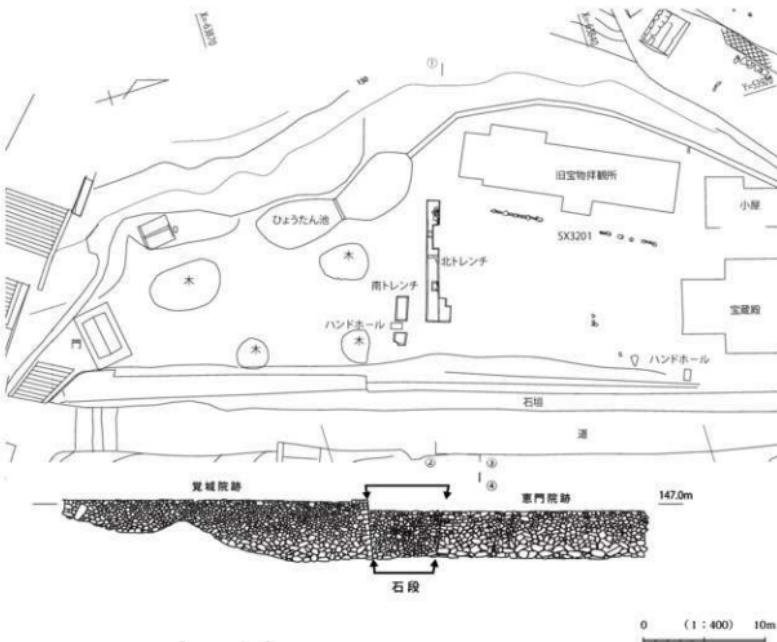
恵門院跡・覚城院跡は根本堂に向かう中央石段の北側に隣接する場所にある。現在、2つの僧坊跡は南北方向に一つの平坦面となっている。標高は 146 m である。

同じ平坦面には、文化財を収蔵する宝蔵殿(収蔵庫)が北端に南向きに建ち、旧宝物拝観所は北西端に東向きで建つ。その間の角に、瓦等を保管する資材小屋がある。

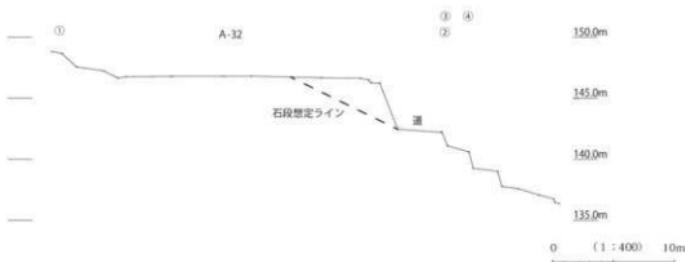
平坦面の西側背後は急斜面で、その上段は根本堂が建つ平坦面となる。東側は約 4.4 m ~ 5 m の高い石垣が築かれており、石垣の下端には南北方向の道が沿う。

石垣は、南端から 24.6 m 付近までの高さが約 5 m、それより北側の高さは約 4.4 m と段差が付く。これは、南側の覚城院と北側の恵門院との敷地の高さの違いを示すものと考えられる。すなわち、覚城院が高く、恵門院が低い場所に建てられていたことに由来する。なお、覚城院側の立木の周りが石で囲まれて、現地表面より一段高くなっているが、これも元々の地面の高さの名残と思われる。

また、石垣の段差の北側、恵門院側に、縦に目地が通る場所があるが、これは、絵図 A・B に見え



第 67 図 恵門院跡・覚城院跡位置図・石垣立面図



第68図 断面図

る恵門院の石段が埋もれている場所である。

現在この平坦面の南側入り口に立つ門は、元々は、この石段の上段に建てられていた恵門院の門と言われている。

ところで、恵門院の歴史を文献からたどると、

宝暦 14 年（1754）の「明細帳」に初めて名が見え、明治 38 年（1905）の焼失まで続いていたことがわかる。

恵門院には前身の僧坊名があり、享保 2 年（1717）の『雲陽誌』では、橋本坊という僧坊名になっている<sup>(1)</sup>。

この橋本坊は、応永 20 年（1413）の「鳥居僧都道秀处分状（文書番号 154）」が初出であることから、橋本坊から恵門院へと僧坊名を変え、約 500 年間続いた僧坊となる。

また、覚城院の歴史を文献からたどると、延享元（1744）年の「智尾大権現社修造棟札写（山岸 2012）」に初めて名が見え、明治 21 年（1888）の焼失まで続いていたことがわかる。

覚城院には前身の僧坊名があり、享保 2（1717）年の『雲陽誌』では、大福坊という僧坊名になっている<sup>(2)</sup>。

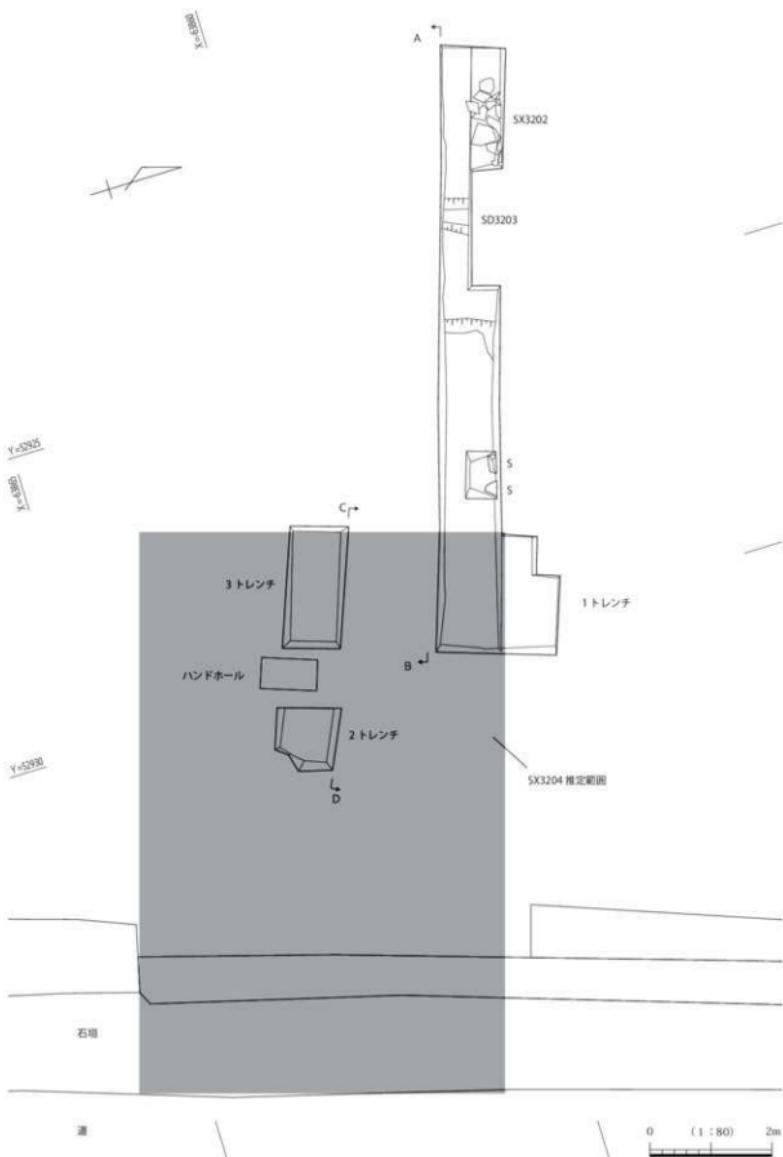
この大福坊は、応永 25 年（1418）の「欽鎖讓状（文書番号 159）」が初出であることから、大福坊から覚城院へと僧坊名を変え、約 500 年間続いた僧坊となる。

なお、橋本坊と恵門院、大福坊と覚城院、それぞれが同じ場所に建てられていたかどうかは不明である。

## 2. 調査の目的と方法（第69図、図版24）

この平坦面は、元々谷地形と考えられていたことから、根本堂平坦面造成時の切土を、この場所に埋めて平坦面を造成したものと考えられている。このため、トレーニングの設定場所は、建物跡を掘削するよりも、平坦面の最大幅の場所に設定し、かつ石段埋没場所も確認できる場所とした。

トレーニングは、3 本設定した。北側の 1 トレーニングは、平坦面造成過程を明らかにすることと、石段最上段の北側隅を確認すること目的で設定した。南側の 2・3 トレーニングは、中央にハンドホール（電気配線設備）が埋設されていたため、東西 2 つに分割した。



第69図 トレンチ配置図

1 ドレンチで石段の北側隅が確認できなかったことから、石段の中心と想定される場所に設定したドレンチである。

### 3. 層序（第70図、図版24）

基本層序は、I層整地土、II層造成土、III層地山で、石段跡埋土をIV層とする。

I層は、厚さ5～45cmである。覚城院側を削平し、その土で惠門院側に盛土をして、現在の平坦面に整地した時のものである。IV層より上層なので、明治38年（1905）以降の堆積と思われる<sup>(3)</sup>。

II層の厚さは、18cmである。地山の上に盛土をし、平坦面を造成した時のものである。すなわち、惠門院あるいは前身の橋本坊を建設した時の地表面である。II層上面は固くしまっている。

III層は、地山である。北から南に向かってゆるやかに傾斜する。

IV層は、II層上面から掘り込まれた層で、石段跡の埋土である。深さ78cmまで掘り下げた。明治38年（1905）に惠門院が焼失した後に石段の石を抜き取り、その後に被災物と一緒に埋めたものと思われる。

### 4. 遺構（第67・69図、図版25）

#### （1）検出した遺構

##### ア. 石列 SX3201

建物の縁石と思われる石列を、旧宝物拝観所の前面（東側）で確認した。石は一部露出していたが、ほとんどの石はコケ類に覆われていた。

石列は、南北方向に一列あり、旧宝物拝観所正面の向拝付近で途切れている。南側では12個の石が2.5mで並び、北側では9個の石が2.7mで並ぶ。総延長は、8mである。南北両角は確認できなかつた。

石材は、いずれも不整形な自然石で、一部切石が混じる。20～45cmの大きさで、上面はほぼ平らである。石の面を西側で揃えているように見えることから、建物は東側に桁行をとる構造と考えられる。

##### イ. コンクリート歩道 SX3202

1 ドレンチで確認した、南北方向に伸びる歩道である。

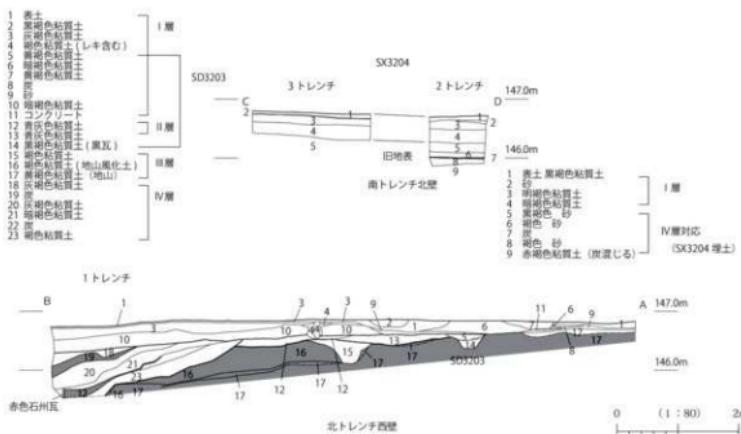
地山の上に砂を敷き、その上に砂を多く含む簡易なコンクリートで舗装したものである。5cm程度の表土で覆われていた。

長さは不明、残存幅2mである。南側の門から旧宝物拝観所への誘導路と思われる。

##### ウ. 南北溝 SD3203

1 ドレンチで確認した。南北方向に伸びる素掘りの排水溝である。長さ不明、幅69cmである。溝の中は黒色のいぶし瓦の左棧瓦を隙間なく立てて充填されていた。破片数13点 7,199g出土した。

瓦は被熱を受けた可能性があることから、覚城院・惠門院いずれかの被災瓦が用いられている可能性がある。なお、I層は近くのひょうたん池の影響で、地面がぬかるんだ状態であることから、元々



第70図 1トレンチ土層断面図

は地表面から掘り込まれていた可能性もある。

## 工. 石段 SX3204

1トレンチで確認した。石段は、幅約6.3m、奥行の長さ8.6mと推定する<sup>(4)</sup>。石段の石材を抜き取った後に、埋め戻されている。

埋め戻しは、炭化物を主体とする黒色土で埋められているが、一部は層状に堆積する。釉薬瓦の赤色石州瓦や陶磁器などが出土した。

## 5. 出土遺物 (第71図、図版35)

### (1) 遺構に伴う遺物 (第71図・図版35)

#### ア. 南北溝 SD3203

##### (ア) 瓦 (第71図、図版35)

1は、黒色の左棧瓦である。キラコを含む。火を受け、炭が付着する。

#### イ. 石段 SX3204

##### (ア) 貿易陶磁器

###### ①青花 (第71図、図版35)

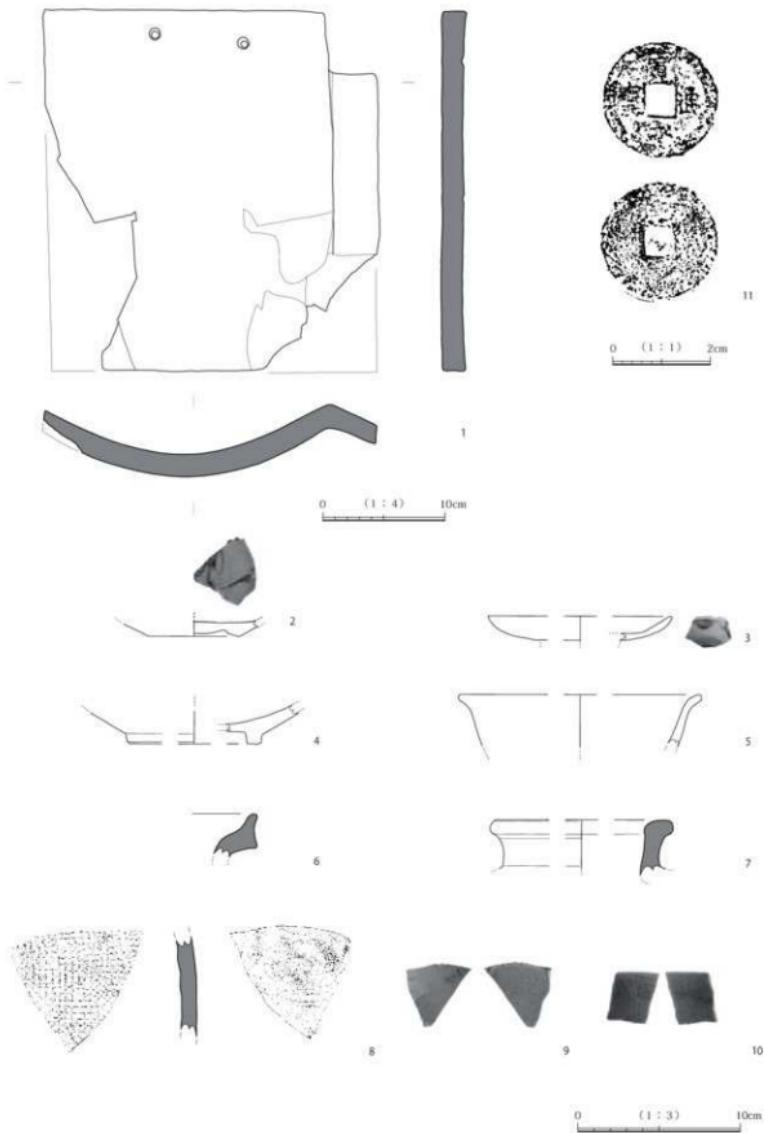
2は、漳州窯系の皿である。碁笥底である。C群。16世紀中頃である。

3は、漳州窯系の皿である。内側に釉剥ぎによる、蛇の目がみられる。

##### (イ) 国産陶磁器・土器

###### ①石見焼 (第71図、図版35)

4は、石見焼の碗である。高台外側角を面取りする。火を受けて変色する。19世紀。



第71図 出土遺物

## (ウ) 銭貨 (第71図・図版35)

11は、寛永通寶である。無背銭の新寛永（初鋸年 1697～1747年・1767～1781年）である。

## (2) 遺構に伴わない遺物 (第71図・図版35)

## ア. 貿易陶磁器

## (ア) 白磁 (第71図、図版35)

9は、白磁の皿である。碁笥底風となる。11世紀終わり頃または12世紀である。

## (イ) 青磁 (第71図、図版35)

5は、龍泉窯の青磁碗である。D類。火を受けて変色する。15世紀。

10は、龍泉窯の青磁碗である。口縁外面に雷文が見える。C類。15世紀。

## イ. 国産陶磁器・土器

## (ア) 越前焼 (第71図、図版35)

6は、越前焼の壺の口縁部である。13世紀末～14世紀初頭。

## (イ) 備前焼 (第71図、図版35)

7は、備前焼の壺である。口縁はL字状である。17世紀初め。

## (ウ) 亀山焼・勝間田焼 (第71図、図版35)

8は、亀山焼または勝間田焼の壺である。外面には格子状のタタキ目。内面は強い横ナデ。

## 6. 小結

今回の調査では、平坦面中央にトレンチを設定し調査を行った。

平坦面造成方法については、地表面から0.15～1.1mで地山を確認したことから、当初想定していた盛土による造成ではないことが明らかとなった。

また、恵門院の石段を確認した。石段は、石材を抜き取られた後に埋め戻されていたが、その埋土は炭化物や被熱物を含むものであった。これらの出土品は、明治38年(1905)の恵門院焼失後の被災物片づけを想定することができる。

(原 俊二)

## 註

(1) 僧坊の変遷については、花谷(2015)を参考にした。

(2) 花谷(2015)によれば、鰐淵寺は、寛文期に杵築大社との関係の激変に伴い僧坊の改廃があったとされ、戦国期と江戸時代では僧坊数が減少している。

この中で、享保2年(1717)の雲陽誌と宝曆14年(1764)の万指出には12の僧坊名があがるが、本尊の名称とその作者(伝承)を対比することで、僧坊名の変化をたどっている。さらに、出雲鏡(18世紀中ころ成立)とも比較検討し、僧坊が改称されたのは18世紀中ころ前後と推測する。

(3) 石原(2015)によれば、「前住職からの聞き取りでは、戦前は覚城院側が高く、そこから恵門院側へ飛び降りたりして遊んだそうである。削平し、同一平坦面になったのは戦後まもなくのことと思われる。」と聞き取りされている。前住職は佐藤泰欽(大正15年生まれ)氏である。

(4) 東側の石垣表面に縱目地が確認できることから石段の幅は約6.3mである。奥行きは埋没しているため手掛か

りがないことから、近くの本覚坊跡石段の傾斜角度を参考に推定した。石垣の高さは約4.4m、傾斜角度は約27度として計算すると、奥行の長さ約8.6mとなる。

#### 参考文献

- 石原聰 2015 「第4章 分布調査 第3節 別所の中枢地域 註(1)」『前報告書』
- 中井均 2019 『戦国時代における石垣技術の考古学的研究』(課題番号 16K03160) 兼 織豊期城郭研究会  
2019年度彦根研究会資料集
- 花谷 浩 2015 「第7章総括 第1節鰐淵寺伽護の構造とその変遷」及び「史料からみた鰐淵寺僧坊の消長(附表  
1~3)」『前報告書』
- 花谷 浩 2015 「第3章鰐淵寺の歴史と文化財 第2節鰐淵寺境内の立地と構成 2鰐淵寺境内の構造』『前報告  
書』
- 山岸 常人 2012 「鰐淵寺棟札等訛文」『科研報告書』

## 第7節 防災施設整備事業に伴う発掘調査

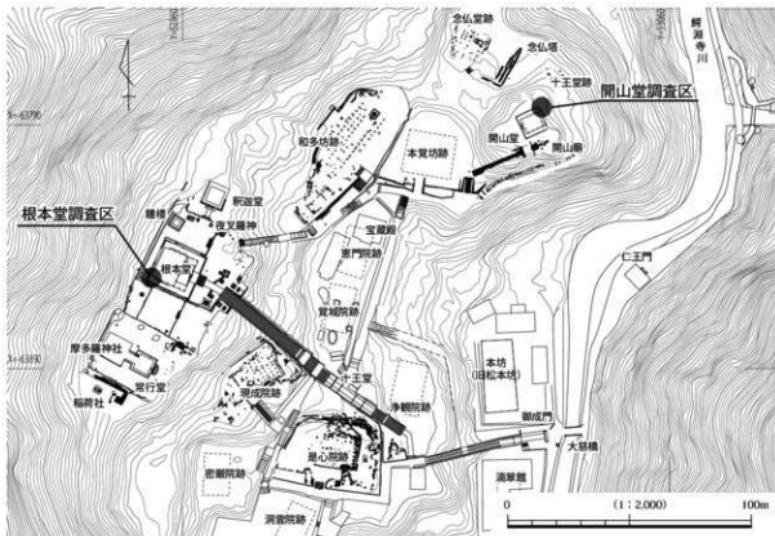
### 1. 事業概要と調査に至る経緯（第72図）

宗教法人鰐淵寺は、補助金交付を受けて、平成28年度（2016）から令和2年度（2020）の5箇年で史跡内に現存する釈迦堂や開山堂等、建造物群の保存修理を実施した。その最終年度となる令和2年度には境内の防災設備整備に取り組み、防犯・防災対策を講じた（宗教法人鰐淵寺 2021）。具体的な内容としては、自動火災報知設備（釈迦堂、開山堂）、電源設備（根本堂、宝蔵殿）、防犯カメラ、各機器を繋ぐ通信・電源ケーブルの設置が挙げられる。

このうち、根本堂及び開山堂ではケーブルの地中埋設が必要であったため、当該箇所の発掘調査を行うこととした。

### 2. 調査の経過

調査箇所は、根本堂基壇南西隅と開山堂基壇北西隅から平坦面にかけての2箇所である。トレントは必要最小限の規模で設定し、令和2年12月18日に調査を実施した。人力掘削、写真撮影、図面作成の後、ケーブル埋設を行い、掘削土で埋め戻して調査を終えた。なお、開山堂基壇部分は、後日三和土で仕上げた。



第72図 トレント調査位置図

### 3. 調査の成果

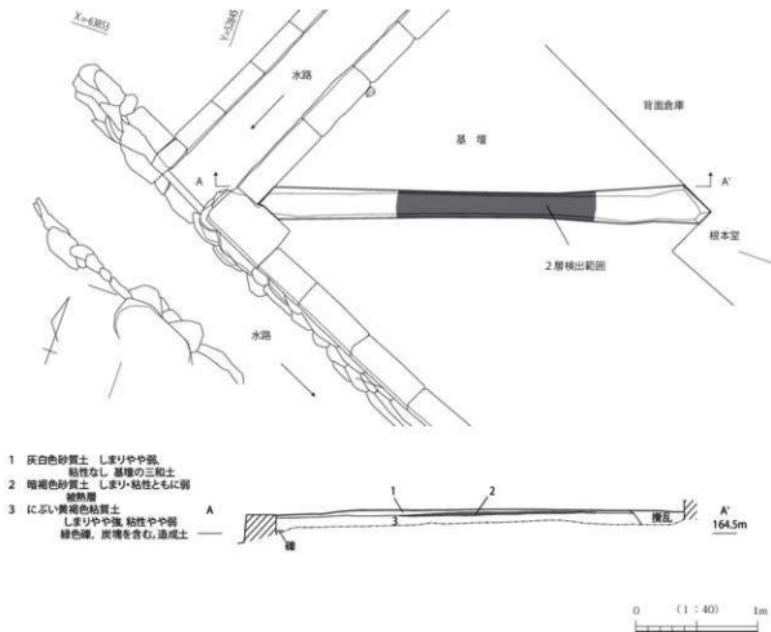
#### (1) 根本堂調査区（第73・75図）

根本堂裏の水路内に敷設した配管を基壇石垣南西隅の築石間から通し、根本堂背面の倉庫内に繋ぐため、基壇上に設けたトレーンチである。長さ3.4m、幅0.15mの規模で設定し、掘削深度は0.15mとした。

層序は地表面から、1層：灰白色砂質土層（基壇の三和土）、2層：暗褐色砂質土層（被熱層）、3層：にぶい黄褐色粘質土層（基壇造成土）である。2層は上半が黒色、下半が赤色を呈する。3層は直径5～10mm程度の炭片や焼土塊を含み、基壇の整備以前に火災があったことをうかがわせる。遺物は出土していない。

基壇三和土直下で検出した被熱層（2層）から、現在の基壇が整備された後に、火災もしくは火を用いる何らかの行為があったことが明らかになった。その一方で、その評価について残された課題は多い。以下では、被熱層の評価に関わる情報を整理しておきたい。

まず、被熱層の評価の前提となる基壇築造の年代は、明らかではない。基壇は現状で、一辺約18mの正方形で、その上に建つ根本堂は5間四方、間口約13mを測る。このように、基壇の規模は堂に対して過不足ない印象を受ける。



第73図 根本堂 トレーンチ平面図・北壁断面図

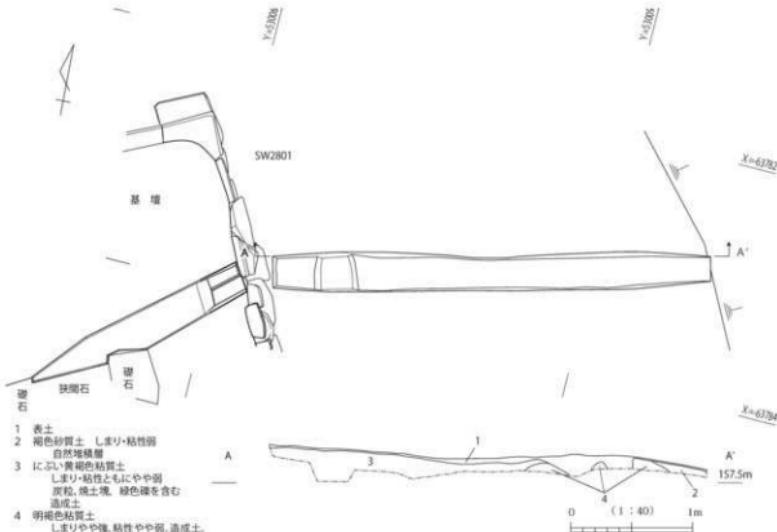
次に根本堂の建て替えに目を向けると、鶴淵寺は天福年中（1233～1234）、嘉暦元年（1326）、天文20年（1551）に大火災に見舞われたことが史料からわかる。根本堂も例外ではなく、3度目の大火で焼失、天正5年（1577）に毛利輝元の御願により再建された。その後、宝暦14年（1764）の『万指出』には元禄4年（1691）の建立記事があり、これが根本堂再建に関する最後の記録である（井上編2012）。一方、現根本堂の建築様式から推定できる建立時期は18世紀中期とされており、両者の年代に50年ほどの乖離が認められる（山岸2012）。山岸氏も指摘しているように、そのわずか50年の間に建て替えが必要になったとすれば、「よほどの建物の傷みや災害」を想定する必要があるが、今のところこれに関する史料は知られていない。

このように被熱層と関連づけられそうな事象をとりあげた。ただ調査範囲が極めて狭小であったこともあり、これらと結びつける根拠は得られていない。

## （2）開山堂調査区（第74・76図）

開山堂が建つ平坦面の東側斜面から開山堂北西隅に配管を繋ぐために設けたトレンチである。平坦面部分は長さ3.6m、幅0.3m、掘削深度は約0.15mで、配管のジョイントボックス埋設を必要とする箇所のみ0.3mとした。一方、基壇部分は長さ2.0m、幅0.3mで、掘削は三和土の除去のみに留めた。

層序は地表面から、1層：表土層、2層：褐色砂質土層（自然堆積層）、3層：にぶい黄褐色粘質土層（造成土）、4層：明褐色粘質土層（造成土）である。遺物は確認できなかった。



第74図 開山堂 トレンチ平面図・北壁断面図

#### 4.まとめ

根本堂基壇上で初めて調査をおこなった。調査範囲は狭小であったが、被熱層を確認することができた。その性格や年代の追求については、今後の課題としておきたい。また、開山堂平坦面の調査結果は、周辺の他調査区とも整合的であった。

(景山このみ・黒田祐介)

#### 付記

本稿は、景山2021を、黒田が加筆したものである。

#### 参考文献

井上寛司編 2012『科研報告』

井上寛司 2018「解説」「出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書」法藏館

景山このみ 2021「防火施設整備事業に伴う発掘調査」「国史跡鰐淵寺境内建造物（般迦堂・開山堂）保存修理工事報告書」宗教法人鰐淵寺

宗教法人鰐淵寺 2021「国史跡鰐淵寺境内建造物（般迦堂・開山堂）保存修理工事報告書」

花谷浩 2015「鰐淵寺 略年表」「前報告書」

山岸常人 2012「鰐淵寺境内の歴史的建造物」『科研報告』

山岸常人 2012「鰐淵寺棟札等积文」『科研報告』



第75図 根本堂調査地



第76図 開山堂調査地

## 附編 鰐淵寺境内図面

ここに紹介する図面は、旧平田市教育委員会が保管していた鰐淵寺関係書類の中に単独で1枚のみ含まれていたものである。

近現代の境内の様子がわかる図面が少ないとから、今回掲載することとした。

掲載にあたっては、図面をスキャンし、デジタルトレースを行い、50%縮小し2000分の1とした。忠実にトレースしたつもりだが、線や記号の見落としや表現の間違いがあるかもしれない。比較用に、現在の境内図（第79回）<sup>(1)</sup>も掲載する。

### 1. 図面の状態

図面名 県立自然公園（鰐淵寺地内）平面図

縮 尺 1000分の1

製作年代 不明（未記入）

作成機関 不明（未記入）

大きさ B2版（縦51.7cm・横72.8cm）の青焼きであるが、原図は縦45.0cm 横72.8cm以上の大きさである。

状態 折りたたまれて保管されていたが、切れなどは見当たらない。青焼きのうえに年数が経過していることから、黄色く変色しているため線が不鮮明な部分が多い。

### 2. 製作年代について

図面中には製作年代が記載されていないが、昭和51年度の鰐淵寺保存庫改修工事の設計図面中の「案内図（保存庫の位置を表す図）」と同じであることから、この年度か、これ以前の製作と推定できる。

### 3. 作成機関

図面名が県立自然公園（鰐淵寺地内）平面図であることから、島根県か平田市のいずれかと推定する。

### 4. 内容（第77・78図）

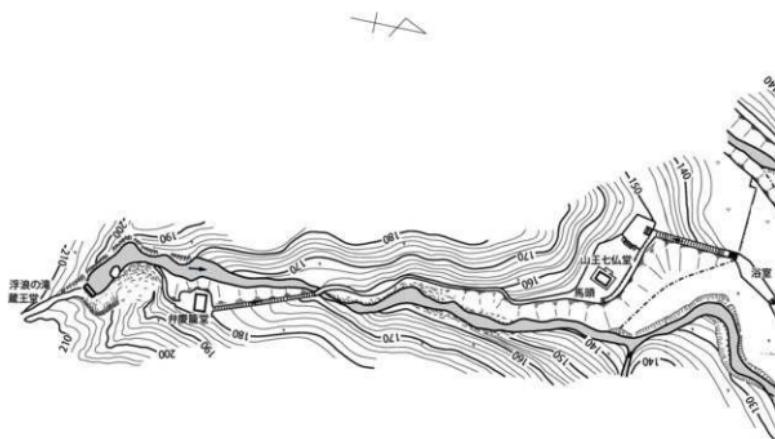
図化の範囲は、東は開山堂、西は浮浪の滝、南は仁王門、北は根本堂までである。西の浮浪の滝までが入る1枚図は稀である。昭和50年前後の境内を表現していると思われるが、現在見ることのできない建築物は、下段の滴翠館、中段のは心院・等渕院。その他の建築物としては、淨觀院跡のトイレ・本覚坊跡の国宝館・鰐淵寺川沿いの小屋・仁王門横のトイレなどである。また、参道は、本坊（松本坊）の後側から覺城院・恵門院方向へ向かう道があり、この道には本坊の北側からの道が合流する。

どのような経緯で作成された図面か不明であるが、昭和50年代頃の境内の様子がわかる資料として紹介する。

（原 俊二）

### 註

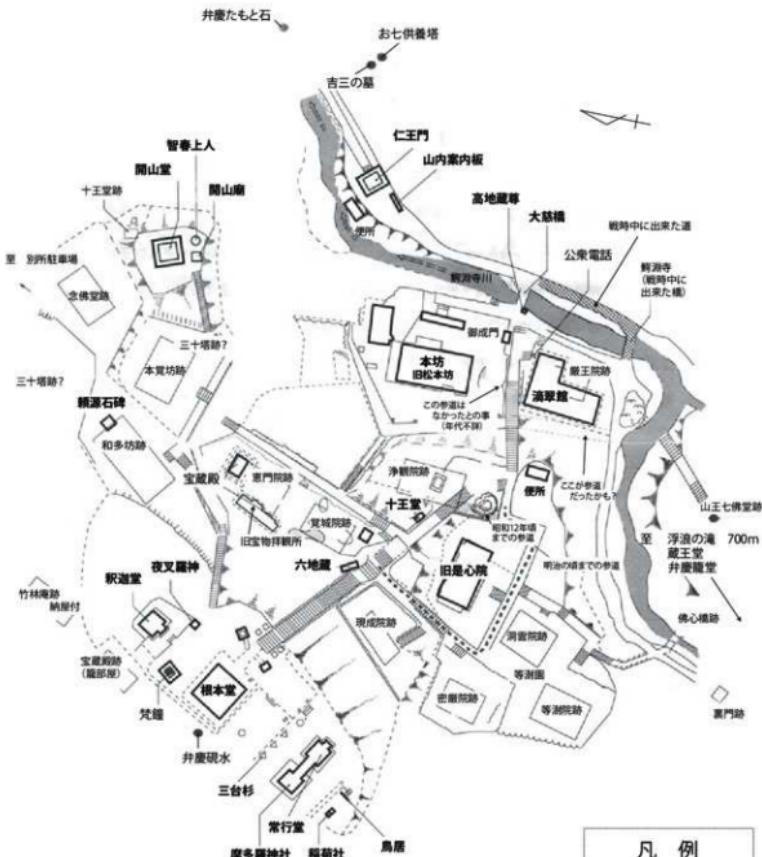
(1) 浮浪山鰐淵寺 1997 「鰐淵寺山内略図」『出雲國浮浪山鰐淵寺』より転載



第 77 図 鰐淵寺境内平面図 (1)



第78図 鰐淵寺境内平面図(2)



第79図 鰐淵寺山内略図

## 第5章 総括

### 第1節 根本堂平坦面の調査成果からみた境内僧坊の様相について

#### 1. はじめに

今回の発掘調査では、根本堂の所在する最上段平坦面を発掘調査することができた。これまで行った分布調査では、最上段平坦面において古代にさかのぼる遺物は採集できず、14世紀代の南院・北院が統一された時期に新たに造成された平坦面であると結論付けた（『前報告書』）。これまで根本堂平坦面の下層には、それほど古い時期の遺構面ではなく14世紀からの比較的新しい遺構面のみと想定していた。しかし、平成29年（2017）から開始した根本堂に隣接するA-5平坦面（護摩堂跡）の発掘調査では古代まで遡る遺構面が存在する可能性がでてきた。ここでは、根本堂平坦面の変遷について検討してみたい。

#### 2. 護摩堂跡（A-5平坦面）・護摩堂前（A-9平坦面）の調査成果

根本堂の正面左側（南側）の護摩堂跡（A-5平坦面）では、16世紀以降の遺構面から護摩堂跡と想定できる礎石の痕跡を確認した。16世紀の後半、戦国期の毛利輝元は、根本堂の再建や護摩堂の建築を行っており、この時期根本堂周辺で大規模な造営が行われた可能性がある。A-5平坦面の第1遺構面ではコビキA瓦や中世土器が出土しており、現在の根本堂を中心とする石垣の基壇はこの時期に造成された可能性が高い。

下層の第2遺構面で確認した14世紀以降の礎石やほぼ同一の高さにある被熱層は炭化物の年代測定によって11世紀の年代が得られている。また護摩堂前（A-9平坦面）においても、被熱層の年代測定の結果が11世紀となっており、古代瓦が出土していることからもA-9とA-5平坦面は、石垣の基壇を造成する前、同一の平坦面として活用されていた可能性が高い。

#### 2. 釈迦堂平坦面の調査成果

釈迦堂平坦面の調査では、造成土中からコビキA瓦が出土している。釈迦堂の屋根は瓦葺きではなく、こけら葺きであったことが判明している。造成土から出土した瓦がどのような建物に使用されたのか、現段階では不明である。

根本堂平坦面は16世紀後半に大規模な造成を行い、その際に釈迦堂周辺も平坦面の拡張を行なつたのではないかと想像する。戦国期以前、根本堂平坦面はもっと狭い平坦面だったのかもしれない。

#### 3. 須恵器の分布

境内分布調査の結果では、11世紀以前の古代須恵器を確認した。開山堂周辺では1段下の平坦面（A-22・23・27・64）から採集でき、また、根本堂平坦面の下段（A-33・39）からも採集している。こ

れは、現在の境内中枢部が比較的早い段階から活用されていた可能性を示している。

#### 4. 堂宇・僧坊の様相

根本堂平坦面の活用について、初期段階の活用が11世紀、鰐淵山時代であり、浮浪滻を中心として活動していた時期、すでに鰐淵寺川対岸、山麓の最も奥まった高い位置にある根本堂周辺を活用していた。須恵器、護摩堂前出土古代の平瓦の年代、炭素の年代測定結果もこの結果を肯定する。久保智康は、「山麓の最も奥まった高い位置に主堂が建てられ、付属建物が前方に展開する。じつはこれが、全国各地で奈良時代から平安時代にかけて数多く営まれた山寺の最も一般的な特色なのである。」としており（久保2012）、根本堂の立地は、全国の山寺共通の特徴として挙げられる。

現在の本堂である根本堂には薬師如来と千手觀音の2尊を祀るが、文治2（1186）の「鰐淵寺古記録写」（文書番号17）に焼失した薬師堂・千手堂の再建記事があり、この時に二院が並立していた可能性が指摘されている。

また、第2期段階は、南北両院が統一された14世紀段階である。護摩堂跡4トレンチで確認した礎石群は、初期段階の遺構面とほぼ同じ高さで遺構を確認している。根本堂平坦面は、初期段階には大規模な造成は行っていないようであり、根本堂や護摩堂にみられる石垣の基壇はなかったと考えられる。

第3期段階は、戦国期である。16世紀後半の毛利輝元による根本堂再建時に大規模な造成を行い、現在のような石垣の基壇の上に根本堂や釈迦堂、護摩堂が建ち並ぶ現在の伽藍ができあがったのではないかと推定する。

『前報告書』で示した造成時期は、最初の大規模な造成である第1期造成（12世紀代）＝井上氏区分の鰐淵寺1期、南北両院が和合統一し、根本堂が建立された時期、第2期造成（14世紀代）＝井上氏区分の鰐淵寺2期、第3期造成（16世紀代）＝井上氏区分の鰐淵寺第2期の末期である。（井上2018）

11世紀のいわゆる鰐淵山時代から根本堂平坦面、現在のA-9・A-10平坦面をベース面とする遺構面は存在していた。また、須恵器の分布から開山堂周辺や密嚴院や等謝院といった根本堂下段の僧坊周辺、松露谷地区（松露谷墓地1群）といった限られた場所での活動があったと考えられる。恐らく12世紀の大規模造成前の状況を示しているのであろう。

僧坊・中心堂宇の関連性について、国指定前の内容確認調査では、和多坊や坊名が不明な等謝院南区、鰐淵寺川南側の川南区での遺構確認など僧坊関連遺構の存在が明らかとなった。また、文献史料では本覚坊は僧坊のなかでもっとも古い時期12世紀後半期、永万元年（1165）の史料が確認できる。本覚坊の発掘調査の結果では、須恵器のほか、古代から近代に至る遺物が出土している。これは、鰐淵寺境内地の中核地区における土地的制約のなかで、根本堂を中心とする堂宇を、山の奥、最上段に根本堂に造り、根本堂よりも低く山を下った位置に和多坊や本覚坊など中心となる僧坊を造り出していくためだろう。鰐淵山の浮浪滻を中心とする修行の場から延暦寺の末寺としての浮浪山鰐淵寺に変化したことに対応しているのではないか。

（石原聰）

#### 註

井上寛司 2018 「解説」「出雲鰐淵寺旧蔵・関係文書」法藏館

久保智康 2012 「宗教空間としての山寺と社—古代出雲を例に—」『季刊 考古学』第121号 雄山閣

## 第2節 恵門院跡・覺城院跡の造成方法について

恵門院跡・覺城院跡（A-32 平坦面）の調査は、「根本堂平坦面（A-1 他）の下段にあたり、根本堂平坦面造成時の残土を利用して平坦面とした可能性があり、その形成時期を確認する」ことが調査目的であった。この平坦面の場所は、谷状の地形に見えることから、上段の平坦面造成で発生した残土を、下側に落としながら谷を埋める方法は、平坦面を造成する手法としては一般的な工法と思われる。

しかし、地山が地表から 0.15～1.1 m で確認されたことにより、この想定とは異なる結果となった。元々、斜面であった場所を、切った土を用いて斜面下側に盛ることによって平坦面を造成したと判断できたことから、当初想定していた上段（根本堂平坦面）の残土とは無関係で造成されたことが明らかとなった。

盛土部分は、平坦面の東側先端に残存すると思われるが、今回の調査では、石段部分にトレーナーを設定したため盛土の確認を行っていない。今後、恵門院跡あるいは覺城院跡のいずれかにおいて盛土の状態を確認する必要があると考える。

また、平坦面東側の石垣は覺城院側で約 5 m、恵門院側で約 4.4 m の高さである。織豊期にはこのような高さの石垣を作る技術はないと言われている（中井 2019）。

石垣の表面を観察すると、地表面から 1.5～2.0 m 付近までは比較的大きな石が積まれ、それより高い位置は小さな石が積まれている。この境には明確な横目地は見当たらないが、不整合であることから石垣の積みなおしの痕跡とみることも可能と考える。その場合、平坦面の高さは現在と同じだったとすると、石垣は 2 段積みにすることで高さを確保したものと想定する。

その後、2 段積みの石垣を 1 段積みに大改修したものが、現在の石垣ではないかと思われる。たとえば、橋本坊から恵門院へ、大福坊から覺城院へ僧坊名が変わった 18 世紀中頃に、石垣を大改修したと考える。このことは、絵図 A と絵図 B の石垣表現の違いにも反映されているのではないだろうか。

なお、石段 SX3204 は、明治 38 年（1905）に恵門院が焼失した後に、石段の石材を抜き取り、その後、火事で発生した焼失材や炭化物を廃棄し、石段を埋めたものと思われる。

A-32 平坦面の造成方法は、切土と盛土によるものであるが、今後、東端の石垣にも注目し、平坦面東端での盛土の確認と、石垣の積み直しの痕跡や裏込石の有無の確認が必要と考える。

（原 俊二）

### 参考文献

- 中井均 2019『戦国時代における石垣技術の考古学的研究』平成 28～31 年度学術研究助成基金助成金基盤研究（C）  
（一般）研究成果報告書（課題番号 16 K 03160）兼 織豊期城郭研究会 2019 年度彦根研究集会資料集

### 第3節 開山堂周辺の古代遺構や三重塔について

開山堂での調査目的は、「開山堂周辺では、古代須恵器が発見されていることから、鰐淵山成立の原点であった可能性がある。また、江戸期の絵図には、周辺に三重塔が描かれていることから、その遺構を探求する。」ことであった。

古代の須恵器については、開山堂では前回同様、平坦面の南端斜面で須恵器の壺片を表探すことができたが、古代の遺構に結びつくほどの量や内容ではなかった。

一方、本覚坊跡では、今まで壺片のみが採集されていたため、須恵器は単に貯蔵具としての利用のみが考えられていたが、今回、長頸壺や短頸壺などが初めて見つかったことにより、須恵器を幅広く利用していた可能性が出てきた。これらの壺類は、仏具として利用されていた可能性も考えたい。

しかし、いずれの場所も、遺構は確認できないため、須恵器が出土する理由は不明のままである。また、三重塔に関係すると思われる遺構や遺物は、開山堂・本覚坊跡いずれも確認できなかった。

ただし、今回の調査では開山堂を中心として平坦面全域を調査対象としたことにより、開山堂が建つ独立丘陵上の平坦面造成方法が明らかとなった。まず、不整地な地山の上に赤褐色粘質土（本瓦片が混じる）で造成した後、建物を中心に約18m×約15mの範囲で堀込地業を行い、この範囲を三和土で整地する、という造成方法が明らかとなった。そのため、完成時の建物周辺の地表面は、白色の三和土で整地されていたことが判明した。寺の開祖である智春上人を敬う開山堂ならではの、非常に丁寧な造りと思われる。

なお、今回の埋め戻しに際しては、三和土による復旧はしていない。今後、掘削調査をする場合は、三和土の復旧などの配慮が必要と思われる。

また、柱穴をいくつか確認した。そのうち、IAトレンチのSP2804が、現在は設けられていない向拝の柱跡の可能性を考え、対応する位置にIEトレンチを設定した。しかし、SP2805を確認したものの、対応する柱穴とは考えられなかった。

IA・IEトレンチいずれの柱穴も、埋土が3層であることから、これらの柱穴は、3層に含まれるコビキAの瓦の年代よりも古い時代の遺構の可能性が考えられる。

開山堂背面の4トレンチの溝からは瓦がまとめて出土した。いずれもコビキAの瓦であることから、16世紀以前の年代が考えられる。また、炭の年代測定においても、近い年代が得られた。

現在の建物は19世紀初頭かそれ以前の年代とされているが、これらの瓦が葺かれていたとは考えにくい。江戸時代後期とされる絵図（絵図A）には開山堂の屋根には縦線が表現されており、瓦葺きを想定させる。しかし、瓦の出土量が少ないことから、棟など限られた場所に用いられたと思われ、16世紀以前に一部瓦葺きの建物が建てられていた可能性が出てきた。

また、本覚坊跡でも三重塔の遺構は確認できなかったが、国宝殿がほぼ原形のまま確認できたことや、最後の本覚坊の東側縁石が確認できたことは成果と考えられる。

国宝殿は、新しい建物のうえ、最近まで使われていた建物であることから、良好な残り具合であった。一方、最後の本覚坊は、国宝殿建設時に礎石等が除去されたことから、ほとんど現存せず、唯一、

東側の縁石のみが現存していた。縁石を拠り所として本覚坊の平面図に現成院の礎石配置図を重ね合わせて復元（第80図）すると、平坦面の全面を用いて建てられていた可能性や、間取りの復元にも応用できるものと考える<sup>(1)</sup>。

さらに、堂舎の中でももっとも古い僧坊であることから、建て替えが幾たびも行われてきた痕跡を被熱層などから確認することができ、700年余りの歴史が重層的に堆積していることが明らかとなつた。これらの年代は、古代の須恵器からセメント瓦まで混在することから特定できていない、今後、資料サンプルの年代測定を進め、今後の調査時の資料としたい。

(原 俊二)

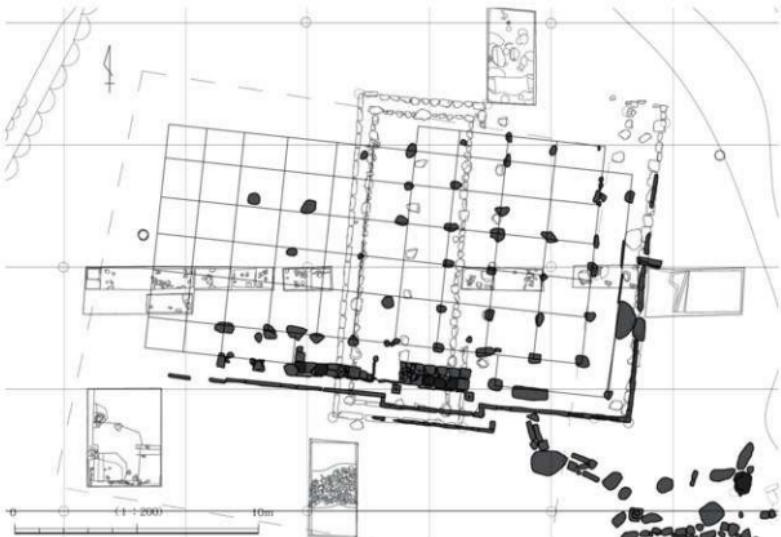
### 註

- (1) 明治20(1887)年の『明細帳』に本覚坊の規模が記されており、桁行10間3尺(18.9m)、梁間4間3尺(8.1m)だったことがわかる。また、同書によれば現成院も同規模とわかる。現成院(A-33平坦面)は、前回調査で礎石配置図を作成していることから、最後の本覚坊の縁石に、現成院の礎石配置図を重ね合わせることで、本覚坊の様子を推定することが可能と考える。なお、本覚坊は、明治43年(1910)までには滅失していることから、この『明細帳』に記された内容は、最後の本覚坊の姿を示していることになる。

### 参考文献

池橋達雄 1997 「三近現代の鰐淵寺 2 明治・大正・昭和戦前期の鰐淵寺」『出雲國浮浪山鰐淵寺』 淳浪山鰐淵寺

鰐淵村役場「明治四十三年度務部雑感」出雲市立平田図書館蔵



第80図 本覚坊跡 平面図（現成院合成図）

## 第4節 新たに出土した軒平瓦2種について

今回の調査で、新たな型式の軒平瓦が2種類出土した。前回報告の瓦の検討成果（花谷 2015）をもとに瓦の年代等を位置づけてみたい。

新たな形式は、中心飾りに宝珠紋を持つ三回転唐草紋軒平瓦1種と、同じく宝珠紋の四回転軒平瓦1種である。

### 1. 三回転唐草紋軒平瓦（第81図）

三回転唐草文軒平瓦は、開山堂の背面に設定した4トレンチの溝SD2802から出土した。

中心飾りの宝珠紋は線で表現するもので、唐草紋は宝珠の肩から出て、連接しながら上下上の順に回転する。紋様の線は細く鋭い。内区には界線は無い。上外区の厚さは1.7cm、下外区の厚さは1.0cmである。脇区の幅は0.5～1.4cmと狭い。瓦当面の両端は外側に開くのに対し、内区の両端は内側に傾く。瓦当面上部は面取りをほどこす。

前回調査で出土した同紋の瓦は、A-23平坦面から1種類出土している。この平坦面は、本覚坊跡の北側で、念仏堂跡や念仏塔などの平坦面の南側に位置しており、両平坦面より約3m高い場所である。

瓦は「唐草紋は各単位が連接する。瓦当の上縁をヘラケズリで大きく面取りする。顎は貼り付けか。顎の後縁に面取りではなく、顎と凸面との間には凹型台の圧痕がある。脇幅3.5cm。」とする。

両者を比較すると、まず、瓦当部の高さと幅の違い、脇区の幅の違いが目につく。しかし、紋様は両者とも鋭い線で表現されており、よく似た印象を受ける。

瓦当部については、高さは前回瓦4.6cm、今回瓦5.7cmで、今回瓦が一回り大きい。また、脇区の幅は、前回3.5cm、今回0.5～1.4cmと、今回瓦が狭い。

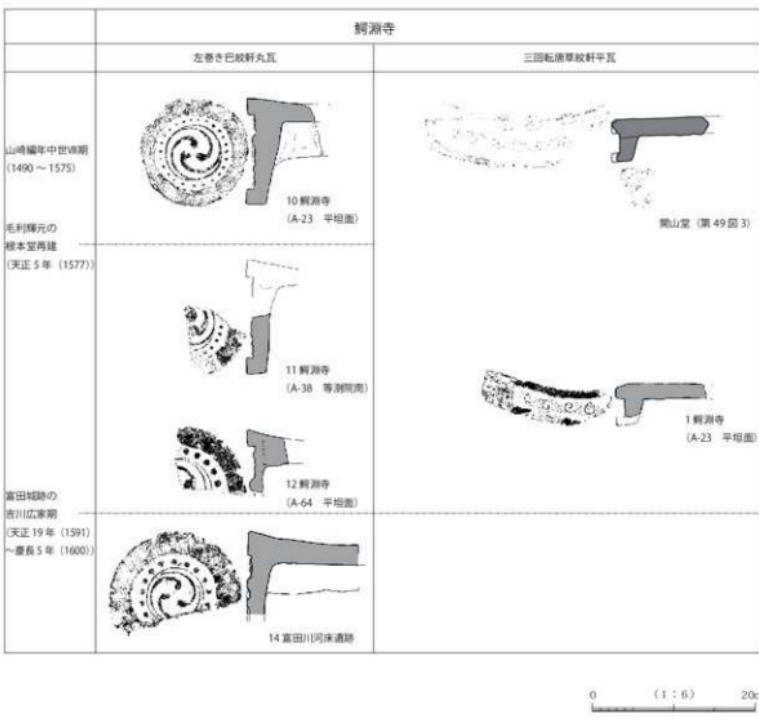
これらの特徴から両者の前後関係を考えると、今回瓦が前回瓦より古い様相であることがわかる。

三回転唐草紋軒平瓦と左巻き巴紋軒丸瓦については、前回報告で瓦の変遷を示されている。左巻き巴紋軒丸瓦については、10→11→12と変遷し、三回転唐草紋軒平瓦が11・12と組み合うというものである。

今回瓦の年代は直接導き出せないが、前回瓦の年代は、同年代と考えられている左巻き巴紋軒丸瓦(11・12)の年代からすると、毛利輝元による根本堂再建(天正5年(1577))の時期よりは新しく、吉川広家期の富田城(天正19年(1591)～慶長5年(1600))の瓦に近い、とも考えられている。のことから今回瓦は、この年代より古い年代となる。

一型式古い瓦は、10の左巻き巴紋軒丸瓦(山崎編年中世Ⅶ期(1490年～1575年))であるが、この瓦と軒平瓦の出土地が異なることから、単純に同年代と決められないうえに、組み合わせも慎重に検討しなければならないと思われる。

しかし、今回の瓦の出土によって三回転唐草紋軒平瓦と左巻き巴紋軒丸瓦の変遷について、見通しを立てることができたと思われる。



第81図 三回転唐草紋軒平瓦

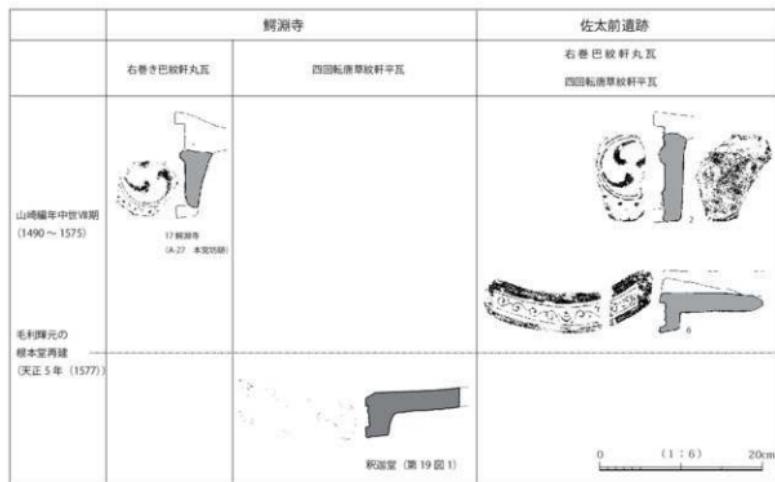
## 2. 四回転唐草紋軒平瓦 (第82図)

四回転唐草紋軒平瓦は、釈迦堂の基壇三和土直下から出土した。この紋様瓦は鰐淵寺では初出土である。

中心飾は大きく欠損しているが、わずかに残った痕跡から宝珠紋と判断した。宝珠紋は線で表現するもので、唐草紋は宝珠の下側から出て、途切れながら下上下上の順に回転する。紋様の線は細く鋭い。内区には界線は無い。上外区の厚さは1.0cm、下外区の厚さは1.2cmである。脇区の幅は4.8cmで広い。脇区には木型の跡が残る。瓦当面上部は面取りをほどこす。頸は曲線頸である。

この瓦と同紋瓦が佐太前遺跡から出土しており、前回報告においても花谷(2015)により詳細に検討されている。

「佐太前遺跡出土の四回転唐草紋軒平瓦は、立体表現の宝珠紋を中心飾りとする4回反転均整唐草紋で、唐草紋は連接する。内区周囲に圈線があるが、范型の切り縮めによって左側には圈線がない。外縁は高さ0.8cm、脇幅は1.6cm、瓦当部は顎貼り付け手法による成型と推測され、凸面の頸段部に



四型台の圧痕がある。凹面はヨコヘラミガキ調整で、一部に布圧痕が残る。」とする。

両者を比較すると、まず、内区では佐太前遺跡瓦の中心飾りが立体的で、唐草紋は連接するのに対し、今回瓦は中心飾りが線表現で、唐草紋も連接しない。また、圓線も佐太前遺跡瓦には有るもの、今回瓦には無い。外区については、脇区の幅が佐太前遺跡 1.6cm、今回 4.8cm と、今回瓦が広い。

これらの特徴から両者の前後関係を考えると、今回瓦が佐太前遺跡瓦より新しい様相であることがわかる。

佐太前遺跡の四回転唐草紋軒平瓦は、右向き巴紋軒丸瓦と組み合うことから、鰐淵寺も同様と考える。

鰐淵寺の右巻き巴紋軒丸瓦は、佐太前遺跡の右向き巴紋軒丸瓦（山崎編年中世Ⅷ期（1490 ~ 1575））と四回転唐草紋軒平瓦と同年代と考えられていることから、鰐淵寺の四回転唐草紋軒平瓦が佐太前遺跡のそれよりも新しい様相であるならば、毛利輝元による根本堂再建（天正5年（1577））の時期よりは新しい年代と推定される。

鰐淵寺の四回転唐草紋軒平瓦と右巻き巴紋軒丸瓦は年代が異なることになり、それぞれに組み合う丸瓦は、現時点では未確認である。しかし、これらの瓦が2時期にわたって用いられていたことは明らかとなった。

中近世瓦の資料が限られている中、出雲地方の中世瓦について大きな見通しを示した前回の花谷（2015）報告をもとに、今回出土の資料の位置付けを試みた。鰐淵寺においては軒丸瓦・軒平瓦ともに出土数が少ないため、十分な検討は難しい状況である。今後の資料の増加に期待したい。

（原 俊二）

#### 参考文献

花谷浩 2015 「山陰の中世瓦からみた鰐淵寺」『前報告書』

## 第5節 まとめ

今回の調査は、平成28年3月に国史跡となった鰐淵寺境内において、平成29年度から令和2年度まで実施した境内の遺構確認調査である。この調査は、『前報告書』及び『保存活用計画』で課題とされた3項目について明らかにするためのものであった。ここに改めて今回の調査成果をまとめておきたい。

### 1. 精迦堂の調査

解体修理工事に合わせ基壇及び基壇周辺の調査を行った。

基壇からコビキAの瓦が出土したことから、基壇造成年代は16世紀以後の年代が想定される。しかし、建物の建築年代が寛文4年（1664）と考えられていることから、基壇の造成年代と数十年以上の開きが出ることになる。現在の精迦堂以前に建物があったのかどうか、慎重に検討が必要であると考える。

基壇周辺の調査では、西側で石組み溝を確認した。北側（背面）では明確な排水施設は認められず、排水は地面の傾斜による自然排水であったと推定する。今回、建造物修理に併せ、西側の石組み溝と北側の縁石外側を円碟で充填し、流路が土砂や落ち葉で埋没しても排水機能が続くように応急処置を行った。

### 2. 護摩堂跡・護摩堂前の調査

護摩堂跡では、4つの遺構面を確認した。

第1遺構面は、石垣平坦面上で確認した。礎石（抜取穴）の配列から3間四方の宝形造の建物と判断した。江戸時代後期の絵図Aに描かれた護摩堂と考えられる建物である。

第2遺構面と第3遺構面は、石垣平坦面の造成土の中で確認した。両遺構面は護摩堂西側の護摩堂前平坦面の地表面とほぼ同じ高さであるが、第2遺構面で確認した礎石や集石遺構は第3遺構面を掘り込んでいることや、炭素による年代測定結果を考慮し第3遺構面と区分することとした。礎石掘形の炭素年代から14世紀の年代を得た。この年代は、鰐淵寺三大大火の2番目、嘉暦元年（1326）の大火の年代に近いことから、関連する可能性が考えられる。

第3遺構面は、被熱層で炭化物を含む層である。炭素の年代測定から11世紀前後から12世紀中頃の年代を得た。遺構は確認できなかった。

第4遺構面は、現在の地表面よりさらに下層で確認した。土層断面の確認のみである。炭素の年代測定では9世紀末から12世紀中頃の年代を得た。

護摩堂前では、瓦敷き石組み溝を確認した。5トレンチでは逆L字状に石が組まれ、6トレンチ方向に向かって徐々に底を深くしながら延びる。排水口は、平坦面端の斜面と思われる。底には瓦が敷かれており、瓦は中世瓦を再利用したものと考えられる。

また、5トレンチの南側サブトレンチで、被熱層を2層確認した。下層のみ炭素の年代測定を行い、

11から12世紀の年代を得た。この被熱層より上層で、古代の平瓦を確認した。

これらの被熱層の対応関係は、護摩堂跡第3遺構面と護摩堂前上層が対応し、護摩堂跡第4遺構面と護摩堂前下層が対応するものと考える。

のことから、護摩堂跡と護摩堂前は、本来一体の平坦面であったものと考える。その場合、14世紀と考えられる第2遺構面で確認した礎石等が、当時の建物と推定する。

その後、16世紀に毛利元就によって根本堂や護摩堂などが建てられるときに、石垣を築き一段高い場所に新たな平坦面を造成し、第1遺構面で確認した位置に護摩堂を立てたものと推定する。

根本堂平坦面の造成は、炭素の年代測定結果や古代瓦の出土により、11・12世紀頃まで遡る可能性が出てきた。従来から考えられていた南北両院の統一により根本堂平坦面が造成されたとする考え方は再検討が必要と考える。このことは、第5章第1節にあるように、古代の山寺はまず最上段に中心とする建物が建てられ、その後、標高の低い場所に僧坊が建てられていく傾向があるとするが、文献史料に乏しい鰐淵寺（鰐淵山）の初期の実態に迫れる可能性が出てきた。

### 3. 開山堂の調査

開山堂は、基壇の一部と平坦面の調査を行った。

基壇内からコビキAの瓦が出土したが1・2点であることから、混入品と考えられる。平坦面の調査では、造成方法が明らかとなった。地山（赤色粘質土）・造成土（赤色粘質土・コビキA瓦混入）・整地土（三和土）の順に造成をしており、完成時、開山堂の四周の地表面は白色（三和土）であったものと思われる。

また、開山堂の東側（背面）で、雨落溝を確認した。底部にはコビキA瓦が堆積していた。炭化物の年代測定により16世紀中頃から17世紀中頃の年代が得られた。

ところで、石段を上り詰める手前の西側（左側）で、コビキAの瓦が採集出来る瓦集中地点があり、その近くには岩が露出している。平坦面の1Dトレンチ西端と、この岩を結ぶ直線上は明瞭な段差も付く。また、岩の天端の高さと各トレンチで確認した地山の高さとはほぼ同じである。

のことから、これらは、開山堂が幕末にこの場所に移動する前にあった古い遺構の名残ではないかと推定する。その場合、平坦面で確認した一連のピットも関連するものと考えられる。

### 4. 本覚坊跡の調査

本覚坊跡では4つの遺構面を確認した。

第1遺構面は地表面で確認した。明治43年（1910）以降に建てられたと考えられる旧国宝殿と明治20年（1887）以降に焼失した最後の本覚坊である。旧国宝殿の遺構は、ほぼ完全な形で確認した。最後の本覚坊は、旧国宝殿建設の影響で東側縁石のみを確認した。

第2遺構面では、礎石や礎石下の根石と思われる小石を確認した。出土遺物も古代の須恵器から近現代の陶磁器や瓦まで混在しているため、年代の特定までには至らなかった。

第3遺構面でも、2トレンチで溝と、4トレンチで石敷き溝を確認した。他のトレンチでは、礎石

や根石状の小石を確認した。江戸期の瓦が出土しているが、年代の特定までには至らなかった。

第4遺構面は、深掘部分での確認となった。礎石を確認した。遺物も確認出来なかった。

調査は限られた面積のトレンチ調査であったため、遺構の広がりまでは確認できなかった。

また、遺構面と遺構面の間で被熱層を確認したが、炭化物の年代測定を行っていないため、年代を推定する手掛かりは得ていない。

第1・第2遺構面は後世の擾乱が著しいが、それより下層では遺構が比較的良好に残っている可能性が考えられる。

さらに、東側の石垣は2段に積まれているが、このような石垣は、境内でも稀である。この2段に積まれた石垣が、当初からのものなのかどうか、今後調査が必要と考える。

## 5. 恵門院跡・覚城院跡の調査

恵門院跡・覚城院跡では、平坦面造成方法を確認した。地表面から比較的浅い場所で地山を確認したことから、想定されていた盛土による造成ではないことが明らかとなった。

また、石段の埋没状況を確認した。石材は抜き取られた後に埋められていたが、埋土は炭化層が明瞭であることから、恵門院の火災の片付けと関係する可能性がある。

今回の調査は、3つの課題を解決するためのものであったが、その課題に対しては以下の結果となった。

根本堂平坦面の造成時期については、想定より古い時期から利用されていた可能性が出てきた。今後、慎重な検討が必要である。

恵門院跡・覚城院跡の平坦面造成方法については、地山が浅い場所で確認できたことから、根本堂平坦面造成時の残土による埋め立てではないことが明らかとなった。

開山堂周辺での古代遺構の確認については、今回調査面積が限られていたこともあり、明確な遺構は確認できなかった。今後、面的な発掘調査が必要と考える。

平成29年度から令和2年度までの4年間の発掘調査を通じて改めて境内の遺構や遺物の保存状態の良さを再認識した。今後は発掘調査に加え石垣調査や近世・近代の文献調査など計画的な調査を継続することで、新たな発見があり史跡の価値が高まるものと思われる。 (原 俊二・石原 啓)

### 参考文献

出雲市 2018『史跡鰐淵寺境内保存活用計画書』



## 出土遺物観察表

## 聖堂 瓦

井戸 番号	開削 番号	トレンチ 名	遺構 名	層位	種別	文様	計測値 (cm)			重積 (g)	備考
							長さ	幅	厚さ		
21	1	26	1トレ	JB-c4	三和土	軒平瓦 直下2層	軒平瓦	四脚輪 唐草紋	瓦当 4.8	— 3.8	(690.0) 脇区幅 5.3cm 木型瓦あり
	2	26	2トレ	JB-c5	三和土中	平瓦	—	(13.0) (22.0)	(2.3)	(338.4)	横端部
3	26	2トレ	JB-b5	三和土中	平瓦	—	(21.4) (15.0)	2.5	(968.0)	正面部	
4	26	2トレ	JB-3-3 SD301	三和土 直下2層	軒丸瓦	瓦脊 4.2	—	(2.7)	(139.4)		
5	26	1トレ	JB-c4	丸瓦	—	—	(5.7)	—	(174.9)	コビキ瓦	
6	26	向洋東 東側	礎石下	造成土	丸瓦	—	(25.9)	16.0	(2.5)	(1809.3) コビキ瓦	
	7	26	1トレ 溝中西端	JB-c4	軒瓦 小丸瓦の 文字	直径 8	—	1.3	(151.0)	輪瓦 赤色石州瓦	

## 溝跡堂跡 陶磁器・土器

井戸 番号	開削 番号	トレンチ 名	遺構 名	層位	種別	文様	計測値 (cm)			胎土	焼成	調整	色調	備考	
							口径	底径	器高						
27	1	26	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	7.8	4.7	1.8	善	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	に赤い黄緑	鉄溶物付着
2	26	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	7.6	4.95	1.8	善	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	内面：に赤い 外面：に赤い黄緑		
3	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	6.8	3.1	1.8	密	良好	内面外面底部：ナデ	浅黄緑	手づくねか	
4	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	7.5	5.2	1.9	密	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切りナデ？	に赤い黄緑		
5	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	碗	—	4.2	2.3	蜜	良好	内面：ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	浅黄緑	底部に板の跡？あり	
6	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	9.3	4.3	2.55	密	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	内面：に赤い黄緑 底部：回転糸切り 外面：灰白		
7	—	1トレ	SK502	北サブトレ	土師器	皿	10.9	5	2.75	密	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切り？	相		
8	26	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	碗	11.3	5	3	密	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切りナデ消し	浅黄緑		
9	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	10.4	5.4	2.6	密	良好	内面外面：回転ナデ	相		
10	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	11.3	6	2.45	密	良好	内面外面：回転ナデ	内面：に赤い 外面：に赤い黄緑		
11	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	4.6	—	密	良好	内面外面：ナデ？	に赤い植 7.5	底部外面段あり	
12	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	4.2	—	密	良好	全体的に崩滅	内面：浅黄緑 外面：浅黄緑	手づくねか	
13	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	4.8	—	密	良好	内面外面：回転ナデ？	に赤い黄緑	ススが付着 底部外面内凹	
14	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	6.5	—	密	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	内面：相 外面：浅黄緑	底部外面段あり	
15	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿 (脚付)	—	—	1.8	密	良好	底部：回転糸切り	内面：相 外面：	糸切り後脚部を貼り つけた	
16	—	清掃時	SK502		土師器	皿	—	4.4	2.3	密	良好	内面外面：回転ナデ 底部：回転糸切りナデ	相		
17	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	5.6	—	密	良好	内面底部：回転ナデ 外面：ナデ？上付 底部：回転糸切り	相		
18	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	5.2	—	密	良好	内面外面：回転ナデ 底部：静止糸切り	相		
19	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	5.4	—	密	良好	内面：回転ナデ 外面：更に向付のナデ	浅黄緑		
20	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	—	6.2	—	密	良好	内面：織ナデ 外面：ナデ？上付 底部：回転糸切り	内面外面：相 底部：に赤い相	底部外面ナデ消し	
21	26	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	7.5	3.4	1.4	密	良好	内面外面底部：手づくね	に赤い黄緑		
22	26	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	豆明皿	7.8	4	1.55	密	良好	内面外面底部：手づくね	内面：浅黄緑 外面：浅黄緑	ススが付着 底部に指サエあり	
23	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	皿	7.5	1.3	1.3	密	良好	内面外面底部：手づくね	外面：浅黄緑		

24	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	直	11.8	—	1.6	密	良好	全体的に均質	浅黄褐	手づくね、口拂
25	—	清掃時	SK502		土師器	直	11.1	5.6	1.9	密	良好	内面：回転ナデ 全体的に均質	粗 粒 7.5	手づくねか
26	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	直	14.4	—	—	密	良好	内面外面：ナデ？	に赤い黄褐	手づくね、口拂
27	—	1トレ	SK502	炭化層中	土師器	直	15	8.4	2.2	密	良好	内面外面部：手づくね	浅黄褐	
28	—	1トレ	SK502	炭化層	土師器	直	13.5	—	1.9	密	良好	内面：斜め方向のナデ 外面：回転ナデ	に赤い黄褐 鉛灰	手づくね、口拂
29	26	1トレ	SK502	炭化層中	備前焼	輪花跡	(18.0)	—	(7.1)	密	良好	内面：回転ナデ 外面：回転ナデ ナデ	内面：明赤褐色 外面：暗赤褐色	骨は7付以上

### 満摩堂跡 瓦

擇別 番号	開版 番号	トレンチ 番号	遺構 グリッド	剖位	種別	文様	計測値 (cm)			重量 (g)	備考		
							長さ	幅	厚さ				
28	1	27	1トレ サブトレ	SK502 k845		軒丸瓦	左巻三 巴紋	(13.5)	—	2.3	(457.0)	外縁幅 1.8cm	
2	27		SK502 k845			軒丸瓦	左巻三 巴紋	(8.6)	—	2.5	(238.0)	外縁幅 2.7cm	
3	27	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒丸瓦	左巻三 巴紋	—	—	(1.0)	(119.0)	外縁幅 2.4cm	
4	27	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒丸瓦	—	(4.0)	—	—	(118.0)	外縁幅 2.5cm 剥離面に卯み日あり	
5	27	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒丸瓦	—	—	—	(1.7)	(216.0)	外縁幅 2.8cm 剥離面に卯み日あり	
6	27	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒丸瓦	—	—	—	—	(216.0)	剥離面に卯み日あり	
7	27		SK502 k846	上層		軒丸瓦	—	(9.2)	15.9	2.3	(616.0)	瓦当面が剥離し、丸瓦状態 コビキ A	
8	27	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒平瓦	唐草紋	(4.2)	(9.6)	2.1	(106.0)	瓦当面が一部剥離	
9	27	2トレ	SK502 k849			軒平瓦	四列転？ 唐草紋	—	4.8	(13.6)	2.7	(273.0)	幅 5.3cm
10	27	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒平瓦	三列転？ 唐草紋	(3.1)	(7.2)	2.7	(75.0)		
11	28	1トレ サブトレ	SK502 k845			軒平瓦	唐草紋	(1.9)	(7.6)	—	(249.0)		
12	27	1トレ	SK508			軒平瓦	唐草紋	(3.9)	(6.0)	2.4	(93.0)	剥離面に卯み日あり	
29	1	28	1トレ サブトレ	SK502 k845	炭化層中	丸瓦	—	(17.9)	15.1	3.0	(1139.5)	コビキ A	
2	28	1トレ 北せびトレ	SK502			丸瓦	—	(20.5)	16.1	3.1	(150.1)	コビキ A	
3	—	2トレ	k8j9	表土		軒丸瓦	—	(4.6)	—	(1.4)	(49.0)	外縁幅 (2.4) cm	
4	28	1トレ	k8j6	2層		軒丸瓦	—	(3.5)	—	2.5	(98.0)	外縁幅 (2.5) cm	
5	—	1トレ	k8i6	2層		軒丸瓦	—	(5.0)	—	(3.0)	(60.0)	外縁幅 (1.0) cm	
6	28	1トレ	18-a6			軒丸瓦	七宝紋？	(4.0)	—	(0.8)	(139.0)	外縁幅 1.5cm	
7	28	2トレ	k8i10	表土		軒平瓦	宝珠紋 唐草紋	(2.9)	(9.4)	2.5	(81.0)		
30	1	28	4トレ		3層上面	丸瓦		33.3	16.1	2.5	(2032.0)	コビキ A	
2	29	4トレ		3層上面	丸瓦		33.5	17.0	3.0	(2262.0)	コビキ A		
31	1	29	1トレ	k8j9	2層	鬼瓦		(8.2)	(5.0)	(4.4)	(100.0)	黒 紋を赤く着色 記を表現する	
2	29	2トレ	k8j9	表土	鬼瓦		(9.3)	(15.1)	(6.1)	(532.0)	下額 紋を赤く着色 記を表現する		

### 満摩堂跡 金属製品（鉄釘）

擇別 番号	開版 番号	トレンチ 番号	遺構 グリッド	剖位	器種	計測値 (cm)	備考					
							全長	頭部幅	脚部厚			
32	1	30	1トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	4.4	0.8 0.5	0.3 0.3			

	Z	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	3.4	0.9 0.5 0.3	0.4 — —	
	3	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	3.5	—	0.4 — —	
	4	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	3.7	0.8 0.5 0.3	0.3 — —	
	5	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	5.5	0.8 0.5 0.3	0.4 — —	
	6	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	4.8	0.8 0.7 0.3	0.3 — —	
	7	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	5.1	1 0.7 0.3	0.4 — —	
	8	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	4.8	0.8 0.6 0.3	0.3 — —	
	9	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	9.6	1 0.5 0.3	0.5 — —	
	10	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	8.5	1.2 1 0.5	0.5 — —	

#### 護摩堂跡 金属製品（銅製品）

測定番号	開底番号	トレンチ	遺構	層位	器種	計測値 (cm)			備考	
						全長	幅	厚		
32	11	30	I トレ	SK502	炭化層中	銅製品	4.6	3.7	0.3	
	12	30	I トレ	SK502	炭化層中	銅溶物	6.7	3.1	2.1	
	13	30	I トレ	SK502	炭化層中	銅製品か	2.5	1.7	1.0	
	14	30	I トレ	SK502	炭化層中	銅製品か	4.2	1.4	1.4	
	15	30	I トレ	SK502	炭化層中	鉄釘	1.3	0.5 0.2 0.2	0.2 0.2 0.2	全体的に錆青

#### 護摩堂跡 鉄滓

測定番号	開底番号	トレンチ	遺構	層位	器種	計測値 (cm)			備考	
						全長	幅	厚		
32	16	30	I トレ	SK502	炭化層中	楕形滓	9.2	10.4	4.4	
	17	30	I トレ	SK502	炭化層中	楕形滓	5.0	5.4	2.2	
	18	30	I トレ	SK502	炭化層中	楕形滓	4.8	5.2	3.8	

#### 護摩堂前 瓦

測定番号	開底番号	トレンチ	遺構	層位	種別	文様	計測値 (cm)			備考
							長さ	幅	厚	
31	3	30	I トレ サブトレ	10 個直上	平瓦		(14.1)	(13.0)	1.8	古代瓦 古面開口 背面は風化が著しい

#### 開山堂 陶磁器・土器

測定番号	開底番号	トレンチ	遺構	層位	種別	器種	計測値 (cm)			備考
							口径	底径	器高	
48	1	31	4 トレ		3層	白磁	—	—	—	密 良好
	2	31	5 トレ		2層	青花	直	(17.8)	(9.8)	2.9 密 良好

#### 開山堂 瓦

測定番号	開底番号	トレンチ	遺構	層位	種別	文様	計測値 (cm)			重量 (g)	備考	
							長さ	幅	厚さ			
43	1	32	基壇内 南東縁石		丸瓦		(7.1)	(5.5)	2.1	(173.0)	コピキA 工事中発見	
49	1	32	4 トレ	SD2802	軒丸瓦	巴紋	(4.2)	—	(2.3)	(20.7)		
	2	32	2 トレ		2層 赤土	軒平瓦	唐草紋	(3.1)	(5.7)	(2.0)	(39.7)	
	3	32	4 トレ	SD2802	軒平瓦	宝珠紋 三輪紋 唐草紋	4.8	(23.0)	2.5	(10915)	剥離面に削み目あり	

4	32	4トレ	3層		丸瓦	(15.1)	(8.8)	3.0	(363.5)	コビキ瓦
5	31	4トレ	SD2802		丸瓦	(17.8)	(8.1)	2.0	(490.5)	コビキ瓦
6	32	4トレ	SD2802		平瓦	(21.2)	22.0	2.2	(526.0)	
50	1	31	両斜面	表採	丸瓦	30.0	12.7	2.1	(1700.0)	

## 開山堂 金属製品（鉄製品）

井筒 番号	国取 番号	トレンチ グリッド	透構 グリッド	層位	器種	計測値 [cm]			備考	
						全長	幅	厚		
43	2	—	基壇内 北東角		手鍼	23.3	3.1	1.8	工事中発見	

## 本観跡 藻磁器・土器

井筒 番号	国取 番号	トレンチ グリッド	透構 グリッド	層位	種別	器種	計測値 [cm]			色調	備考
							13径	底径	器高		
63	1	33	建物2北側	表土	白磁	碗	(17.5)	(2.7)	—	黒	良好
	2	33			白磁	碗	(17.2)	(2.4)	—	黒	良好
	3	33			白磁	碗	—	(8.5)	(1.0)	黒	良好
	4	33	8トレ	1層	白磁	碗	(15.3)	—	(2.2)	黒	良好
	5	33	6トレ		白磁	小皿	11.5	—	(2.2)	黒	良好
	6	33	7トレ	1層 表土	白磁	菊皿	12.5	6.3	3.1	黒	良好
	7	33	2トレ	1層 表土	青磁	小型瓶	—	3.2	(2.0)	黒	良好
	8	33	建物2 中央右直	表土	青磁	小皿	—	—	—	黒	良好
	9	33	6トレ	1層	黄褐色	盤	—	—	—	黒	良好
	10	33	2トレ 中	ビットの 中	青花		—	5.8	(1.1)	黒	良好
	11	33	1トレ	1層	青花	皿	(18.0)	—	—	黒	良好
	12	33	仮称 池	表採	偏前傾	壺	9.6	—	(19.1)	やや青	良好
	13	33	仮称 池	表採	偏前傾	壺	(10.0)	—	(12.6)	黒	良好
	64	1	33	7トレ	2層土面	偏前傾	埴跡	—	14.3 (7.3)	砂粒を 多く含む	良好
	2	33	2トレ	1層 表土	偏前傾	埴跡	—	—	—	黒	良好
	3	33	仮称 池	表採	灘河盤	火鉢	—	23.4	(13.5)	黒	良好
	4	33	建物2 西側の棟	表採	合子	身	(12.9)	—	2.9	黒	良好
	5	33			土鏡	か?	—	—	—	砂粒を 多く含む	良好
	6	33	4トレ	1層 表土	土鏡	—	—	(3.3)	—	砂粒を 多く含む	良好
	7	33	建物2 北側	表土	地元産	土鏡	—	—	—	砂粒を 多く含む	良好
	9	33	耕土		白磁	碗	—	—	—	黒	良好
	10	33	2トレ	1層 表土	青磁	碗	—	—	—	黒	良好
	11	33	8トレ		白磁	四口壺	—	—	—	黒	良好
	12	33		表土	青磁	皿	—	—	—	黒	良好
	13	33	6トレ	1層	青磁	碗	—	—	—	黒	良好

14	33	7トレス		初期胸器	透	—	—	—	密	良好		灰褐色	12世紀	
15	33			初期胸器	透また は鉢	—	—	—	密	良好		暗褐色		
65	1	34		表土	重底器	長頸瓶	(5.6)	—	(6.8)	砂粒を 多く含む	良好	回転ナデ	暗褐褐色	
2	34	仮設 滲 6トレス?		表探	重底器	短頸瓶	—	(5.5)	(5.1)	黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	16世紀
3	32	3トレス			土器器	近高台	—	—	(2.7)	黒	良好	回転ナデ	赤褐色	
4	32	8トレス (3トレス組)			土器器	柱状高台	—	(8.4)	(3.0)	黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色
5	32	6トレス	1層	土器器	杯	16.3	6.4	4.6	黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色	底部外縁に2cm幅の板 状の瓦版あり
6	32	8トレス (3トレス組)	3層	土器器	杯	—	6.6	(2.1)	黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色	
7	32	6トレス	1層	土器器	小皿	8.0	4.3	2.3	黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	暗褐色	内面底部にナデの跡 が良く残る
8	32			土器器	小皿	7.9	3.4	1.7	砂粒を 含む	良好	回転ナデ	回転ナデ	赤褐色	
9	32	6トレス	1層	土器器	皿	12.0	9.1	2.0	黒	良好	回転ナデ	回転ナデ	暗褐色	
10	32	6トレス	1層	土器器	杯	11.2	4.4	2.3	黒	良好	口部はつまんで横ナデか? 底部外縁に瓦	底部外縁に瓦	白相	手づくね 京都系土器師か?

本覺坊跡 瓦

本覺坊跡 石製品

排固 番号	回収 番号	トレーナー	遺構 グリッド	層位	種別	文様	計測値 (cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
64	8	33	建物2 北側	表土		石臼	(3.7)	—	(1.7)	下臼 壁状の受けが付く 茶白か?

本質坊跡 古戰

單位：mm

辨別 番号	回版 番号	トレンチ ダーリッド	構造 別位	銘種	外径		内径		孔の形		厚み		重積(g)	
					A	B	C	D	F	G	H	I		
66	6	34	5トレ <small>往物 1 往物 2</small>	1層	治平元宝	23.20	23.20	19.20	19.10	6.70	1.4	1.3	1.2	2.4
	7	34		1層	寛永通宝	23.40	Z3.40	18.50	18.60	7.70	1.4	1.2	1.3	2.8

南門院跡・宮城院跡 鉄磁器・土器

種類 番号	固有 番号	トレンチ 道構 グリッド	層位	縦別	器種	計測値 (cm)			歯土	焼成	調整	色調	備考
						口径	底径	高さ					
71	2	35	2トレ	9層 No.13	青花	碗	—	5.6 (0.9)	黒	良好		白灰色に暗青色の文様	福岡県宗像 C群 16世紀頃 鉢底直
	3	35	1トレ	4層上部 No.8	青花	小皿	(11.3)	— (1.5)	黒	良好		白灰色に暗青色の文様	足見みは日光 銘利賀 高台付
4	35	2トレ	6層 No.13	石見焼	碗	—	(8.0) (2.0)	黒	良好		灰褐色	灰熱を受けている 内側に黒い色	被熱により変色
5	35	1トレ	1層	青磁	碗	(14.8)	— (3.3)	黒	良好		暗緑色	黒窓堂 D堆 15世紀 釉が厚い	
6	35	1トレ?		1層	越前焼	甕	— (2.7)	砂利を含む	良好				
7	35	1トレ?		2層	備前焼	甕	(10.6)	— (7.6)	砂利を含む	良好		茶褐色・海老茶色	

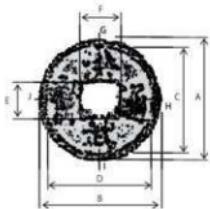
	8	35			龜山・ 鷹間山	甕	—	—	—	印松を含む	良好		暗褐色	
	9	35	6 トレ		1層	白磁	鏡	—	—	—	密	良好		苔斑底 12世紀前後
	10	35	1 トレ		3層	青磁	鏡	—	—	—	密	良好		鹿原窯 C群2類 密文 15世紀

東門院跡・覺城院跡 瓦

測定番号	開版番号	トレンチ	遺構グリッド	部位	種別	文様	計測値 (cm)			重量 (g)	備考			
							長さ	幅	厚さ					
71 1	35	6 トレ	SD3203		軒棟瓦		29.6	27.4	1.8	(2005.9)	いぶし瓦 左残瓦 被熱を受ける 備付着			

東門院跡・覺城院跡 古銭

測定番号	開版番号	トレンチ	遺構グリッド	部位	鉢橋	外径	内径			孔の形	厚み			重量 (g)
							A	B	C		G	H	I	
71 11	35	2 トレ		6層	寛永通宝	24.50	23.80	18.80	17.60	6.30	1.3	1.1	1.1	2.7



錢貨の測定位置

## 図 版





積迦堂（修理前・南から）



積迦堂解体後 確認状況（清掃前・南西から）

図版2 積迦堂2



積迦堂解体後 確認状況（清掃後・北東から）



基壇トレンチ調査状況（南西から）



基壇調査状況（アナグマ巣穴部分・南から）



礎石（い三）構造確認状況（南から）



溝SD303確認状況（北から）

図版4 釈迦堂4



溝 SD303 確認状況（北東から）



溝 SD301 確認状況（西から）



溝 SD301 整備状況（西から）



護摩堂跡 調査前の状況（南東から・右の建物は根本堂）



護摩堂跡建物 SB551 確認状況（東から）

図版6 護摩堂跡 2



1 トレンチ 第1遺構面確認状況（北から）



1 トレンチ 土坑SK502 確認状況（北から）



2トレンチ 第1遺構面確認状況（西から）



2トレンチ 第1遺構面確認状況（東から）

図版8 護摩堂跡 4



3 トレンチ 第1遺構面確認状況（北西から）



4 トレンチ 第1遺構面確認状況（南西から）



4トレンチ 第2遺構面確認状況（南東から）



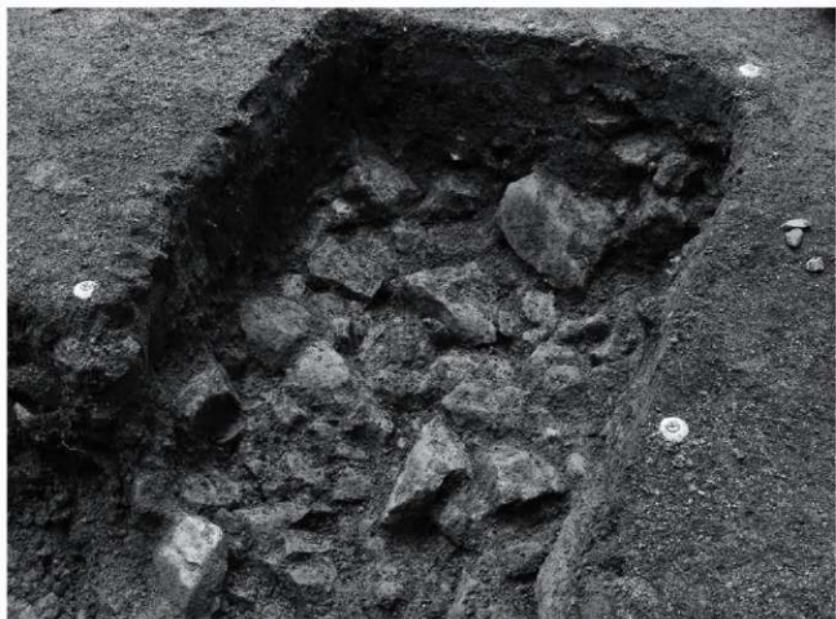
4トレンチ 下層被熱層確認状況（北西から）



4トレンチ 第2遺構面確認状況（西から）



4 トレンチ 第2遺構面基礎石 SS552 確認状況（南東から）



4 トレンチ 第2遺構面集石 SX555 確認状況（南西から）



護摩堂前 調査前状況（南東から）



護摩堂跡 調査状況（東から）

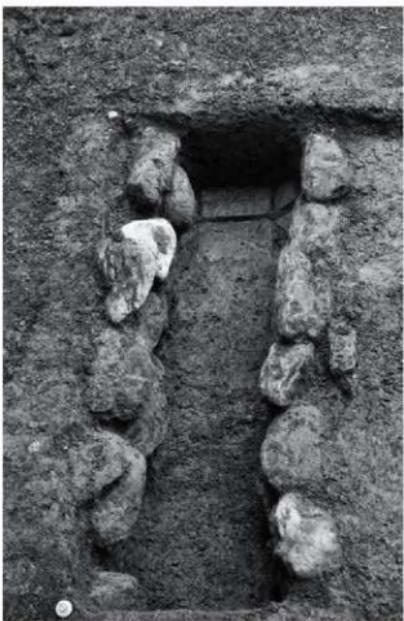
図版 12 護摩堂前 2



護摩堂前 調査状況（南東から）



5 トレンチ 溝 SD901 確認状況（西から）



6 トレンチ 溝 SD901 確認状況（西から）



7 トレンチ調査状況（東から）



7 トレンチ確認状況（西から）



5 トレンチ（南側）確認状況（東から）

図版 14 開山堂 1



開山堂 調査前の状況（北から）



1 トレンチ調査状況（西から）



SP2803-SP2804 検出状況（北から）



石段北側 瓦集中地点調査状況（南東から）

図版 16 開山堂 3



5 トレンチ 基壇確認状況（東から）



4 トレンチ 基壇確認状況（東から）



4 トレンチ 溝 SD2802 瓦出土状況（東から）



本覚坊跡 平坦面の確認状況（清掃前・南から）



本覚坊跡 平坦面の確認状況（清掃後・北から）



セメント瓦 出土状況（南から）



セメント瓦 出土状況（南から）



建物 SB2701 確認状況（南から）



建物 SB2702 確認状況（南から）



2 トレンチ 遺構確認状況（南から）



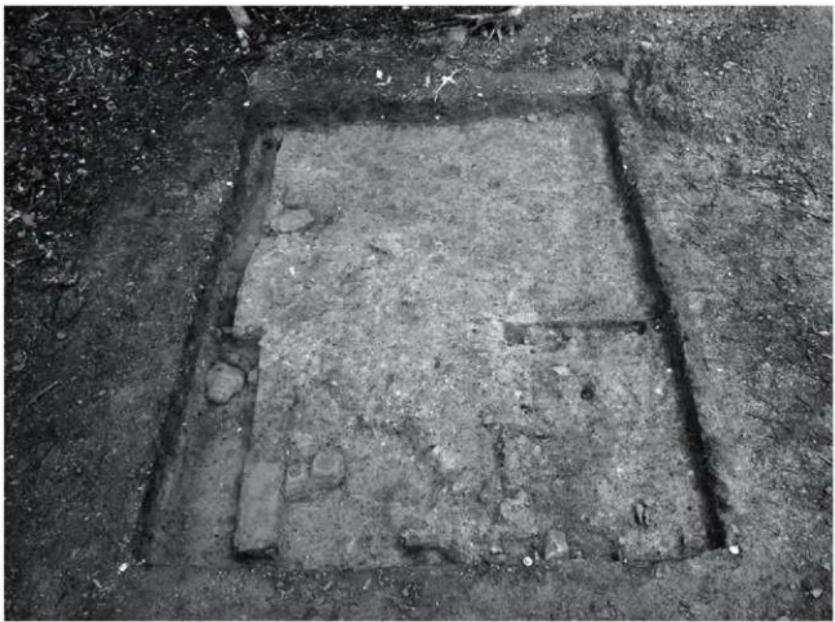
4 トレンチ 溝 SD2703 確認状況（南から）



5 レンチ 磂石 SS2704 調査状況（南から）



6 レンチ 調査状況（南西から）



10 トレンチ確認状況（南から）



3 トレンチ西端 確認状況（南から）



調査状況（西から）



調査状況（南東から）



調査状況（北から）



恵門院跡・覺城院跡 調査前の状況（南から）



東側の石垣 SX3204 確認状況（南東から）

図版 24 恵門院跡・覺城院跡 2



北トレンチ調査状況（南東から）



北トレンチ調査状況（北西から）



北トレンチコンクリート歩道

SX3202 確認状況（東から）



北トレンチ確認状況（東から）

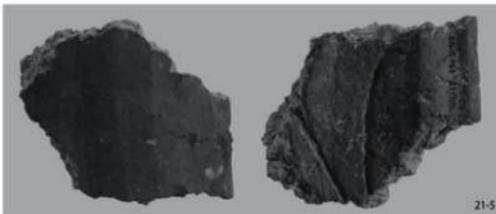


南トレンチ確認状況（南東から）

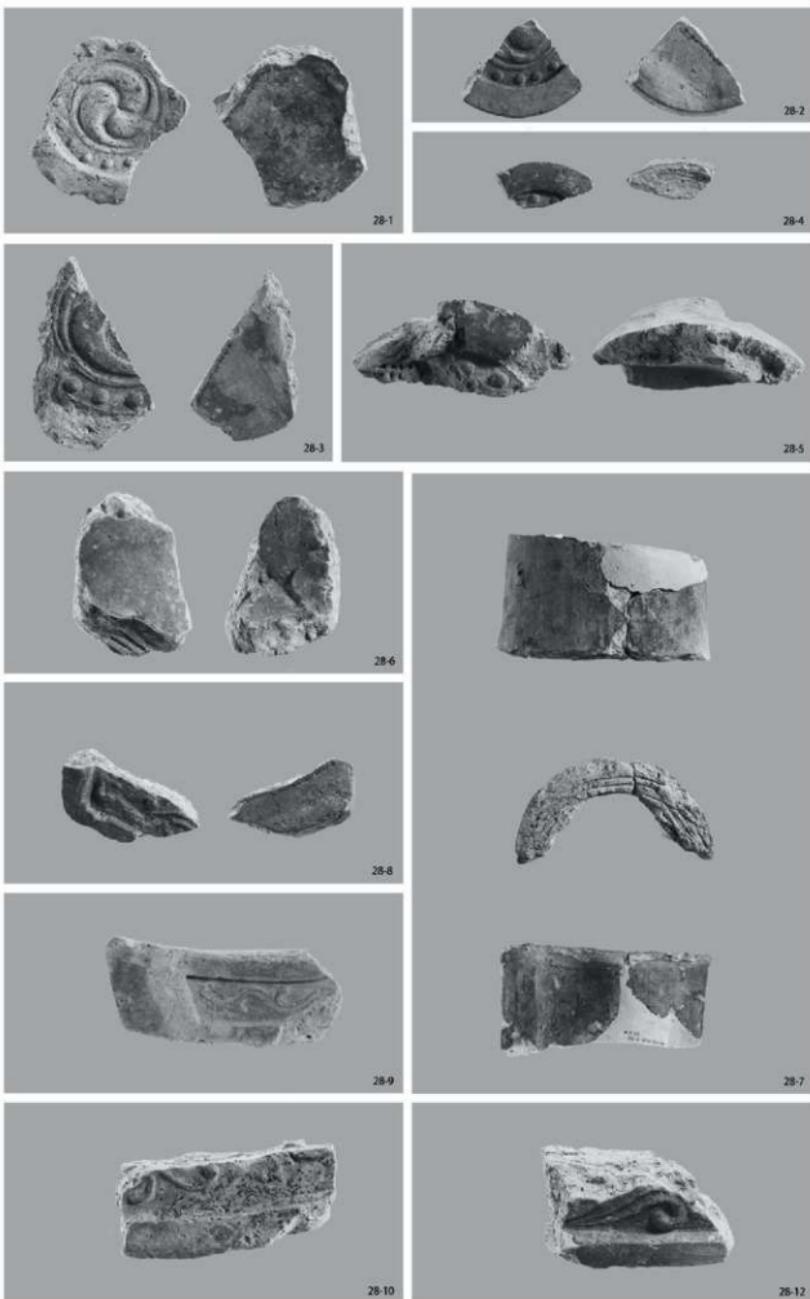


北トレンチ確認状況（西から）

図版 26 积迦堂 出土遺物 1・護摩堂跡 出土遺物 1

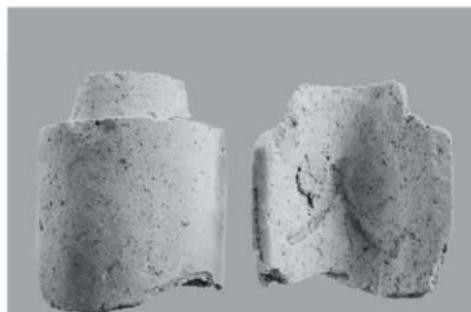


积迦堂 瓦類 (21-1 ~ 7)・護摩堂跡 土師器・陶器 (27-1 ~ 29)

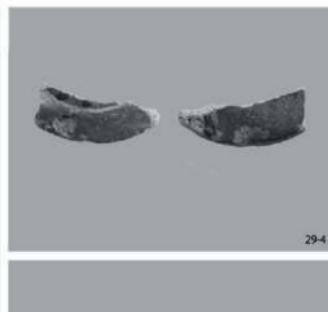


護摩堂跡 瓦その 1

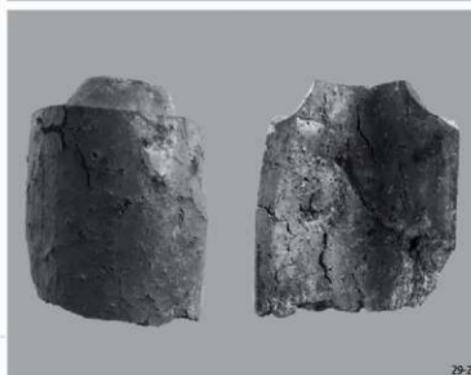
図版 28 護摩堂跡 出土遺物 3



29-1



29-4



29-2



29-6



29-7



30-1



29-11



30-2

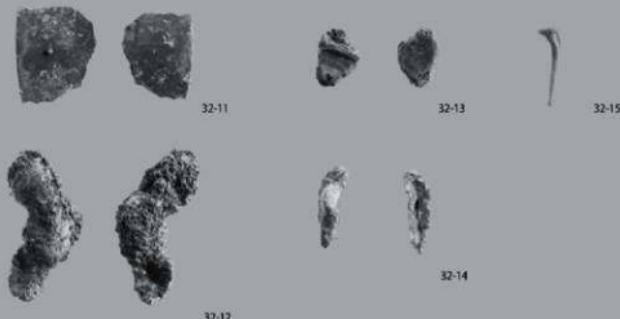
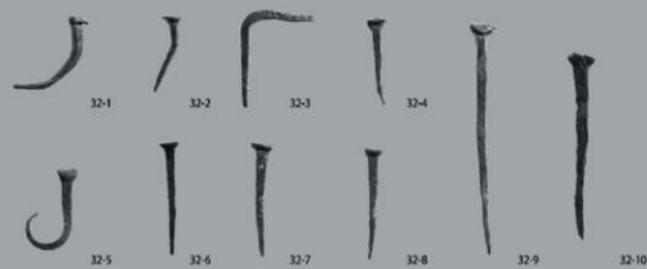


31-1



31-2

図版 30 護摩堂跡 出土遺物 5・護摩堂前 出土遺物 1



護摩堂跡 鉄釘 (32-1～10)・銅製品 (32-11～15)・鐵滓 (32-16～18)・護摩堂前 瓦 (31-3)



48-1



48-2



49-5



50-1



49-3



49-4



49-6



65-3



65-4



65-5



65-6



65-7



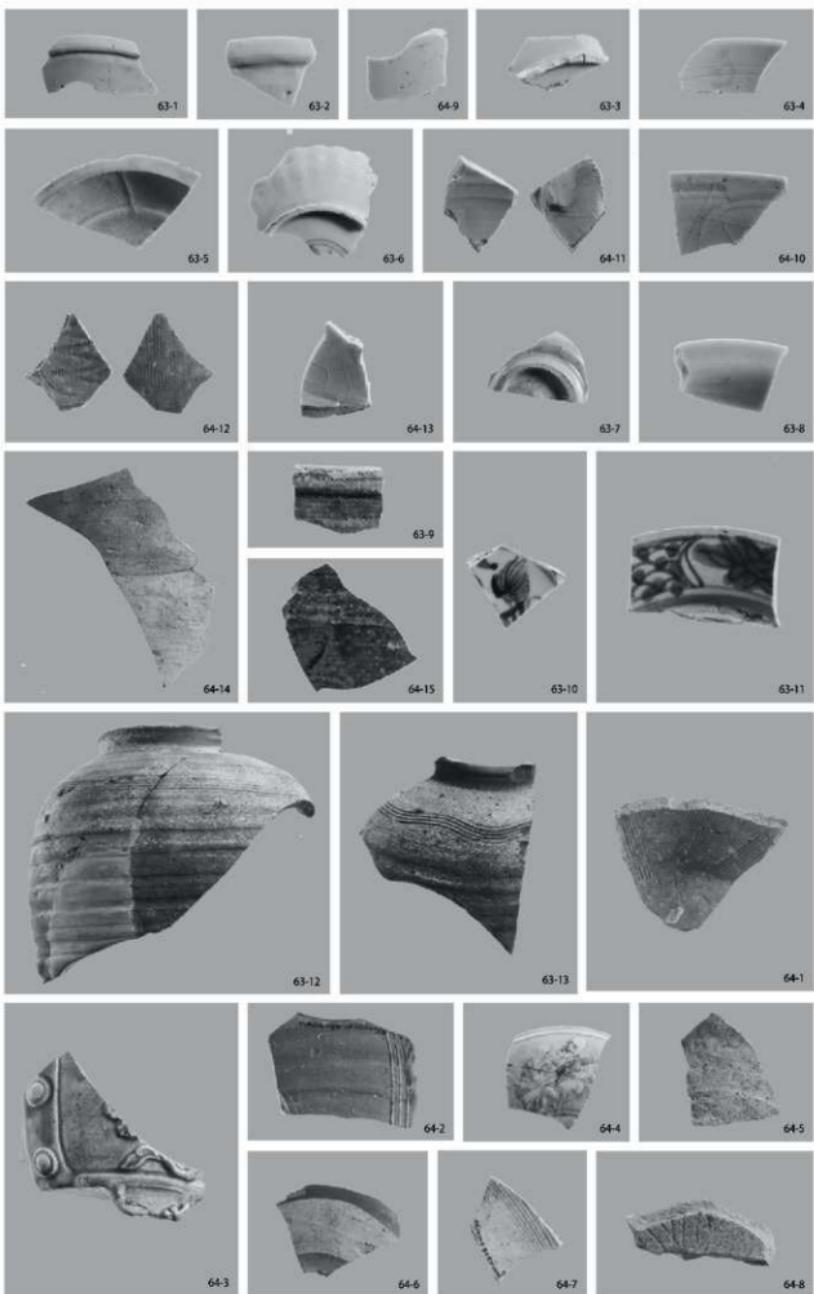
65-8



65-9



65-10



図版 34 本覚坊跡 出土遺物 3



65-1



65-2



66-1



66-2



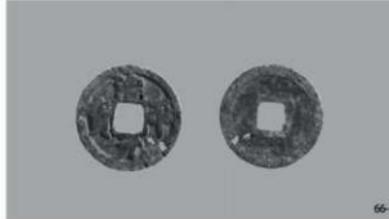
66-3



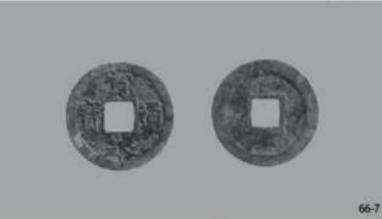
66-4



66-5



66-6



66-7



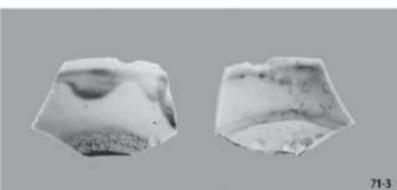
71-1 (表)



71-1 (裏)



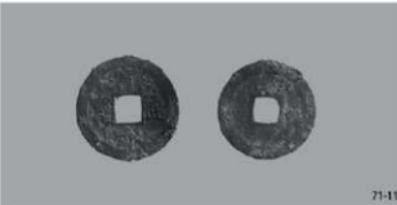
71-2



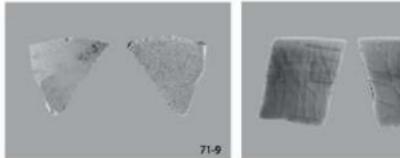
71-3



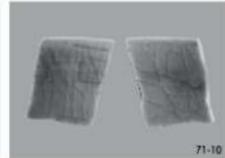
71-4



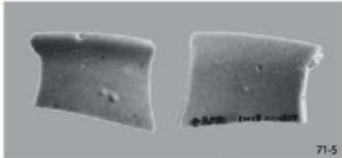
71-11



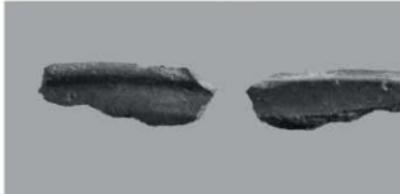
71-9



71-10



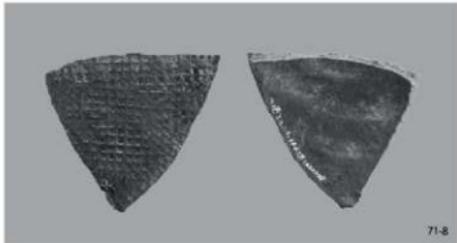
71-5



71-6



71-7



71-8



## 報告書抄録

出雲市の文化財報告 49

## 史跡鰐淵寺境内発掘調査報告書 1

2022年3月 印刷

編 集 出雲市市民文化部文化財課  
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760  
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会  
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70  
TEL (0853) 21-6874

印 刷・製 本 有限会社 福間秀文堂